

映画音楽のおと

かたすみの映画小屋

EXTRA



Santapapa

はじめに

映画は総合芸術でありながら、意外に音楽について語られることが少なく、また出版されている書籍もさほど多くはありません。しかしながら、映画音楽が作品に与える影響は思われている以上に大きいものです。映画を見終わった後も音楽から映画の余韻や場面を思い出すことも楽しみのひとつで、特にビデオなどが普及していない時代は大きな助けにもなったものでした。また、サウンドトラックなどの曲を音楽単体で聴いても素晴らしいものが多く、それがきっかけで映画を見たくなることもあります。

そんな映画音楽を愛するひとつの手助けになることができれば、こんなにうれしいことはありません。

この電子書籍は2004年9月から2006年8月まで運営していたブログ「かたすみの映画小屋」の中から映画音楽に関係の深いエントリーを取り出し、一部を新たに書いて再編集したものです。前半は好きな映画音楽作曲家の簡単な紹介と、それにまつわる映画の簡単な紹介、後半は音楽にまつわる映画の簡単な紹介となっています。ブログ掲載時には各作曲家の作品リストにリンクを貼っていましたが、ここではデータベース的な意味合いはあえて重視していませんので、雑文コラム集ととらえてくだされば。

目 次

はじめに

目次

1. 【ヘンリー・マンシーニ】

- ・ 映画メモ『ひまわり』
- ・ 映画メモ『酒とバラの日々』
- ・ 映画メモ『グレート・レース』
- ・ 映画メモ『料理長（シェフ）殿 ご用心』
- ・ 映画メモ『ピンクの豹』
- ・ 映画メモ『暗闇でドッキリ』
- ・ 映画メモ『ピンクパンサー3』
- ・ 海外ドラマメモ『刑事コロンボ』

2. 【ジェリー・ゴルドスミス】

- ・ 映画メモ『スーパーガール』
- ・ 映画メモ『チャイナタウン』
- ・ 映画メモ『カサンドラ・クロス』

3. 【伊福部昭】

- ・ 映画メモ『銀嶺の果て』
- ・ 映画メモ『ゴジラ (1954)』
- ・ 映画メモ『大魔神』
- ・ 映画メモ『大魔神怒る』
- ・ 映画メモ『大魔人逆襲』
- ・ 映画メモ『座頭市物語』

- ・映画メモ『座頭市血煙り街道』
- ・映画メモ『わんぱく王子の大蛇退治』

4. 【ラロ・シフリン】

- ・映画メモ『燃えよドラゴン』
- ・映画メモ『マニトウ』
- ・映画メモ『深海征服』

5. 【ジョン・ウィリアムズ】

- ・映画メモ『スター・ウォーズ（新たなる希望（エピソードⅣ））』
- ・映画メモ『スター・ウォーズ（帝国の逆襲（エピソードⅤ））』
- ・映画メモ『スター・ウォーズ（ジェダイの復讐（エピソードⅥ））』
- ・映画メモ『未知との遭遇』
- ・映画メモ『スーパーマン』
- ・映画メモ『スーパーマンⅡ 冒険篇』
- ・映画メモ『A.I.』

6. 【林光】

- ・映画メモ『日本フィルハーモニー物語 炎の第五楽章』

7. 【フランシス・レイ】

- ・映画メモ『白い恋人たち／グルノーブルの13日』
- ・映画メモ『華麗なる対決』

8. 【A.R.ラフマーン】

- ・映画メモ『ムトゥ 踊るマハラジャ』
- ・映画メモ『パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ！』
- ・映画メモ『ボンベイ』

- ・映画メモ『インドの仕置人』
- ・映画メモ『ラガン』
- ・映画メモ『ヘブン・アンド・アース』

9. 【バート・バカラック】

- ・映画メモ『幸せはパリで』
- ・映画メモ『マクティーンの絶対の危機（ピンチ） 人喰いアメーバの恐怖』

10. 【ダニー・エルフマン】

- ・映画メモ『ピーウィーの大冒険』
- ・映画メモ『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』
- ・映画メモ『バットマン』
- ・映画メモ『バットマン リターンズ』
- ・映画メモ『マーズ・アタック！』
- ・映画メモ『ミッドナイト・ラン』

11. 【ジョン・バリー】

- ・映画メモ『007／黄金銃を持つ男』
- ・映画メモ『007は二度死ぬ』

12. 【マーク・アイシャム】

- ・映画メモ『クール・ワールド』
- ・映画メモ『遠い空の向こうに』

13. 【ビル・コンティ】

- ・映画メモ『ハリーとトント』
- ・映画メモ『ロッキー』

14. 【ヴァンゲリス】

- ・映画メモ『ブレードランナー』
- ・映画メモ『ミッシング (1982)』
- ・映画メモ『南極物語 (1983)』

15. 【ヴィクター・ヤング】

- ・映画メモ『シェーン』
- ・映画メモ『腰抜け二挺拳銃』

16. 【金培達 (ピーター・カム)】

- ・映画メモ『星願～あなたにもう一度』
- ・映画メモ『東京攻略』
- ・映画メモ『シルバーホーク』
- ・映画メモ『芭[口拉]芭[口拉]櫻の花』

17. 【武満徹】

- ・映画メモ『天平の躰』

18. 【エルマー・バーンスタイン】

- ・映画メモ『大脱走』
- ・映画メモ『サボテン・ブラザーズ』
- ・映画メモ『ヘビー・メタル』

19. 【エンニオ・モリコーネ】

- ・映画メモ『海の上のピアニスト』

20. 【ジョニー・マンデル】

- ・映画メモ『M★A★S★H マッシュ』

21. 【ニーノ・ロータ】

- ・映画メモ『ナイル殺人事件』6

22. 【バーナード・ハーマン】

- ・映画メモ『鳥』
- ・映画メモ『地球の静止する日』
- ・映画メモ『華氏451』

☆ 【関光夫】

● お気に入りの音楽映画 12

サルサ！

マンボ・キングス わが心のマリア

ブルース・ブラザーズ

ブルース・ブラザーズ2000

五つの銅貨

あの頃ペニー・レインと

スティル・クレイジー

ハイ！ロンドン

青春デンデケデケデケ

北京ヴァイオリン

オーケストラの少女

ブラス！，

● お気に入りのミュージカル 12

テキサス1の赤いバラ
努力しないで出世する方法
ウエスト・サイド物語
メリー・ポピンズ
マイ・フェア・レディ
サウスパーク 無修正映画版
ダウントウン物語
ウィズ
シャー・ルク・カーンのDDLJ／ラブゲット大作戦
ドリトル先生不思議な旅
リトル・ショップ・オブ・ホラーズ (1986)
ピンク・フロイド ザ・ウォール

● お気に入りの音楽ドキュメント／ライブ 18

サラヴァ
ポプラル!
ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ
永遠のモータウン
ジョイフル・ノイズ
炎のジプシー・ブラス 地図にない村から
ベルリン・フィルと子供たち
Touch the Sound そこにある音
テルミン
moog
ウッドストック／愛と平和と音楽の三日間
真夏の夜のジャズ
CALLE 54(カジェ54)
SUPER FOLK SONG ピアノが愛した女。
YMO PROPAGANDA
レッド・ツェッペリン 狂熱のライブ
ストップ・メイキング・センス
コヤニスカッティ

【ヘンリー・マンシーニ】

ヘンリー・マンシーニ（Henry Mancini）。私の一番好きな映画音楽の作曲家です。私は20世紀最高の作曲家の一人だとも思っています。

1924年4月16日、USAはオハイオ州クリーヴランド生まれ。本名はEnrico Nicola Mancini。父親はオーケストラのフルート奏者で、ヘンリー・マンシーニもその影響で5歳の頃からピッコロを吹き始め、8歳でフルート、そして12歳でピアノを学んだそうです。カーネギー学院の音楽科、ジュリアード音楽院を経て1945年にはグレン・ミラー楽団にアレンジャー兼ピアニストとして入団します。次第に映画音楽に傾倒したヘンリー・マンシーニは、1952年にユニバーサル・スタジオに入社してジョセフ・ガーシェンソンの下で『グレン・ミラー物語』や『ベニイ・グッドマン物語』などの音楽に参加、その後TV映画『ピーターガン』の音楽が大評判になり、『ティファニーで朝食を』でアカデミー賞を受賞、ハリウッドを代表する映画音楽家として有名になっていきます。1994年6月14日に病気により70歳の生涯を閉じました。

『ひまわり』もヘンリー・マンシーニの代表曲のひとつですが、音楽が非常に印象的な映画のひとつです。粗筋だけとってみれば単なるメロドラマに近いものがあるストーリーですが、あの野原一面のひまわりの映像とヘンリー・マンシーニの音楽がこの映画を名画に昇華したように思えます。ピアノのアルペジオとテーマに始まり、ストリングスが滑り出した瞬間の広がりマンシーニならではのアレンジではないでしょうか？

ジャズのスタンダードとして演奏もされる『酒とバラの日々』も美しいハーモニーの名曲です。一見優美に見えるタイトルのせいか、結婚式でも演奏されることがある曲ですが、映画はアル中でボロボロになって破局する夫婦の話なんで本当は冠婚で演奏するにはかなりヤバイ曲です（苦笑）。うちの結婚式では『酒とバラの日々』禁止令を出したので、イエスやキング・クリムゾンなどの曲を演奏するはめに（苦笑）。

『グレート・レース』のタイトルバックで、ディキシー風の朗らかな演奏から一転ロマンティックなコーラスになるテーマもヘンリー・マンシーニならではのウィットに富んだ曲でした。曲中でもギター1本で歌われるメイン・テーマがまた叙情感豊かがいいんですよ。

編曲が豪華なことでは『料理長（シェフ）殿 ご用心』も素晴らしいタイトルバックでした。日本のCMでも使われたこともあるこのタイトルバックは、聞けば「ああ、あれか？」と思う人も少なくないでしょう。また、劇中のヒロインのライトモチーフ、ナターシャのテーマは名曲『ひまわり』をさわやかにしたような曲で美しい佳曲です。映画の中で使われていないサウンドトラックの同曲では、叙情的なピアノのイントロに始まりストリングスが滑り込んでくる瞬間にはあっと音が広がる感覚はヘンリー・マンシーニの卓越した編曲とメロディによるもの。ベスト盤に

も入れてほしい曲なんですけどね。

そして外せないのはクルーザー警部の活躍を描いた『ピンクパンサー』シリーズ。ヘンリー・マンシーニは長きに渡るこのシリーズの音楽も務め、あの有名になったテーマを作品ごとに趣向を凝らしたアレンジを施しているところも聞き所です。

T Vシリーズだと米NBCで放送されていた「Mystery Movie」シリーズのテーマ曲は、日本でNHKが『刑事コロンボ』を放映する際に使っていたので。「ああ、あの曲！」と思い出す人も多いでしょう。重厚なイントロに続いて口笛風のシンセサイザーでのテーマが印象的です。

ヘンリー・マンシーニの曲に接していて思うのは、まずメロディの美しさ。そして、巧みなアレンジによる豊かなサウンドです。『Sounds and Scores: A Practical Guide to Professional Orchestration』というカセット付（今はC D付）のマンシーニのアレンジ手法を記した本があるのですが、なるほど楽譜を見ながら音を聴くと「あのサウンドはこういうアレンジだったのか」と納得がいきますが、それを作り上げたヘンリー・マンシーニにはただただ脱帽するばかり。他人の曲でも、例えばヘンリー・マンシーニ楽団で『チャールズ・エンジェルのテーマ』を演奏していますが、サンタパパ的にはT V版も最近の映画版も比にならないくらい気に入ってるかっこいいアレンジです（ベーシストが適当にルーズだったりしますが、それもかっこいい（笑））。このアレンジは気に入っていたようで、L Dで出ていた「Henry Mancini And Friends」というカナダでのライブ・ビデオでも、オープニングで演奏しています。

今となっては少し古臭いサウンドになるのかもしれませんが、ぜひとも後々まで名前を覚えておいてほしい素晴らしい作曲家だと思います。

・映画メモ『ひまわり』

夏に大きな花を咲かせる黄色い舌状花をもつひまわりは、世界中で太陽の象徴としての名前がついています。

第二次大戦の暗い影がおちはじめたイタリアはナポリで、貧しいお針子のジョバンナ(ソフィア・ローレン)と電気技師のアントニオ(マルチェロ・マストロヤンニ)は、海岸で出逢って恋におちます。ふたりが結婚式をあげた時には、アントニオが徴兵される日までもう2週間しかなく、ジョバンナと離れたくないアントニオは陽狂を装います。しかしそれがばれたために酷寒のソビエト戦線に放り込まれ行方不明になってしまいます。戦後になってアントニオの母(アンナ・カレーナ)と暮していたジョバンナは、最後にアントニオに会ったという復員兵(グラウコ・オノラート)の話の聞いて、ひとりソビエトにアントニオを探しに出かけます……。

ストーリーだけを追って見れば、運命に翻弄されるただのメロドラマです。私自身はあまりお涙頂戴もののメロドラマは好きではなく、親が「いい映画だったから」と言っていた言葉を思い出して、たまたま学生時代に名画座でやっていたのを見に行きました。実際に目にした映画は、筋立てはまさに戦争に引き裂かれた女と男のメロドラマでした。しかし、スクリーンから目を離すどころか映画の中に引き込まれ、最後の駅のシーンでは不覚にも涙がにじんでしまった作品です。その後、見る機会がある度にじわじわと心に沁みてくる映画となりました。

この映画は何度も見ると、同じ駅でのシーンや約束したおみやげ、割れた鏡に映る2人の姿など、本当に脚本を練っていて、丁寧に作られた作品だなと思います。一番印象的なのは映画のタイトルにもなっている一面のひまわり畑ですが、その前の極寒のロシア戦線との対比がより風景を印象深くしています。またソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニの演技にもすばらしいものがありました。

中でもこの映画の素晴らしさはヘンリー・マンシーニが作った主題曲にあると言えるでしょう。かつては映画音楽特集があればかなりの確率で聴くことができたこの曲が、この映画であげている効果は計り知れません。逆にいえばこの映画の主題曲が、もし他の曲であったらかなり印象が変わってしまったでしょう。『ひまわり』と言えど即座にメロディが浮かぶぐらい、切っても切れないものになっているのではないのでしょうか。

【ひまわり (Sunflower) 1970年 イタリア】

・映画メモ『酒とバラの日々』

時を経てだんだん味わいが増すお酒のように、味わいが増していく映画というのがありますが、『酒とバラの日々』は私にとってそういう映画のひとつです。

サン・フランシスコにある宣伝会社に務める酒好きのジョー・クレイ(ジャック・レモン)は、パーティの企画で得意先の会社の秘書カーステン・アーセン(リー・レミック)と出会います。最初は勘違いでカーステンを怒らせてしまったジョーですが、詫びて食事に誘ったのを気に急速に仲良くなっていきます。チョコレートが大好きでお酒が飲めないカーステンにジョーはお酒の味を教えたり、カーステンのアパートを訪ねたりして、ふたりは結婚。カーステンは植物園を営する一人暮らしのエリス(チャールズ・ビックフォード)にジョーを紹介しますが、父はコーとの結婚にあまりいい顔をしませんでした。幸福な月日が流れて、ふたりの間にはデビー(デビー・メグワン)という女の子も生まれて新婚生活は順風満帆と思われましたが、ジョーの酒量は次第に増えて、仕事にも差しさわりが出るようになります。カーステンも家で当り散らすようになったジョーにつき合っただんだんお酒を飲むようになっていきます……。

ブレイク・エドワーズ監督による1962年の映画でこれ以降はだんだんコメディが主体になっていきますが、『酒とバラの日々』では社会派の一面も見せた映画です。

またこの映画を機にジャック・レモンは性格俳優として名を上げていきますが、この映画での鬼気迫る演技は迫真に満ちて怖さを感じさせます。特にエリスの植物園の温室で夜中に酒を探すシーンや、病院で拘束されているシーンなどは、あまりの迫力に見ている方が痛々しい気持ちになるような場面です。同様にリー・レミックもチョコレートが大好きな乙女から、次第にお酒が手放せなくなるようになる変化を見事に演じています。

アルコール依存症をテーマにした痛々しい物語なのですが、映画の根底に流れているのが夫婦の情愛で、そのどうしようもない部分に心が締めつけられます。映画の中で何度か出てくるカーステンの両親から聞いたという乾杯の文句の意味と、デビーの存在がまたそれに深みを与えています。母が若い頃にこの映画を見た時に「バカバカしい。すぐに別れればいいのに」と思ったそうですが、夫婦生活が長くなってから見て、この映画に対する印象は大きく変わったそうです。同じように、私も若い頃に見た時と結婚してから見た時とでは、印象がだんだん変わってきました。今日でまたひとつ歳を重ねたのですが、歳をとるということはまた経験によって1年分の何かを得ることではないかと私は思っています。

音楽はヘンリー・マンシーニ。美しいテーマ曲はアカデミー賞を受賞、スタンダードとしても人気があります。この美しいテーマ曲が凄惨な話と相まって効果を大きく上げています。以前にも書きましたが、タイトルと曲の美しさからよく結婚式なんかでも演奏されたりするのですが、映画の内容を知っている者にとってはちょっと考えてしまいますよね。

【酒とバラの日々 (Days of Wine and Roses) 1962年 USA】

・映画メモ『グレート・レース』

いつの時代もレースは人の血を熱くさせてくれるものです。自動車レースをテーマにしたものは、『栄光のル・マン』、『モンテカルロ・ラリー』など多くの映画がありますが、自動車黎明期を舞台にしたアクション・コメディ『グレート・レース』を忘れることは出来ません。

20世紀の初頭、冒険家のレスリー(トニー・カーティス)は数々の困難に挑戦をしてみせて、それを成功させます。それを面白く思わないフェイト教授(ジャック・レモン)は部下のマックス(ピーター・フォーク)と共に持ち前の悪知恵で冒険に挑戦したりレスリーの妨害をしますが、いつも失敗してばかり。そんな時、自動車の優秀さを世に示そうと、ニューヨーク=パリ間の大自動車レースが企画されます。レスリーとフェイト教授を始め、取材に大ハリキリの女性新聞記者マギー(ナタリー・ウッド)も参加。ここに長い珍レースの火蓋が切られます……。

この頃のブレイク・エドワーズ監督は『ティファニーで朝食を』(1961)、『酒とバラの日々』(1962)、『ピンクの豹』(1963)、『暗闇でドッキリ』(1964)とノリに乗った感じで次々に映画を世に送り出していました。この映画はトーキー初期の頃を意識したレトロ調のオープニングで、ヘンリー・マンシーニの音楽が花を添えています。

映画の中でのキャラクター分けの極端さがすごいです。トニー・カーティス扮する主人公レスリーは常に真っ白な衣装で歯がキラリと光ります(笑)。これに対抗できるのは、『月夜の願い』で目から秋波光線をだすトニー・レオンぐらいじゃないでしょうか?しかもなにをやってもそつなく成功するのみならず、スラップスティックの古典の定番・10人ぐらいが入り乱れるパイ投げのシーンでは、パイが飛び交う真ん中にいながら一番最後のあたりまでまったくパイが当たらないという徹底さ(笑)。

対するジャック・レモンのフェイト教授は何もかも黒づくめ。いつもネジが1本はずれたよな悪巧みばかり考えています。しかも何をやっても全部裏目。魚雷が地上を走って追っかけてくるぐらい恵まれていません(笑)。そのくせ、結構プライドが高く敵のほどこしは受けないという側面も持っています。この役をジャック・レモンが、実に嬉々としてやっている雰囲気伝わってきてこっちまで嬉しくなってきました。子供の頃は正義の象徴レスリーを応援しちゃいましたが、大人になってからは断然フェイト教授の味方ですね(笑)。

自動車レースのコメディということで、ハンナ=バーベラのTVアニメーション『チキチキマシン猛レース』の原型みたいな作品ですが、ブラック魔王といつも行動を共にするケンケンに相当するのがフェイト教授の子分であるマックス。後にTVシリーズ『刑事コロンボ』で大ブレイクするピーター・フォークが好演しています。いつも教授に当り散らさせてぼやいたりすねたりしていますが、何かと「マックス!」と名前を呼ぶ教授が実は頼りにしているのを知ってかピンチにはけなげに助けに行きます。

怪気炎をあげながらマイ・ペースでまわりを引っかき回すナタリー・ウッド扮する新聞記者マギーは、正直かなり困ったちゃんなキャラクターなのですが、旬の女優の魅力をふんだんに見せてくれます。ヘンリー・マンシーニの美しいテーマ曲をギター1本で歌うシーンがまた素敵です。

尺がかなり長いのが玉に瑕ですが、古きよき時代の香りがする映画です。

【グレート・レース (The Great Race) 1965年 USA】

・映画メモ『料理長（シェフ）殿 ご用心』

今はグルメの時代とも言われ、世界中のありとあらゆる料理のほとんどを日本にしながら食べることができるような世の中です。昔は今ほど経済的に豊かではなかったし、情報量もあまり多くなかったので海外の、それも豪勢な料理は夢のまた夢でした。食い意地がはっていたもんですから、夢の中でここがチャンスとばかりに食い続けて「もう食べられないよお」とおなかを抱えたことも数え切れません（←ベタですが本当です）。

イギリス王室晩餐の主催者であり料理雑誌の出版社を経営する美食家マックスは、世界最高のシェフ4人を集めて晩餐会を開きます。ところがその後で、その晩餐会で腕を振るったシェフが1人、また1人と殺されていきます。しかもそのシェフが最も得意とする調理法で殺されてしまうのです。次々に襲いかかる魔の手から、シェフは逃げることができるのか……。

と書くと恐怖のサスペンス映画みたいですが、かなりコメディ色の強い映画です。それに加えておいしそうな料理が山ほどあり、ラブ・ロマンスがちょっぴりあり、セクシーな描写ありと、豪華でちょっとシャレたオトナの映画です。イギリスを中心にヨーロッパを回るせいか、あまり雰囲気USAっぽくない感じです。ジョージ・シーガル扮するロビーがナターシャの元夫という設定で、ヨーロッパにオムレツ・チェーンを展開するためにナターシャを口説き落とそうとするのですが、彼を使ってUSAとUKの違いを使ったギャグも入れてたりしますし。

中でも、この映画でのデザート・シェフ、ナターシャを演じたジャクリーン・ビセットの美しさにはKOされましたねえ。初めて空港にナターシャが現れるシーンは、その時に流れるヘンリー・マンシーニの「ナターシャのテーマ」（サウンド・トラックとは別アレンジ）とあいまって印象的な場面になってます。

ヘンリー・マンシーニのこの映画のテーマ曲も豪華絢爛な演奏で、その後CMなんかにも使われたりしていました。映像も当時としては美しく、まさしく満腹になってしまうような映画です。

ちなみに映画のパフレットも豪華な金色の表紙でした。この映画もまだDVDになっていないみたいで、早くDVD化されることを期待したいですね。

【料理長（シェフ）殿 ご用心（Who is Killing the Great Chefs of Europe?） 1978年 USA】

・映画メモ『ピンクの豹』

『ティファニーで朝食を』、『追跡』、『酒とバラの日々』を世に送り出して油が乗っていたブレイク・エドワーズ監督が、一転して撮ったピカレスク・ロマンならぬコメディ。この映画で怪盗ファントムを逮捕しようとして世間に初登場したのが、パリ警察が世界に誇る（???）あのクルーゾー警部です。

某国の王女ドーラ(クラウディア・カルディナーレ)は国の民主化に伴ってヨーロッパに亡命していました。彼女の持つ「ピンク・パンサー」という宝石は、光にかざすと豹の模様が見えるという世にも珍しい宝石です。これを盗もうと画策するチャールズ卿こと大怪盗ファントム(デイヴィッド・ニーヴン)。そしてそれを阻止しようとするパリ警察のクルーゾー警部(ピーター・セラーズ)。さらにはクルーゾー警部の妻シモーヌ(キャプシーヌ)やチャールズ卿の甥ジョージ(ロバート・ワグナー)を巻き込んで、事態は意外な展開になっていきます……。

本来宝石を盗み出す怪盗ファントムを主人公にしたドタバタ・コメディですが、まじめな顔で超ベタなギャグを次々に繰り出すクルーゾー警部がおいしいところを全部持って行っちゃって人気集中。この後遂にはクルーゾー警部を主人公に据えて、ストーリーに宝石「ピンク・パンサー」が出ようと出まいとおかまいなく、「ピンク・パンサー・シリーズ」として映画が作られていき、いろいろとおなじみのキャラクターも増えてきました。

この映画の大きな見所のひとつは、後半の仮装パーティ。ドタバタでオヤクソクなギャグの応酬ですが、ゴリラや花火や金庫やシマウマやカー・チェイスなど、そこはかたないおかしさがたまりません。もうひとつが中盤、ホテルのクルーゾー警部の部屋で見つからないようにチャールズ卿と甥がそれぞれ間男ばりに隠れるところ。ハラハラしてこそばゆい場面です。間男はやったことがないしやる気持ちも全然無いのですが、今は亡き妻と交際を始めた頃は世間的にまだ内緒だったので、下の階に住んでいる弟君が用事で階段を上がってくるとベッドの中や筆筒に必死で隠れたことを思い出します(苦笑)。

この映画で好きなところは、いつもおカタイ顔をしている(←この前提が大事)ドーラ王女がシャンパンで酔ってコケティッシュな魅力を振りまくところ。怪盗ではあっても根は紳士であるチャールズ卿との会話と背景と次々に流れる美しいヘンリー・マンシーニのBGM。泰西名画を見たという満足感が得られるゴージャスでうっとりするようなシーンは、そういえば最近あまり目にしない気がします。洋画の中でのお気に入りシーンのひとつです。

そう、ヘンリー・マンシーニも油が乗りまくっていた時期でしょうか、くだんのBGMのみならずタイトルバックのアニメーションと共に流れる有名になったあのテーマ曲、そしてクラウディア・カルディナーレのプロモーション・ビデオ風にフィーチャーされるエキゾチックなメロディの「今宵を楽しく」など魅力満載です。「今宵を楽しく」のメロディはテーマ曲のメロディに負け

ず劣らず、映画の中のサウンド・トラックで随所に出てきていました。

【ピンクの豹（The Pink Panther） 1963年 USA】

・映画メモ『暗闇でドッキリ』

この作品、ピンク・パンサーの名前が冠についていないので忘れられがちですが、れっきとしたピンク・パンサーのシリーズ、第2作目にあたります。

フランスの大富豪バロン(ジョージ・サンダース)の邸宅で殺人事件が起こります。パリ警視庁のクルーゾー警部(ピーター・セラーズ)が急行したところ、女中のマリア(エルケ・ソマー)が殺したとしてドレフュス署長(ハーバート・ロム)は彼女を逮捕。ところがマリアに一目ぼれしたクルーゾー警部は、彼女は真犯人ではなく誰かを庇っていると独断で決めつけてマリアを釈放して尾行することにします。ところが今度はバロン邸の庭師が殺されて、その場に居合わせたマリアは再び逮捕されます。ところがクルーゾー警部はまたも彼女を釈放して、真犯人を突き止めようとしています……。

『ピンクの豹』の直後に作られたピーター・セラーズ扮するクルーゾー警部が主人公の映画です。この11年後に作られた『ピンク・パンサー2』が2を名乗っているものですから話はややこしくなります。そもそも「ピンク・パンサー」とは『ピンクの豹』に出てくる宝石の名前だったはずなんですけどね。よって、この映画のオープニング・タイトルは実にブレイク・エドワーズ監督らしいアニメーションなんですけど、クルーゾー警部は出てきてもあのピンク色の豹は出てきていません。

ここでもピーター・セラーズは実にお約束でベタなドタバタを演じています。変装して尾行をしようとして捕まってしまうというてんどんは、判っていても面白いです。謎の殺し屋が次々に誤って違う人を巻き込んでしまうのも、またお約束。最後の、推理ものでよくある一同を居間に集めた時に起こる混乱がたまりません。ヌーディスト・クラブでの一悶着もありました。あのヌーディストたちのバンドってかなりシュールです(笑)。

後の作品にも出てくる重要なレギュラーであるケイトーやドレフュス署長が出てきたのも、この作品からですね。どちらもこの映画では物語の中で重要な位置を占めています。特にケイトーは最初から最後まで暴れまわってますね(笑)。

【暗闇でドッキリ (A Shot in the Dark) 1964年 USA】

・映画メモ『ピンクパンサー3』

前年に1年ぶりに復活したクルーゾー警部の活躍する『ピンクパンサー2』の続編です。

所はフランス国立精神病院。退院を間近に控えた元パリ警察主任警部のドレフュス(ハーバート・ロム)は忌々しい部下のクルーゾー警部(ピーター・セラーズ)のおかげでしばらくフランス国立精神病院で過ごしていましたが、退院を間近に控えていました。ところが見舞いに来たクルーゾーがクロケットのタマを打ち、それがドレフュスのひたいに見事に命中。それが原因でドレフュス再び病院のお世話に。我慢できずに病院を脱走したドレフュスは世界的な老科学者を娘共々誘拐して、脅迫によって物質消滅光線を作らせます。そして、クルーゾー警部を抹殺しなければ物質消滅光線を使うと宣言。手始めに国連ビルが消されてしまいます。世界滅亡にあわてた各国は、スパイを使ってクルーゾー暗殺をたくらみます……。

実質は4作目に当たる『ピンクパンサー3』。ブレイク・エドワーズ監督にヘンリー・マンシーニの音楽。そしておなじみピーター・セラーズ扮するクルーゾー警部を始めとしたおなじみの連中が出演しています。

オープニングとエンディングのアニメーションが遊び心いっぱいの名作映画のパロディになっています。リクエストに答えてか、ヘンリー・マンシーニの音楽もその名作の音楽を使って、まるで名作メドレーのような感じです。

話は『007／カジノ・ロワイヤル』でも見ているかのような、ハチャメチャ・スパイ風味が入った映画になっています。なんせ物質消滅光線ですからねえ(笑)。国連ビルが消えていくチープな特殊撮影がとても似合っています。クルーゾー警部も毎度ケイトーと闘ったり、何度も堀に落ちるてんどんも相変わらずだし、笑気ガスを使うという古典的なギャグでも笑わせてくれます。娘の「拷問方法」や同じブレイク・エドワーズ監督の『グレート・レース』を思わせるオルガンのシーンなどもツボでした。

ラストの「Come to me」をバックにしゃぼん玉があふれる、まるで「しゃぼん玉ホリデー」のようなロマンス溢れる場面が素敵ですね(笑)。もちろん、しっかり落ち付き。これを見て長い間自動しゃぼん玉製造機がほしかったものです。数年前に買ったもののまだ使ってみてませんけど(笑)。

【ピンクパンサー3 (The Pink Panther Strikes Again) 1976年 USA】

・海外ドラマメモ『刑事コロンボ』

海外ドラマと言ってまず思いつく作品の中で、70年代を過ごした人の中でまず10本の中には入ってくるであろう作品のひとつは『刑事コロンボ』でしょう。

ロス・アンジェルス市警察殺人課の警部であるコロンボ（ピーター・フォーク）は、殺人現場にポンコツのプジョーに乗って、いつもぼさぼさの髪によれよれの背広とレインコートを着て現れます。一見頼りなさげに見えますが、持ち前の洞察力で知性派を気取る犯人をじわじわと追い詰めていきます……。

『グレート・レース』や『おかしなおかしなおかしな世界』に出ていたピーター・フォークの当り役。90分前後の1話完結式で、毎回、豪華なゲストが知的な犯人として登場して完全犯罪を目論みますが、それをピーター・フォークの扮するコロンボ警部が少しずつ突き崩していきます。最初に犯人の殺人の場面を見せて、そのアリバイを崩してどう解いていくかを見せていく、倒叙式と言われるスタイルが当時の刑事モノの中では大変新鮮でした。真犯人の前ではへりくだって見せておとぼけをかましながらか、時々核心を突く質問で揺さぶりをかけたり、何度もしつこく食いさがつたりして、じわじわと真綿で首を絞めるように捜査の輪を縮めていく手腕は見事。実際身近にいたら多分いやなタイプです（笑）。中にはちょっとお話の進行上強引なところもあったりはしましたが、面白かったのであまり気になりませんでした。三谷幸喜の『古畑任三郎』も、この作品にリスペクトされたことはよく知られています。

日本での放映時にはコロンボ役に『長靴をはいた猫』の魔王ルシファ役をやっていた小池朝雄が声を当てていて、これがまた雰囲気ぴったりでハマリ役でした。当時結婚もしてなければタバコも吸えない少年達が、「ウチのカミサンがねえ〜」とか「マッチな〜い?」とか言って真似していたのはご愛嬌（笑）。

放映当時は二見書房の新書版サラブレッド・ブックス（ミステリー方面は結構出していて、余談ながらマドンナ文庫の前身で官能小説なども出してました（笑））でこの『刑事コロンボ』のノベライズも出っていて、コンシューマー系のビデオが無い当時はむさぼるように読んでいた覚えがあります。

日本で放送されていた時のテーマ曲は「NBCミステリームービー」という『刑事コロンボ』や『警部マクロード』、『署長マクミラン』などが放送されていたシリーズ枠のテーマで、作曲はヘンリー・マンシーニ。ごく短い曲の中に小粋なアレンジが詰まっています、さすがヘンリー・マンシーニといった感じです。放映当時は「刑事コロンボのテーマ」というタイトルでEP盤で出ました。

ちなみにパイロット版で作られた『刑事コロンボ』の第一作目『刑事コロンボ／殺人処方箋』の

音楽は当時はテレビの仕事なんかも多かったデイブ・グルーシンです。後のシリーズでは『刑事コジャック』のビリー・ゴールデンバーグや『アンドロメダ…』のギル・メレなどが曲を書いています。

なお、1989年から2003年まで『新刑事コロンボ』というシリーズがABC放送にて放送されています。

【刑事コロンボ (Columbo) 1967、1971～1978年 USA】

【ジェリー・ゴールドスミス】

2004年の7月に亡くなった偉大なる映画音楽作曲家、ジェリー・ゴールドスミス（Jerry Goldsmith）について少し触れてみたいと思います。

1929年2月10日、ロス・アンゼルス生まれ。本名はジェラルド・ゴールドスミス。6歳の頃からピアノを習ってピアニストを目指しますが、1945年にミクロス・ローザが音楽を担当したヒッチコック監督の『白い恐怖』を観たのがきっかけで、映画音楽作曲を志すようになります。1950年にCBS放送に事務員として入社した後、音楽部に転属してラジオやテレビの音楽を書き始め『Twilight Zone』などを担当、1957年には初めて映画『BLACK PATCH』の音楽を担当することになります。それからはTV、映画にと精力的に多くの曲を作り、アカデミー賞作曲賞にノミネートされること17回、『オーメン』で受賞しています。2004年7月21日に75歳で病気によって帰らぬ人となりました。

大変な多作家だったので、「ああ！あの曲はそうだったのか？」と思うものもあると思います。また『スーパーガール』などのように日本のTVの番組に流用されたり、BGMなどで耳にすることも少なくありません。

ジェリー・ゴールドスミスの音楽でまず最初に思い出されるのは、『チャイナタウン』（1974）のテーマです。前年の『パピヨン』と共に連続して（さらには75年76年も）アカデミー賞作曲賞にノミネートされています。映画を見る前にテーマ曲が好きで何度も聞いていたのですが、映画の中でのこの曲がかもし出す雰囲気がかまさにぴったりで、またやるせなさをさらに感じさせてくれました。

『カサンドラ・クロス』（1976）のテーマもとても愛聴した曲のひとつです。哀愁を帯びたハプシコード風のシンセサイザーのテーマにからむ高音のストリングスが美しい曲でした。少しクールな雰囲気がストーリーのじわじわ襲ってくる恐怖とあいまって、印象的な曲のひとつです。

彼の作品を好きだった人も多いと思います。また知らずに聴いていて、後でジェリー・ゴールドスミスの作品と知ったものもあったと思います。あなたの中のジェリー・ゴールドスミスの思い出は？

・映画メモ『スーパーガール』

クリストファー・リーヴ主演による1978年の映画『スーパーマン』の大ヒットによって続編が次々に作られましたが、その余波もあって『スーパーマンⅢ／電子の要塞』の翌年に同じDCコミックスのタイトルから映画化されたと思われるのがこの『スーパーガール』。

無くなったクリプトン星から逃げ出し、生き残った人々がアルゴ・シティはオメガヘドロンのという装置で維持されていました。ところが叔父のゾルター(ピーター・オトゥール)が管理者の元から借りてきたオメガヘドロンをスーパーマンの徒弟であるカーラ(ヘレン・スレイター)が過失でアルゴ・シティの外に飛ばしてしまいます。大変なことになったと思い、カーラは両親の静止を振り切ってオメガヘドロンを追います。オメガヘドロンは地球に落ちるとたまたま黒魔術を使う魔女セレナ(フェイ・ダナウェイ)の手に落ち、セレナはその力に惚れこみ親友ビアンカ(ブレンダ・ヴァッカロ)と共にすべてを我が物にしようと企みます。一方オメガヘドロンを追って地球に着いたカーラはスーパーガールとなり、オメガヘドロンの行方を捜します……。

通常DCコミックスが原作だとワーナー・ブラザーズの製作になると思われるのですが、これはなぜかイギリス映画。そのせいか、こんな映画に(苦笑)ピーター・オトゥールが出ていたりします。その他にもスーパーガールの敵役である魔女をフェイ・ダナウェイが渾身の熱演をしたり、ミア・ファローがスーパーガールの母役でちょっと出ていたりして、なにげに脇が豪華な顔ぶれ。

ちなみにテレビ放送された時にスーパーガールの声を石川秀美が当てていて一部では酷評されていましたが(苦笑)、DVDに入っている日本語音声を聴いても、うまいとは全然思いませんがそれなりに悪くは無かったのではと。この声優陣も脇がなにげに豪華で、フェイ・ダナウェイを来宮良子、ピーター・オトゥールを野沢那智、ミア・ファローを小宮和枝、イーサン役のハート・ボックナーを水島裕、ジミー・オルセン役のマーク・マクルーアを古川登志夫が当てているのだそうですね。

でお話とすればこれが蓋をあけてびっくり、さえない男の取り合いが話の中心でした(苦笑)。仮にもスーパー・ヒーロー／ヒロインがそういうことでもいいのだろうかと思うのですが、そういう脚本になっちゃっているのですから仕方ありません(苦笑)。もうちょっとなんとかなれば悪くなかった気もするのですが。続編が噂されながら作られなかったのもむべなるかなです。

しかしこの映画はオーディションで選ばれたスーパーガール役のヘレン・スレイターがとても美しく、惚れこんでしまいましたねえ。『摩天楼(ニューヨーク)はバラ色に』、『殺したい女』などヘレン・スレイター出演の映画を見ましたが、この映画が一番の魅力を伝えていると思います。それだけに続編が見たかったなあという気持ちもありました。また、最近でも時折りメイクの噂も出るのですが、出ては消えといった感じみたいです。

音楽は巨匠ジェリー・ゴルドスミスで、製作側の意向もあったのかちょっと『スーパーマン』を意識したようなスコアですが、華麗なオーケストレーションが美しいサウンド・トラックです。テーマは日本のテレビ番組にも流用されたりしていますね。

【スーパーガール (SUPERGIRL) 1984年 UK】

・映画メモ『チャイナタウン』

昼があれば夜が来るように、光があれば闇も存在します。ハード・ボイルド独特の暗く頹廢的な部分も、また人の持ち合わせている真実なのでしょう。

この映画の舞台は1930年代の水不足に悩むロス・アンジェルス。探偵事務所を構えるジェイクの所へ、謎の女性が水源電力局の最高責任者である夫の浮気調査の依頼に来ます。ジェイクは調査を開始しますが、次第にその影に潜む大きな陰謀陰惨な愛憎劇が浮き彫りになってくるといった話です。

主人公のジェイクをジャック・ニコルソン（『バットマン』のジョーカー）、ヒロインのイブリンをフェイ・ダナウェイ（『スーパーガール』の魔女セレナ）が演じています。この2人の名演技が特に光ります。怪優の名をほしいままにしてる（笑）ジャック・ニコルソンですが、ハード・ボイルドに出てくる決して強くは無いが心はタフな探偵っぷりがうまく出ています。フェイ・ダナウェイも高貴でありながら妖艶な部分を持つ姿を見せてくれました。あと、監督としてではなく男優として出たジョン・ヒューストンがふてぶてしい役をうまく演じていますね。

衝撃的なラスト・シーンは別の脚本もあつたらしいのですが、やはりあの終わり方がベストなのでしょう。後味が悪いようで、どうにも虚しくやるせない余韻がいつまでも残るのはあのラストがあつてからだと思います。人が心の奥に持っている頹廢の琴線に触れる部分があるからなのではないでしょうか。監督のロマン・ポランスキーも何かといろいろなことがあつた人ですが、そういう部分も映画に影を落としているのかもしれない。

2004年の7月21日に亡くなったジェリー・ゴールドスミス（『パピヨン』、『カサンドラクロス』、『スーパーガール』等）がこの『チャイナタウン』の音楽を担当していますが、このテーマ曲がまた心にジンと染みる名曲です。ストリングスとトランペットとピアノがゆっくりと絡まりあうように流れ出し、夜の闇が鈍く輝き出すような錯覚に陥るような気がする曲でした。ご冥福をお祈りいたします。

【チャイナタウン Chinatown 1974年 USA】

・映画メモ『カサンドラ・クロス』

ブログでは『アンドロメダ…』、『復活の日』と細菌ものを紹介しましたが、これまた細菌もののひとつです。

スイスのジュネーブにある国際保健機構に、スウェーデンの過激派ゲリラが乗り込みUSAの秘密生物研究セクションを爆破しようとしています。その最中にガードマンと射撃戦になって液体の入ったビンが割れて中の液体を浴びた一人が命からがら逃げ出します。実はそのビンの中にはUSAが極秘裡に研究していた伝染性の細菌が入っていたのです。この緊急事態にUSA陸軍情報部のマッケンジー大佐(バート・ランカスター)が指揮をとり、逃走したゲリラがストックホルム=ジュネーブ間の大鉄道列車に乗り込んでいることをつきとめます。列車の乗客リストの中に著名な医師であるチェンバレン教授(リチャード・ハリス)の名があるのを見つけたマッケンジーは、無線電話で呼び出して事件の概略を説明して車内に潜んでいるゲリラを捜させます。約千人の乗客乗せた列車は検疫収容のためにポイントを切り換え、ポーランドの元ユダヤ人収容所があったヤノフへ向かいます。そしてその途中には大きな谷にかかる30年近くも使用されていない「カサンドラ・クロス」と呼ばれる鉄橋があるのです……。

1970年代は猛吹雪の国際空港と旅客機のアクシデントを描いた『大空港』（1970）、巨大客船が転覆する『ポセイドン・アドベンチャー』（1972）や高層ビルが大火災に見舞われる『タワーリング・インフェルノ』（1974）などのパニック映画の大作が作られたことでした。どれも大惨事という非常時の人間模様を描いた作品で、強い印象を残しました。この『カサンドラ・クロス』は政治的なサスペンスの要素も加味して、列車と言う密室でのいろんな登場人物の人間ドラマも描いている映画です。ソフィア・ローレン、エヴァ・ガードナー、マーティン・シーンなんかも出演していました。

もう30年近く前の作品ですから特殊撮影の部分は今見ると古く感じますが、当時はかなりの迫力がありました。その後の谷の描写がこの映画に寄せる制作者の強い気持ちを感じさせてくれます。また、途中列車を止めて防護服を来た表情の見えない多くの人間が取り囲み、黙々と窓を塞いで溶接して封印するシーンは寒気がするような怖さがあります。

ラストはこの先をいろいろと想像させてくれる映画です。そこもまたうまい作りになっています。今なお起こりうる出来事であることも見逃せません。

音楽は巨匠、ジェリー・ゴールドスミス。非常に印象的で情感溢れるスコアが全編に流れます。オープニングの広い空の風景に重なるテーマ曲が切なくもきれいです。

【カサンドラ・クロス（The Cassandra Crossing）1976年 イタリア=UK】

【伊福部昭】

ここでは管弦楽曲の作曲家としても知られ、また日本の映画音楽にも多大な影響を与えた伊福部昭について触れたいと思います。

1914年5月31日、北海道釧路で兄2人姉3人の末子として生まれた伊福部昭は。小学生の時に父親が村長を務めた関係で大自然の中でアイヌの宴会や祭りでその音楽に接します。また、バイオリンを習いギターを独習した伊福部昭は14歳の時に朋友・三浦淳史に作曲家になることを薦められ、また18歳の時に早坂文雄と出会います。北海道帝国大学農学部林学実科に入学した伊福部昭は、北大の文武会オーケストラに入って音楽活動の傍ら独学で作曲を始めます。その一方、21歳の時にはアツケシザクラを発見してそれを認定した館脇操博士と共に学名に名を残し、1935年には森林事務所に勤務する林務官となります。その年、来日した時に和声の手ほどきを受けたアレクサンドル・チェレプニンの名を冠したチェレプニン賞管弦楽作曲コンクールに、『日本狂詩曲』を応募して一席に選出されて、作曲家としてのキャリアが始まります。戦時中は戦時科学研究員として林業試験場で戦闘機に使用する木材の振動耐性の研究に関った伊福部昭は、終戦後、東宝で映画音楽の作曲家として活躍していた早坂文雄らの薦めで東京に移転。東京音楽学校の作曲課講師を務めながら芥川也寸志、黛敏郎らを輩出、1947年の『銀嶺の果て』を皮切りに映画音楽の世界に入ります。1954年に手がけた映画『ゴジラ』で世界的にも有名になり、一方現代音楽の作曲の方も留まることなく継続しています。傘寿、米寿、卒寿と記念コンサートも行われていましたが、2006年2月8日に91歳でお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします。

伊福部昭といえば、もちろんその名を不動にした『ゴジラ』を抜きに語ることはできないでしょう。あの重厚で独特なオーケストレーションは、音色を聞くだけで『ゴジラ』みたいだと思わせるものがあります。KORGのベストセラー・シンセサイザーのM1用に、作編曲家・演奏家・プログラマーである生方則孝と福田裕彦のコンビが作った販売用ROMカードの中にある「Ifukube」という音色が非常に秀逸で、何を弾いてもゴジラの場面を思い出させるような音になるのがすばらしいです（笑）。

この『ゴジラ』があまりに有名になりすぎたので伊福部昭といえば東宝というイメージがありますが、実は手がけた映画音楽は大映の映画の方が多いということはあまり知られていません。ちなみにザ・ピーナッツが歌ってヒットした「モスラの歌」を含む『モスラ』は、俗に言う「六甲おろし」（正式名称は「大阪（阪神）タイガースの歌」）や「栄冠は君に輝く」の作曲者として名高い古関裕而が音楽担当です（古関裕而については、またいずれ）。伊福部昭が手がけた大映映画の音楽の中でも『大魔神』のシリーズは、『ゴジラ』と同じような傾向の映画でありながら時代劇色が濃いついた特殊な作品であるが、実に映像とマッチしていました。

同じく大映で1作目の『座頭市物語』を初めとして、『座頭市血煙り街道』など、シリーズの多

くの映画を担当した『座頭市』シリーズも見逃せません。ぞくぞくするような映像と相まって座頭市の世界をかもし出していました。

アニメーションの『わんぱく王子の大蛇退治』もすばらしい作品です。40年以上も前のアニメーションなのですが、きれいな映像と音も含めた音楽がシンクロして、見事な世界を作り上げていました。

興味のある方は書籍『伊福部昭の映画音楽』（この本の中の映画音楽効用四原則は興味深いです）、『伊福部昭・音楽家の誕生』などをお読みになると、伊福部昭の音楽をより多角的に知る手がかりになると思います。

・映画メモ『銀嶺の果て』

戦後に既に東宝で映画音楽を担当していた同郷の早坂文雄の薦めで東京に出てきた伊福部昭氏が、同じく早坂文雄の紹介で知った東宝の音楽部長・掛下慶吉からの依頼で、1947年に初めての映画音楽を担当したのが『銀嶺の果て』です。終戦後僅か2年という戦災の痕爪も生々しい貧しい時期に作られたこの映画は黒澤明の脚本でも知られていますが、音楽の伊福部昭と同時に谷口千吉監督、そして後に「世界のミフネ」と称せられる若き三船敏郎、幼き若山セツ子にとってもデビュー作でもあるサスペンス溢れる現代劇の大衆娯楽映画でした。

野尻（志村喬）、高杉（小杉義男）、江島（三船敏郎）の3人は共謀して銀行を襲い現金を強奪、逃亡の末、北アルプス山中に逃げ込みます。温泉宿に身を隠すものの宿泊客に気づかれて、客の衣服を剥いで宿から出られないようにしながらさらに山奥へと逃亡します。3人は別々に逃げる可能性も念頭において夜中に金を山分けして雪の中を進みますが、警官に追いつかれそうになり高杉が犬に向かって発砲。警官隊と犬、そして高杉は銃声によって起こった大雪崩に巻き込まれてしまいます。残った野尻と高杉は大吹雪の中を進むうちに山小屋を発見。そこには古老（高堂国典）と孫と思われる娘子の春坊（若山セツ子）、そして吹雪の為に山小屋に避難している登山家の本田（河野秋武）が暖をとっていました……。

60年近く前がかつ終戦後間もないモノクロームの映画ゆえにフィルムも傷だらけで画像もあまりよくない映画ですが、脚本・演出・俳優の力もあって、見所のある娯楽映画に仕上がっています。三船敏郎は前の年にカメラマン助手になりたいために東宝撮影所撮影部にいる先輩の大山年治を訪ねたところ履歴書を出すことになり、それが何かの手違いで東宝第一期ニューフェイス募集に廻って役者として補欠採用。それでも根気強く撮影部の空きを待っているところを、谷口千吉監督に説得されてこの映画にでることになったそうです。ここでの若い新人俳優・三船敏郎はベテラン志村喬と同行して堂々と向こうを張る銀行強盗の仲間の役で、冷酷無比で野獣のようにギラギラと目を輝かせる役どころが異彩を放っています。既に充分大物の片鱗を見せてくれるところが、三船敏郎のすごいところでしょう。もちろん、それを受ける志村喬の懐の深い演技があってこそであることも言うまでもありません。そして一服の清涼剤でもある若山セツ子の澆刺とした娘子姿がとてかわいいです。若々しく素朴さを押し出した演技は、ストーリーにも深い説得力を与えています。しかし、山小屋でのにごり酒、実においしそう（涎）。

緊迫感溢れるストーリーは、今ではありがちでありながらやはり面白く、観客の目を離しません。元は『山小屋の三悪人』という脚本だったそうで、どこかで聞いた事あると思ったら、後の黒澤監督の映画『隠し砦の三悪人』と似たタイトルじゃないですか（笑）。監督の名よりも黒澤明の脚本であることにスポットが当たるのも納得で、かつては戦後間もない混乱期の大変な中でも日本映画はこういう映画を作れたのだなと思うと、二重の意味でため息がでてしまいます。時々思うに、仮の話、もしもある架空の国では、芸能事務所とレコード会社と出版社が映画会社とタイアップして宣伝を多く打つことによってお金を回収することが映画作りだと信じられているの

だとすれば、それは文化については不毛な大変不幸な国だという気がします。

そして伊福部昭の音楽は流れる箇所はさほど多くはありませんが、メイン・タイトルを含めて伊福部昭らしい力強さとハーモニーに満ち溢れています。もちろん映画音楽以前に現代音楽の作曲家としての地位を確立していた伊福部昭ですから、しごく当然のことではありますけど。ただその中でも『伊福部昭の映画音楽』の中にある、伊福部昭が後に述べたという映画音楽効用四原則に従っていることは、既に最初から本質をつかんで曲を書いていたことに他ならないのでしょう。中でも野尻と春坊が楽しくスキーをする場面での哀愁を帯びた音楽が印象に残ります。またおそらく脚本にあったと思われる演出意図として重要な位置をしめるSP盤でのフォスターの名曲、「ケンタッキーの我が家」（ケンタッキー州歌にもなっているそうです）は場面に実にあっついて、しみじみするものがあります。

ちなみにタイトルを見て、「銀嶺の覇者」だと思った人はレインボーの聴きすぎです（笑）。この映画からタイトルのみをちょっと変えてとったという筒井康隆の『銀嶺の果て』はこの映画とは内容は全然違いますが、筒井ファンには筒井康隆らしさを堪能できる最新作でした。

【銀嶺の果て 1947年 日本】

・映画メモ『ゴジラ (1954)』

怪しい獣＝怪獣の代名詞であり金字塔である世界的に有名な映画といえばこの『ゴジラ』。終戦後9年の1954年に東宝で作られたあまりにも有名なこの作品は、後の映画にもいろんな影響を与えました。

太平洋の真ん中で次々と船舶が謎の沈没事故を起こします。新聞記者の萩原（堺左千夫）は遭難地点に近い大戸島へ行って奇蹟的に生き残った男・政治（山本廉）から、海から出た巨大な怪物に火を吐きかけられて沈んだという話を聞きますが、老いた漁夫だけは昔からの云い伝えで信じただけで他には誰も信じません。果たして暴風雨の夜に謎の巨大な怪物は島を襲って人家を破壊しつくします。調査隊が大戸島を調べるとそこには放射能の反応と現代には滅びているはずの三葉虫の死体が。そして山の向こうから大きな足音が響いてきます……。

もう何の説明もいらない有名な映画でしょう。広島・長崎に原子爆弾が落ちて9年、そしてこの『ゴジラ』が公開された年の春には、USAが太平洋のビキニ環礁で行った水爆実験によって日本のマグロ漁船・第五福竜丸の乗組員が被爆するという大事件が起こっています。劇中でもゴジラが存在が新聞に書きたてられると、電車の中での会話で、「いやね。原子マグロに放射能雨、その上今度はゴジラときたわ」、「せっかく長崎の原爆から命拾いしてきた大切な身体なんだもの」などという会話が象徴的に差し挟まれています。

そして反核のメッセージと共に娯楽作品としても見所が多く、当時最新鋭の特殊撮影にモノクロームの画面が相まって恐怖の存在としてのゴジラがよく現れていました。重厚な足音ひとつだけで巨大さと不気味さを出す演出もすばらしいです。また、恐怖の存在としてのゴジラに翻弄される市井の人たち、そして芹沢博士のオキシジェン・デストロイヤーなどの道具立てなど引き込まれる内容です。これが相手がすばしっこくて多産型の巨大トカゲだったり、超兵器の名前がまるで殺虫剤（例：すうばあえっくす）みたいだったり空飛ぶカブトガニみたいな形だったら、ここまで引き込まれたかどうか判りません。

音楽はご存知、伊福部昭。黒地に白い文字だけのタイトル・バックに効果音と共に流れるテーマに始まり、重厚な世界観をしっかりと支えています。大戸島でも薪能みたいなシーンの舞踏音楽も伊福部昭っぽくて魅力的です。伊福部昭のご逝去の際にはとにかく『ゴジラ』の作曲家であることが主にクローズ・アップされていて、現代音楽のおかれていた不幸な現状が身に沁みましたが、逆にこれを機会に氏の代表作でもある「シンフォニア・タプカーラ」や「土俗的三連画」、「日本狂詩曲」等にも耳を傾けていただければとも思います。

・映画メモ『大魔神』

大魔神と言えば、ちょっと前でしたら横浜の佐々木投手を思い出す人も少なくないでしょうか。佐々木投手はフォークを武器としてクローザーとして君臨。大魔神と呼ばれ、かつては絶対的守護神として名を轟かせメジャー・リーグにも行ったことのある投手でした。

時は戦国の世、京の都に近い山国にある城では家老の大館左馬之助（五味龍太郎）による謀反が起って、城主だった花房忠清（島田龍三）夫妻は討たれてしまいます。遺された子供の忠文（青山良彦）と小笹（高田美和）は近臣猿丸小源太（藤巻潤）とともに巫女である信夫（月宮於登女）の手を借りて、山奥の巨大な武神像の傍らの洞窟に潜んで大きくなるまで暮らしました。実権を握った左馬之助は重税をかけて領民を苦しめます。やがて左馬之助は忠文を捕らえて、山の神の怒りの恐ろしさを諭す信夫を惨殺、腹臣犬上軍十郎（遠藤辰雄）に武神の破壊を命じます。忠文と小源太が処刑されることを聞いた小笹は、武神像に祈り続けこの身の命に代えても救おうと大滝へ身を投じようと決心します……。

大映特撮映画のみならず日本特撮映画上でも傑作といえる『大魔神』全三作の記念すべき第一作目です。戦国時代が舞台ということで時代劇のテイストが濃いシリーズなのですが、荒ぶる神としての動く巨大武神像とじつにじっくりくる設定になっています。そういう部分が怪獣映画の亜流でありながら、決して子供だましに作られていない一因にもなっているのかもしれない。

実際に大魔神が現れるのは物語の後半で、左馬之助の圧政に喘ぐ領民を描く前半と大魔神が現れる後半のコントラストを非常に強く打ち出しています。テレビの連続時代劇ものでもよくある圧迫から一気に解放されるカタルシスを感じさせてくれる映画なのですが、この映画の場合そのコントラストが異様に激しいのと、大魔神の破壊が止まる場面の作り方がまた、話にメリハリとリズムを作っていると思います。

この大魔神、滝の上の岩壁に祭られている時は顔がハニワそのものなのですが、一端動き出すと金剛力士像も叶わぬほどの憤怒の表情に変わります（この腕をゆっくりと上げて表情が柔和から憤怒に変わるのは、当時の子供は「大魔神ごっこ」として遊んだのではないのでしょうか）。特に大魔神を演じた橋本力の目の演技が素晴らしく、その眼光の鋭さは人を射抜くほどの怒りを発しているように見えます。またこの作品では鬼神もかくやという荒れぶりで、巨大な武神像による容赦ない破壊と惨殺、どこまでも追ってくる恐怖と、映画館で見ている方には今にもスクリーンから飛び出てくるのではと思わせるような臨場感がありました。映像、美術、効果音、音楽が一体となって重量感と恐怖感を打ち出しているところが見事です。まったく子供心にトラウマに残るような映画です（苦笑）。

改めて見てみて、『プルガサリ』が『大魔神』リスペクトの映画だということが再認識できます。

東宝のゴジラ・シリーズで名高い伊福部昭は、『伊福部昭の映画音楽』を読むと判るように、実は大映での仕事の方が70作と多いのですが、この大魔神での音楽はその中でも代表的なもののひとつでしょう。重厚でスケール感が大きく、また時代劇である部分にも非常にマッチしています。

【大魔神 1966年 日本】

・映画メモ『大魔神怒る』

1966年に作られた『大魔神』シリーズ、全三作の第二作目がこの『大魔神怒る』です。

時は戦国の世、八雲の湖の岸に千草一族と分家の名越一族が隣り合って暮らしていました。千草家の跡取り息子の千草十郎時貞（本郷功次郎）と名越家の娘の早百合（藤村志保）は間もなく結婚することになっていて、両家は平和な日々を過ごします。湖の真ん中にある神ノ島には一族の守護神である武神像が祭られていましたが、ある日その武神像の顔が赤く染まり変事の前兆を示しました。はたして、悪政をほしいままにしていた隣国の領主・御子柴弾正（神田隆）が千草一族の領土に攻め入り、守護神の武神像を粉々に爆破してしまい湖に沈めます。その上名越一族にも襲いかかり、十郎や早百合を火あぶりに処するように命じます……。

タイトルが『大魔神怒る』ですが、一応第一作目、第三作目も怒ってます（笑）。今回は舞台を八雲の湖に移していますが、悪行三昧をほしいままにする敵役の行為に耐えて、最後に大きなカタルシスを得る映画というコンセプトはそのままで、基本的に時代設定も第一作目と筋立ても同じような映画です。

その中でいかに差別化を図るかという部分で、今回の目玉は湖の中から大魔神が登場するシーンがあります。これが1957年にハリウッドで作られた大スペクタクル旧約聖書映画『十戒』に、明らかに対抗するような映像になっています。とはいえこれがまたスクリーンでは大迫力で、湖が両側に滝のようになってぱっくりと割れて奮い立つ大魔神の姿はまさに大魔神。重厚で壮大な場面の多いこのシリーズの中でもとりわけ迫力満点のシーンになっています。

また前作では額に杭を打たれて血を流した変身前の武神像ですが、今回は湖から出現する原因にもなった武神像に発破をかけて爆破するシーンもかなり迫力があり、また相当に罰当たりな感が強く、後半大魔神に追われる充分な動機づけとなっています。

大魔神も2回目の出勤になって多少分別がついてきたのか、十把ひとからげに殺戮をせずに悪人を狙って行動するようになっていきます。現在の目から見ると、恐怖感が軽減して荒ぶる神としての魅力が少なくなってきたように思いますが、昔はそれでもかなり泣きそうぐらいに怖かったんですよ（苦笑）。

【大魔神怒る 1966年 日本】

・映画メモ『大魔人逆襲』

前2作と同じく1966年に作られた大映の『大魔神』シリーズ、全三作の最後の作品です。それぞれ1年のうちに春休み、夏休み、冬休みに公開されたように思います。

荒川飛驒守（安部徹）の圧政により、瓜生の村人たちは地獄谷で武器作りに狩り出されています。彼らは隙あらば逃げ出そうとしていましたが、崇りを恐れられている魔神の山を越えなければならず、また飛驒守の軍勢が警護を固めていて逃げる者は容赦なく殺されていました。そんな冬のある日、金太（飯塚真英）、杉松（長友宗之）、大作（堀井晋次）、鶴吉（二宮秀樹）の四人の少年は老婆（北林谷栄）の静止を振り切って、地獄谷に向かうために雪の山越えに挑戦します。山の頂上の神々しい武神像の傍を舞っていた大鷹に守られて少年達は一路地獄谷を目指しますが、飛驒守の兵がそれを見つけて追いかけてきました……。

大映では1965年に『大怪獣ガメラ』を製作、翌1966年にこの『大魔神』シリーズ3作と『大怪獣決闘 ガメラ対バルゴン』を製作しています。ちなみに翌1967年には『大怪獣空中戦 ガメラ対ギャオス』を、1968年には『ガメラ対宇宙怪獣バイラス』と『妖怪大戦争』を製作しています。

一面雪の寒寒とした風景が非常に印象的な映画でした。全般に山奥の風景が美しく心に残っています。雪の中から巨大な姿を現す大魔神の姿も素晴らしく映える映像でした。

内容は前2作の圧政に耐えるという部分は残しながら、少年達の山越えに際しての冒険を中心としたストーリー運びになっています。3回目の出動になった大魔神は前作からさらに分別がついてきて、子供の味方になっています。『ガメラ』シリーズも翌年の『大怪獣空中戦 ガメラ対ギャオス』から子供の味方路線になっていくことを考えると、非常に興味深い傾向ではあります。

この作品でのハイライトは、なんと言ってもついに腰の剣を抜いて成敗することですね。これまでは巨躯の腰に下げた大刀はあっても使ったことはなかったので見る方も気にはしていなかったのですが、重々しく抜いた時にはドキドキしたものでした。ある意味この作品でシリーズに終止符を打ったことが全体のまとまりもよく、またこのシリーズを伝説にしているのかもしれませんが。

【大魔神逆襲 1966年 日本】

・映画メモ『座頭市物語』

勝新太郎主演による時代劇、『座頭市』シリーズの第一作。好評だったこれ以降大人気シリーズとなり、10年以上もの間『座頭市』シリーズが作られていきます。

杖を頼りに歩く盲目の座頭市（勝新太郎）は下総飯岡の貸元・助五郎親分（柳永二郎）の客分として世話になり、乾分蓼吉（南道郎）が世話をします。座頭市は釣りの最中に助五郎とは犬猿の仲である笹川繁造親分（島田竜三）の食客となった病身の浪人・平手造酒（天知茂）と出会います。実は助五郎は新興勢力の笹川一家を叩き潰す機会を狙っていて、座頭市と平手造酒を戦わせる機会を窺っていました。その頃、乾分蓼吉の女だったお咲（淡波圭子）が池に水死体となって浮かぶという事件がおこります。その池を訪れた座頭市は再び造酒と出会い、二人はその晩、一緒に酒をくみかわして意気投合します。ところが、この時造酒を訪れた笹川繁造親分は座頭市が飯岡の客分と知ります……。

1962年のまだモノクロが主流の時代の映画です。最初の頃は大映の作品で、三隅研次が監督。『勝海舟』で有名な子母澤寛の『ふところ手帖』という随筆にあった、短い一文を元にふくらまされたキャラクターだということです。

モノクロの映像なんですが、さすがに古さは感じるものの「色合い」を感じる重厚な娯楽作品です。オーラが出てるようにも感じる勝新太郎の風格に、それと堂々と渡り合う敵役の天知茂。自分の語彙力が貧弱なのが悔しいですが、ともかくカッコいいの一言です。展開は非常にわかりやすく先が読めるし、アクション・シーンもかなり少ないのですが、ドラマや会話が見せてくれるので飽きさせません。そしてやはり、ラストの天知茂が飯岡方の子分を斬りまわるシーンから最後の橋の上での勝負のシーンは、派手さはないものの緊張感溢れる名場面だと思います。勝負が決した時の座頭市の表情がなんともいえません。

音楽は大映作品を多く手がけている伊福部昭。控えめながら要所要所を締める音楽が映画を盛り立てています。

【座頭市物語 1962年 日本】

・映画メモ『座頭市血煙り街道』

1962年の『座頭市物語』に始まった勝新太郎の座頭市シリーズは、大人気を博して映画として全26作が作られました。この『座頭市血煙り街道』は『座頭市物語』から5年、既に第17作目に当たります。そして、私も座頭市シリーズを全部見たのではありませんが、シリーズの中でも屈指の名作のひとつでしょう。後にハリウッドでも舞台を現代に移して、『ブラインド・フューリー』としてルトガー・ハウアー主演でリメイクされた元ネタでもあります。

いつものように街道で五人のやくざに襲われる座頭市（勝新太郎）ですが、仕込み杖の居合斬りでやくざを倒した様子を偶然通りかかった侍風の男、赤塚多十郎（近衛十四郎）が目撃します。その晩旅籠に泊まった市は相部屋になった病床のおみね（磯村みどり）から、幼い息子の良太（斎藤信也）を前原にいる父親の庄吉（伊藤孝雄）に届けてくれと頼まれます。間もなく亡くなったおみねを寺に葬り、市はやんちゃざかりの良太を連れて前原を目指します。途中、旅芸人一座のともえ（朝丘雪路）たちと出会い前原まで同行することになりますが、道すがら万造一家がいちゃもんをつけてくることに。ところがそこに現れた多十郎が万造一家を追い払い、一座を救います。やがて前原に着いた市と良太は、庄吉が働いていたという窯焼き場の太兵衛（松村達雄）を訪ねますが、庄吉は賭場に入出入りするうちに行方不明になったという話。そんなある日、偶然から代官手附の鳥越（小沢栄太郎）の肩をもんだ市は、庄吉の名が出るのを聞き、鳥越の帰りを待伏せた市は、庄吉の居所を聞き出そうとします。ところが、その時現われた多十郎が鳥越を一閃のもとに斬り殺します……。

いい映画にはいい好敵手がいるものですが、赤塚多十郎に扮する近衛十四郎がいいですねえ。立ち振る舞い、表情、そして殺陣、まさに素晴らしいの一言です。最後まで一貫して「サムライ」として存在する多十郎に魂が宿っています。

ラストの雪の振る中での対決シーンは日本映画の名勝負のひとつでもあるのではないのでしょうか。斬るか斬られるかの緊張感、真剣勝負がこれほどひしひしと伝わってくる映画もそう多くないでしょう。恥も外聞もなくお互いの目的のために勝とうとする兩人。市が庄吉を突き飛ばすシーンは市の心意気に泣きそうになっちゃいましたし、手で刀をつかんだ場面では見ている自分の方が思わず「いたいっ！」と声をあげてしまったところもあります。何度見てもため息の出る対決ですね。

音楽は『座頭市物語』以降、ここまでかなりの座頭市シリーズを担当している伊福部昭。『大魔神』シリーズ3作を担当していた頃でもありますね。通常部分はウェスタンを意識したのかギターを使っているのが新鮮ですが、落石の場面以降は伊福部節前回は楽しめます。

市と多十郎が3度目に茶屋で会うシーン。路銀がなくおにぎり代と子供のわらじだけを頼む市に多十郎は按摩を頼んで金を多く渡します。「おめぐみはうけられません。気持ちさがもしくなり

ますから」と必要以上のお金を断る市。その市の心が全編この映画には生きているような気がします。

【座頭市血煙り街道 1967年 日本】

・映画メモ『わんぱく王子の大蛇退治』

1958年の『白蛇伝』に始まった東映の長編マンガ映画も1963年の本作『わんぱく王子の大蛇（おろち）退治』で6本目。日本神話に題材をとって少年スサノオを主人公にしていますが、音楽に現代音楽の巨匠・伊福部昭を迎えて映像・音楽共に芸術性も高い長編マンガ映画になっています。

昔々、オノゴロ島というところにスサノオ（住田知仁）という力の強い腕白な王子がいて、いつも動物たちと仲良く遊んでいました。ところが母のイザナミが亡くなってしまい、黄泉の国の意味がわからない少年スサノオは母を捜そうと決心して船を作り、仲の良い兔のアカハナ（久里千春）を連れて島を飛び出します。荒れる海での怪魚アクルとの戦い、夜のオス国での兄ツクヨミとの出会い、火の国での暴れ者の火の神との戦いと大男タイタンボウとの出会いがあり、高天原に着いたスサノオは姉である光の神アマテラスに会いますが、そこではスサノオの失敗の連続のためにたまりかねたアマテラスは天の岩戸に入ってしまう、世界は闇に覆われます……。

日本神話をモチーフとしているもののかなり自由な発想で作られたマンガ映画＝アニメーションで、主人公のわんぱく王子スサノオからして褐色の肌で楕円顔、ちょうど暗黒低迷時代の阪神のエース藪恵壹に似た感じです。もっともスサノオは7回ぐらいまでほぼパーフェクトに抑えているのに突然連打を浴びたりはしませんが（苦笑）。動物たちも黒ウサギや虎やレッサーパンダなんかがいるし、島の植物も原色に近い明るい色使いでかなり南方系になっています。そのあたりの色使いは淡い色使いも混ぜながら全編を通して、この長編マンガ映画ならではの色を打ち出しています。また、前年の『アラビアンナイト シンドバッドの冒険』とは一転してシンプルで独特な風貌のデザインによるキャラクターが目を惹きます。なぜ登場人物（アメノハヤコマという天馬を含む）がすべて短足なのかは不明ですけど（笑）。

またこの映画は伊福部昭の初にして唯一のアニメーション映画の音楽であり、伊福部昭の映画音楽を語る上で絶対に外せない作品になっています。この頃のアニメーション映画は劇中のほとんどが音楽に埋め尽くされていることが多く、この映画も例外ではありません。それこそ場面展開から効果音まで含めて画面にあわせた音が縦横無尽に響きわたり、映画音楽家としても大きな腕の振るいどころなっています。ここでも画面にシンクロして、ある時は力強く、ある時は繊細に響く伊福部サウンドは最大の効果をあげていて、氏の代表作のひとつとならしめています。後に「交響組曲『わんぱく王子の大蛇退治』」として編曲しなおし、日本フィルハーモニーの演奏で録音したことはうれしく、それだけの価値のある作品でした。また、この映画音楽では伊福部昭の作品の中でも数多くのパーカッションが使われていることも特徴的です。

映画の中では特に古代原始の舞踊をテーマにした天の岩戸のシーンが秀逸！アニメーションの独特の舞踊と伊福部昭の力強い音楽が相まって、素晴らしい場面を作り上げています。日本の誇るアニメーションの一場面として必見ではないでしょうか。そしてクライマックスのヤマタノオロ

チとの対決。今で言う怪獣ですからこれも伊福部昭の得意分野。重厚で荒々しいサウンドをバックに、スサノオはヤマタノオロチの8本の首を丁寧に1本ずつ倒していきます。キングギドラの2.67倍の数の首を持つヤマタノオロチですが、ここでのアニメーションの迫力と動きも当時として特筆モノです。ちなみに『三大怪獣 地球最大の決戦』（音楽はもちろん伊福部昭）でキングギドラが初めてお目見えをする一年前のことです。

ちなみにわんぱく王子スサノオの声を担当している住田知仁は『月光仮面 悪魔の最後』や『危うし！快傑黒頭巾』に出ていた子役で、後に芸名を風間杜夫と変えて活躍、『日本フィルハーモニー物語 炎の第五楽章』で主役の座を射止め、『蒲田行進曲』などに出演しています。

【わんぱく王子の大蛇退治 1963年 日本】

【ラロ・シフリン】

映画音楽にまつわる人で忘れてはならない人は数多いのですが、例えばラロ・シフリン（Lalo Schifrin）もそのひとり。映画音楽作曲家としてのキャリアも長く多作家で、また多くの名作を生み出しています。

ラロ・シフリンは1932年6月21日にアルゼンチンのブエノスアイレスで、オーケストラの指揮者である父親の下に生まれました。フランスのパリ音楽院に学んだ後、祖国アルゼンチンで作編曲家として活動します。1958年にディジー・ガレスピーの勧めでニューヨークに移住して、ガレスピーのバンドでアレンジャー兼ピアニストを務め、後にクインシー・ジョーンズのグループにも参加したりします。1960年の始めにMGMレコードの社長だったアーノルド・マキシムの紹介でフランスの映画プロデューサーのジャック・バールと出会い、映画『危険がいっぱい』の音楽を担当することになります。その後、映画やテレビの音楽で大活躍をしているのは周知の事実。ご多分に漏れずかなりの多作家で、「こんな映画も？」と思うような映画にクレジットされていることも多くあります。また、ラロ・シフリンのファンも多く、キーボード・プレイヤーの安西史孝氏などもラロ・シフリンの大ファンで、影響を受けたアーティストの筆頭にあげていたりします。

ラロ・シフリンと言えはまず忘れてはならないのが、テレビドラマですが『スパイ大作戦』のテーマ。5拍子の緊張感溢れるオスティネート・フレーズにフルートのメロディが流れブラスがかぶさってくる大変カッコいいテーマ曲でした。導火線のアニメーションをインポーズにしてアクションをあしらったオープニング・タイトルの画像と切っても切れない音楽です。後に映画『ミッション・インポッシブル』としてリメイクされた元ネタですが、「やはり5拍子でないと『スパイ大作戦』ではない」と思った人も多かったのではないのでしょうか。

やはり緊張感抜群のスコアとして名作なのは『ダーティハリー』。クリント・イーストウッド演じるハリー・キャラハン刑事のカッコよさと共に脳裏に強く焼きつけられていますね。

そして、ブルース・リーの『燃えよドラゴン』。この曲を聴くだけで血がたぎるといふ人も、決して少なくないと思います。これもまた緊張感が高まる曲ですね。

一方職人気質のラロ・シフリンですので、『マニトウ』や『深海征服』みたいな映画でもしっかり音楽はいい仕事をしていることをつけ加えておきます。

・映画メモ『燃えよドラゴン』

「考えずに感じるんだ。月を指差すのと似たようなものだ」

かつて少林寺で修行していたもの悪の道に手を染め、要塞のように武装した島の主として君臨するハン（シー・キエン）。ハンはヒロインで人を不幸を陥れる一方、3年に一度武術トーナメント大会を開いていました。少林寺で修行を積むリー（ブルース・リー）は、秘密情報局からこの大会に出てハンの島に潜入してヒロイン密売の証拠を握るよう依頼されます。最初は渋ったリーですが、妹（アンジェラ・マオ・イン）の死の真相を聞かされるに至って、ハンの島に出向くことを決意。ハンの島へ渡る船の中で、武術大会に出場するウィリアムス（ジム・ケリー）やローパー（ジョン・サクソン）と出会います。島に着いたリーは武術大会に出場して勝ちを収めながら、夜は密かに島の中を探索します……。

生まれて初めて見た香港の映画（ワーナーも入ってますけど）。カンフー映画の代名詞。今は亡き李小龍（ブルース・リー）の最高のアクション映画と言われる1本。

とにかくそれまでに映画では見たことのないスピーディなアクションに圧倒されました。当時はこの映画がきっかけでブルース・リーのブームがおこり、数年前に流行ったアメリカン・クラッカーと似て非なるヌンチャクが大人気。車田正美が「スケ番あらし」を書いていたような時期です。当時はマンガ雑誌の広告の通信販売で、シーモンキーやエヂソンバンドやブーブークッションに混じってヌンチャク（とてもパチモンくさいですけど（笑））が売られてたりしました。そういえば倉田保昭御大も著書で、ブルース・リーが映画でヌンチャクを使うきっかけになったのは自分だと述べておられるのは周知のとおりです。

当時はブルース・リーしか知りませんでした。今にしてみると将来の映画界を支える俳優が多く参加していた映画でもあったようです。JTNEWSの『燃えよドラゴン』のレビューにあるノン・クレジットのキャストから抜粋するだけでも以下の面々が。

ロイ・チャオ(男優) 少林寺高僧 (ノクレジット)

サモ・ハン・キンポー(男優) 太った対戦相手 (ノクレジット)

マン・ホイ(男優) ボートの手網をリーから渡される少年 (ノクレジット)

ユン・ワー(男優) リングを受け取る男 (ノクレジット)

ラム・チェンイン(男優) ローパーの試合を見ている男 (ノクレジット)

ユン・ピョウ(男優) 正拳突きの実習をする男 (ノクレジット)

ジャッキー・チェン(男優) 首をへし折られる下っ端/リーに棒で顔面を叩かれる下っ端 (ノクレジット)

音楽は『スパイ大作戦』のラロ・シフリン。ベースがオスティネートのペダル音で支えるビー

トに、半音下がりでひっかけたシンセサイザーのメロディが絶妙で、緊迫感を盛り上げます。間違いなくラロ・シフリンの代表作のひとつでしょう。今でも映画を見た人には、聞いているだけで盛り上がってくる曲です。

また当時、ブルース・リーの出演映画の主題曲のサウンド・トラック盤がEPで出ていましたが、その「売り文句」が「怪鳥音入り」。EPのジャケットに誇らしげに記されていました。あの「アチャー！」等と表現されるブルース・リーの気合のかけ声は、当時「怪鳥音」と呼ばれ、絶大なる人気を誇っていたのです。

とにかくこの映画がなければ、『ケンタッキー・フライド・ムービー』の、『ドラゴン イカレの鉄拳』（結構笑えるパロディ）も、クリスマス・バンドSOCKSの持ちネタであるプレス・リー（プレスリー風の男がヌンチャク持って暴れます（笑））も、翌年の板東英二の「燃えよドラゴンズ！」（これは私的にはなくてもいいけど（笑））もありませんでした。偉大な映画です。

【燃えよドラゴン（龍争虎闘／ENTER THE DRAGON） 1973年 香港＝USA】

・映画メモ『マニトウ』

万物に神や霊が宿ると言う発想は、世界的にあちらこちらに点在するそうです。例えばコンピュータに宿っていたりとか（笑）。

サンフランシスコに住むカレン(スーザン・ストラスバーグ)は首のうしろにできた小さな腫瘍が時々動くのに不安を覚え、昔のボーイフレンドで心霊研究家のハリー(トニー・カーティス)を訪ねます。夜にカレンが「パナ・ウィッチ・サリトウ」とつぶやくのを聞いたハリーは、彼女が何者かにとり憑かれていることに気づきます。カレンの腫瘍を切開手術しようとしたヒューズ医師(ジョン・セダー)は、操られるようにメスで自分の左手を切ってしまいます。ハリーは引退した祈祷師アメリカ(ステラ・ステーブンス)や呪術の権威ドクター・スノー(バージェス・メレディス)に相談したところ、カレンに憑いているのは400年前のアメリカン・ネイティブの万物に宿る霊＝マニトウだということが判ります。ハリーはアメリカン・ネイティブのジョン(マイケル・アンサラ)という祈祷師を探し出して腫瘍の切開手術の場に連れて来ますが、苦しむカレンは「ミスカマカス」という言葉を吐いて背中から悪霊が誕生、病院はパニックになります……。

二番煎じの帝王（えらい言われ方ですが（笑））と言われたウィリアム・ガードラーの遺作であり「オリジナル」な作品。以前に『アビイ』という黒人版エクソシストも撮っていますが、世界的には熊版ぺっぽこ『ジョーズ』＝『グリズリー』が有名でしょう。この『マニトウ』も前半はオカルト的な映画ですが、着ぐるみ（苦笑）のミスカマカスくんが出てからはSF色が強くなります。

もうね、これがすごいです。ミスカマカスくんは病院を氷漬けにしてしまうので、ジョンは大地やら天やら水やら火の精を呼び出しますが相手が強すぎでだめ。ところがミスカマカスくんは400年前の呪術師だもんで、最近の機器は支配できないことが判り（その割に手術室のレーザーメスは支配されてたような（苦笑））、病院中の機械を作動させた力でミスカマカスくんをやっつけようとしています。ところがどっこい、神の力をつけたミスカマカスくんはカレンの病室の中を無限に広がる大宇宙にしてしまいます（？）。万事休すと思われた時、なんとハリーの愛の力でコンピュータの霊＝マニトウが発動、カレンの身体を借りてミスカマカスくとビーム照射の宇宙戦争を繰り広げます（爆笑）。

やっば、愛ですか……？

で、エンディングのテロップ。

「1969年。東京の15歳の少年の胸に腫瘍が発生。腫瘍は膨張し鮮明ではないが、明らかに人間の胎児であった」

.....

不勉強ながらそういう話、聞いたことありません（苦笑）。東洋の小さな島国のことだと思って、テキトーこきやがってるのでしょうか（苦笑）。

音楽はなぜカラロ・シフリン。この映画だと誰が担当しても浮いてしまったような（苦笑）。

ちなみにこの映画、当時はそれなりにヒットしたように記憶しています。子供が見ると結構怖い映画ではないでしょうか。そう言えば昔、少年サンデーに連載していた上條淳士の『T O - Y』というマンガに、いつもお面をかぶっているマニトウ君というのが出ていました。

【マニトウ (The Manitou) 1978年 USA】

・映画メモ『深海征服』

その昔、映画のポスターは写真ではなくて手書きの絵が主流でした。

大西洋の深海で海洋ラボ第2号と呼ばれる海底研究所では、人間が肉体的・心理的に海底環境にどの程度まで適応できるかという実験が行われていました。このラボは海上に浮かぶ母船トライトン号からケーブルによって電力など供給を受けていましたが、ある日、海底地震に見舞われて海溝深くに転落してしまいます。救援隊を呼んで4日間にわたる海底捜査でもラボは見つからず、最後の手段として深海の水圧に耐えられる最新鋭の深海潜水艇ネプチューン号が現地に運ばれます。その調査でラボが海草をひきずりながら海溝に滑り落ちた事が判明。未知で不安定な地域に潜水する事を拒む指令官アドリアン・ブレイク(ベン・ギャザラ)を説得し、ネプチューン号はラボの乗員を救うために海溝の奥底の深海に潜ります。未知の深海には驚くべきことに巨大な水棲生物が…………。

この『深海征服』、まずタイトルがやばいです。映画で「征服」と名がつく「征服もの」は、本で「～のすべて」というものが全てであったことがないように、征服してたためしがありません(例:火星にしか行かないのに『宇宙征服』)。この映画も単に潜航艇が潜るだけです。これでは征服マニア(…いるのか?)の怒りを買うことは必然です。

実はこの映画のポスターがめっちゃめっちゃかっこいいんです。「The Neptune Factor」で画像検索すると出てきたりするんですが、おお!すげえ!未知の深海に住む多くの巨大水棲生物と戦う、特撮を使った大スペクタクル海洋ロマンみたいではありませんか!実際主役であるカナダの潜航艇ネプチューン号は、カナダの国旗を意識した配色もさることながら、そのデザインも結構気に入ってました。潜水艦とか潜航艇とかも好きでしたし、クストーの本なんかもよく読んでいたのです。わくわく!

そして映画館で見た本編。

「…………」

あたかも深海にいるかのように黙りこくる観客……。

もうね、なんと言うか。映画のシーンも佳境に入って、一番のキモである特撮の場面に驚愕しました。模型を投げ入れたただの水槽に入った魚をのほほんと映しているだけ。なんか魚も模型を入れられてびっくりしたり困ったりしているようです（苦笑）。もちろんポスターにあるような、人と水棲生物とのからみは一切無し。ほとんど当時の映研の連中が作った方がナンボかましみたいな映像でした。『謎の円盤UFO』だったかのCMで見たソニーの「ボク、タコの赤ちゃん」という映像の方が100万倍感動しましたわ。

思わず、キダ・タローがJRIのチェーン店のために作った「いけす道～楽～」というデューク・エイセスの四声コーラスのメロディが、頭の中をぐるぐるとエンドレスでこだましてしまいました（ウソですけど）。この映画がトラウマで『アビス』や『ザ・デプス』、『リバイアサン』などを公開時に見に行かなかったというのは本当です（笑）。

あまりに笑撃的な映像に「いけす道楽」が脳内でエンドレスでかかっていたので、まったく音楽が印象に残っていませんが、この映画の音楽担当という貧乏くじを引いたのは、ラロ・シフリン。『マニトウ』といい、なんというかその……、ご愁傷様です（苦笑）。

【深海征服（The Neptune Factor） 1973年 カナダ＝USA】

【ジョン・ウィリアムズ】

当blogのようにかたすみの寂れた映画小屋でも、現代の映画音楽の巨匠として外すことができない人のひとりが、このジョン・ウィリアムズ（John Williams）です。

1932年2月8日、ニューヨーク州のロングアイランド生まれ。スタジオ・ミュージシャンであった父を持ち、音楽に興味を持ったジョン・ウィリアムズは、UCLAを卒業後ジュリアード音楽院でピアノを学び、ジャズ・バンドをやりながらスタジオ・ミュージシャンを目指します。ハリウッドでアルフレッド・ニューマンが音楽監督をやっていた20世紀フォックスのオーケストラに加入、そこで作曲を手伝ううちに1961年あたりから映画音楽の作曲家として活躍を始めます。

1968年に『哀愁の花びら』で初めてアカデミー賞にノミネートされて、その四年後の『屋根の上のヴァイオリン弾き』で音楽賞、編曲賞、オリジナル主題歌賞を受賞。その後も現在までに40回近くオスカーにノミネートされて、先の『屋根の上のヴァイオリン弾き』に加えて、『ジョーズ』、『スター・ウォーズ』、『E.T.』、『シンドラーのリスト』と計5回の受賞を果たしています。それ以上に、賞とは関係なく印象的な映画も多いのではないのでしょうか。ちなみに1965年からのSFテレビ・シリーズ『宇宙家族ロビンソン』の音楽も担当していました。

その傍ら現代音楽の作曲もてがけ、またボストン・ポップス・オーケストラの創始者であり指揮者であるアーサー・フィードラー（この方についてはいずれ稿を改めて書きたいものです）が亡くなった後に、1980年に就任して1993年まで2代目の指揮者として務めあげて名誉音楽監督の称号をいただいています。

なお、一時期TOTOのボーカルを務めていたジョセフ・ウィリアムズは彼の息子です。また、『ディア・ハンター』で「カバティーナ」等を聴かせてくれるクラシック・ギターの名手であるジョン・ウィリアムズは、同姓同名の別人ですのでご注意ください。

この人も驚異的に多作家ですので印象に残った音楽を挙げていくときりがありませんが、まずインパクトがあったということでは『JAWS ジョーズ』。あの音楽があるのとないのとでは全然違うと思いますし、あれがあってこそ映画も大ヒットして、海にトラウマを持つ人も多くなかったのではないかと思います。私はどういう訳か、あの音楽が頭の中で流れるといつのまにかドボルザークの「新世界より」の第四楽章に変わっちゃいますが（笑）。

今では『エピソードIV』と呼ばれている劇場公開第一作目の『スター・ウォーズ』は2枚組レコードを買って、当時親があきれほど死ぬほど繰り返し聴きました。数々のクラシックの名曲のアレンジの手法を盛り込んだオーケストレーションはすばらしく、またライト・モチーフを用いた構成になっていて、サウンド・トラックを聴くだけでもその音楽が使われている場面が目に浮

かびます。意外に「酒場のバンド」がお気に入りです。サウンド・トラックに入っていないミドル・スローの曲も映画では使われていました。

当時、ロス・アンジェルス・フィルの音楽監督をやっていたズビン・メータがこの『スター・ウォーズ』からの抜粋6曲と、同じくジョン・ウィリアムズのペンになる『未知との遭遇』を組曲に編曲したものをレコーディングしていましたが、このアルバムも思いで深いです。当時、『スター・ウォーズ』と『未知との遭遇』の曲がカバーされた中では、シンセサイザー奏者のミーコによるアレンジも印象に残っています。

『スーパーマン』の時にはテーマが『スター・ウォーズ』とあまり区別がつかない感じで、ちょっとがっかりしたかも（笑）。「まんま、『スター・ウォーズ』でおねがいします」って発注がかかったのかと思いました（笑）。そういえば、『スター・ウォーズ（帝国の逆襲（エピソードV））』の「帝国のマーチ(ダース・ベイダーのテーマ)」はそのメロディの覚えやすさから古くは大阪SF大会で替え歌にされたり、バラエティで使われたりして現在ではあのメロディを知っている人も多いようです。

近年でも『A.I.』、『宇宙戦争』(2005)、『SAYURI』、『ハリー・ポッター』シリーズなどでジョン・ウィリアムズのスコアが堪能できるようです。

・映画メモ『スター・ウォーズ（新たなる希望（エピソードⅣ））』

『スター・ウォーズ』の記念すべき1作目。考えたらもう四半世紀以上前の作品なんですね。

ストーリーについては有名すぎるくらい有名なので省略。

ということで、実は公開前はあらすじだけを聞いて「貧弱な特殊撮影のスペース・オペラか？」と思ってバカにして期待してませんでした。当時はSF映画ブームが到来しつつある頃で、春には『未知との遭遇』や当時の高校生は正攻法では入場できない『フレッシュ・ゴードン』（笑）が日本で公開されて、日本でもやっつけ仕事でいくつかのSF映画が公開されてました。そうして夏の公開時に映画館に見に行ったのですが、これが冒頭のシーンから大画面に釘付け状態。土曜日だったので家に電話して、そのまま朝まで5回繰り返しで見ました。当時は民生用ビデオが普及していないので、音声トラックにナレーションを追加して1時間ぐらいにまとめた、ダイジェスト・ストーリーのレコードをお小遣いをためて買って繰り返し繰り返し聴きました。もちろんサウンド・トラックも後に買って何度となく聴いたのは言うまでもありません。

冒険活劇ものとしては、何度見ても本当によくできている映画だと思います。見ていて楽しいし、映像もスリルがあるし、キャラクターが生き生きとしています。よくよく考えると僅かの間に育ててくれた叔父と叔母が亡くなったり、師になったばかりのベンに死なれたり、仲間を亡くしたり、姫にいたっては故郷の星1つ丸々人々を含めて破壊されているのですが、一時は落ち込んでもすぐに無かったように次に進んでいくという「元気」のよさです（苦笑）。そこはファンタジーたるものでしょう。やられたトゥルーパー1人1人にエピソードをつけたりすると、『オースティン・パワーズ』になっちゃいますもんね。

先月に最初に作られた3作がボーナス・ディスクをつけてDVDで発売されたので、これ幸いと購入しました。実は1997年に上映された【特別篇】の方を見ていなかったもので、ところどころ上映当時と変わった部分があってびっくりしました。「デス・スターってあんな爆発の仕方だったっけ？」とか。で、タイトルも『スター・ウォーズ 新たなる希望（エピソードⅣ）』になっちゃいました。でも『スター・ウォーズ』シリーズの中でこの作品だけは続編の設定があったにしてもそれを考えずに作られているだけに、単独で見るだけで楽しめる作品だなと思ってます。

そういえば公開当時の字幕は「Force」が「理力」となっていて、何の説明もなく出てきたので最初は意味が分かりませんでした。1作目では2作目以降のように「葵花宝典」を手に入れたような活躍をしてませんでしたし。

ちなみにルークの友人ウェッジはこの作品以降も地味に反乱軍で活躍していて、思わず応援したくなります（笑）。

【スター・ウォーズ （新たなる希望（エピソードⅣ））（Star Wars A New Hope Episode 4）
1977年 USA】

・映画メモ『スター・ウォーズ（帝国の逆襲（エピソードV））』

衝撃の第1作から3年後、まさかと思った続編である第2作の登場です。

要塞デス・スターが爆発して一巻の終わりと思われた帝国軍側は、再び強大な戦力を手にして猛烈な反撃を開始、反乱軍は氷の惑星ホスに逃れて反撃の機会を伺います。しかしその場所も帝国軍に見つかり、総攻撃にあって基地を破壊されてしまう反乱軍。立ち直りを図るために反乱軍はばらばらに脱出して、落ち合うことにします。そんな中、ルーク・スカイウォーカーはジェダイ師がいるというダゴバ星に向かいます……。

前作で重要な悪役キャラクターであったベイダー卿がラストで九死に一生を得た描写がありましたが、驚くべき興行成績の甲斐あって帝国に元気に復帰して帰ってまいりました。しかもその潤沢な資金がバックボーンにあるからか、今回ははっきりと「つづく」という文字が出ていないのに、まるでそう書いてあるように錯覚してしまうようなストーリー運びになってました。映画黎明期なら次の週には続きが小屋でかかりますが、我々はその続きを目にするにはさらにまた3年を待たなければなりませんでした。気の長い話です。製作総指揮のジョージ・ルーカスが江戸っ子ではないことを表したエピソードであると言えましょう。

とはいえ、さすが『スター・ウォーズ』で見せ場はいろいろと多くありました。ミレニアム・ファルコンが小惑星の中を突っ切るシーンとかはわくわくさせてくれます。小惑星に住む巨大ウツボ君が結構かわいくて好きです（笑）。

この映画から加わったジョイン・ウィリアムスのペンによる「ダース・ベイダーのテーマ」は印象深く、広く知られるようになりました。

この映画が日本のSF会に及ぼした影響は大きいらしく、大阪でのSFコンベンション用に作られたテープに上記の「ダース・ベイダーのテーマ」に日本語歌詞をのつけたものがあったり（「轟天号」なんかもありました）、コンベンションでは「私はお前の父だ」という名刺を配る人が現れたりしたとか。

映画でのルーク・スカイウォーカーはだんだんバビル2世化してきまして、テレパシーやサイコキネシスを使えるようになってきます。エネルギー衝撃波は出せませんが、ライトセイバーをブンブンいませます。前作でベンが使っている時は控えめであまり気になりませんでしたが、この作品以降だんだんエスパー映画になってきたような気もしないでもありません。

ちなみにルークの友人ウェッジは惑星ホスで遭難したルークを一生懸命探してくれます。

【スター・ウォーズ (帝国の逆襲 (エピソードV)) (Star Wars The Empire Strikes Back 5)
1980年 USA】

・映画メモ『スター・ウォーズ（ジェダイの復讐（エピソードVI））』

『帝国の逆襲』の「To be continued」なエンディングから3年。約1000日の間、待たされました。ええ、待ちましたとも。

カーボンで固められてしまったハン・ソロ（ハリソン・フォード）は惑星タトゥーインの闇のボス、ジャバ・ザ・ハットに買い取られて飾られていました。賞金稼ぎに変装してそれを助けに行ったレイア姫(キャリー・フィッシャー)はすんでのところ、ジャバ・ザ・ハットに捕まってしまう。遂にはルーク・スカイウォーカー(マーク・ハミル)がジャバ・ザ・ハットの前に現れて直談判をしますが、罠にかけられて捕らわれてしまいます。ちょうどその頃、帝国軍は破壊力を数段にも増した新しいデス・スターの建造を進めていました……。

劇場上映ではジャバ・ザ・ハットはこの時に初めて登場しましたが、『特別編』で編集によって手を加えてからは、1作目のエピソード4にも出ていることになっています。冒頭のジャバ・ザ・ハットの館での宴のシーンやエンディングなど、随所に手が加えられてるようですね。

作中ではお姫様が肌もあらわな格好で捕らわれているというような場面がありますが、いかんせんキャリー・フィッシャーでは私はあまり喜ぶことはできませんでした（苦笑）。また、前作もあった「そういうあなたは肉親では」シリーズはこの作品でも健在です。また前作から加わったビリー・ディー・ウィリアムス扮するランド・カルリジアンが活躍をしています。しかし、デス・スターは破壊力を当社比数倍にする前に欠点の克服をするべきではなかったのでしょうか（笑）

お気に入りのシーンはC3POが、ポール・アンダーソンのホーカー・シリーズに出てくるようなぬいぐるみ星人イウォークにこれまでのいきさつを話すところです。さすがは600万種類の言語に通じているロボットだけあって、宇宙船やライトセーバーの効果音を自前で出すところが見事でした（笑）。

ちなみにルークの友人ウェッジは出世して隊を任せられています。

これでスター・ウォーズ・シリーズは完結して終わりました。現在はこれとは別にエピソード1, 2が発表されていますが、いろんな意味で別物のような気がします。

なお、香港版スター・ウォーズである幻の迷作、『スター・フォース ～未知との遭遇～』についてはまた別の機会に。終盤、パチモンのダースベイダーもどきのライトセイバーに対抗するライト・ヌンチャクとのバトルが熱い映画です（笑）。

【スター・ウォーズ (ジェダイの復讐 (エピソードVI)) (Star Wars Return of the Jedi Episode 6) 1983年 USA】

1978年はS F映画目白押しの年だったんですが、その先陣を切って春休みに封切られた作品です。

第二次世界大戦に使われたらしい戦闘機が真新しい状態で砂漠に忽然と姿を現したり、航空機から不思議な物体を見たという報告があったり、インディアナ州のある人里離れた一軒家で地震でもないのに周囲の物が突然揺れだしたりと、奇妙な現象が各地で起こります。電気技師のロイ(リチャード・ドレイファス)が管轄一帯の停電を調べるため車を走らせていたところ、眩い光が現れます。ロイはこれを追いかけますが、飛び去っていきます。やがて、ロイは何かに取りつかれたようになって、仕事も家庭も放り出して謎の光の正体を追うようになります……。

宇宙人との遭遇には3つの段階があって、それぞれ以下の状態を示します。

第1種接近遭遇；目撃

第2種接近遭遇；存在を示す明らかな証拠

第3種接近遭遇；実際の接触

この第3種接近遭遇が映画の原題で、人類が宇宙人に会うまでのお話です。

『2001年宇宙の旅』や『サイレント・ランニング』の特殊撮影を担当したダグラス・ランブルが作り出した映像に、当時びっくりしたものです。それまでのS F映画にはない自然な動きで、カラフルできらびやかな映像がスクリーンいっぱいにはびこっていました。

出だしのつかみがなかなかうまい作品でもありました。暗い画面で徐々に音が大きくなってきたかと思うと、突然砂漠の砂嵐。立て続けに起こる不可思議な現象の描写は、昔のNHK少年ドラマ・シリーズであった『タイム・トラベラー』、『続タイム・トラベラー』などの冒頭のナレーションを映像で示すかのようです。

お話的にはちょっとオカルト色があってファンタジーすぎたし、ちょっと内容が薄いかなとも思いましたが、終始映像に圧倒されましたね。料金所で謎の光球が分裂したり、宇宙船からの返信音で窓ガラスが割れたりとかは面白いのですが、ちょっとよけいだったような気がします。同じ頃『グッバイガール』に出ていたリチャード・ドレイファスが地味ながら好演しています。

宇宙人との挨拶が5音階という発想は新鮮でした。「あの5音は『こんにちは』に対応しているんだ」と言ってた友人がいたなあ(苦笑)。早口で喋ると「ホラ・スタッカート」みたいになるんじゃないかと、いらぬ心配もしてました(苦笑)。

【未知との遭遇 Close Encounters of the Third Kind 1977年 USA】

・映画メモ『スーパーマン』

間違いなくアメリカン・コミックスのヒーローとして最も知られている存在です。かつて1950年代に実写テレビ・シリーズやアニメーションはあったものの、意外や意外、実写版の映画が作られたのは1978年になってからのこと。今は亡きクリストファー・リーヴを一躍スターにした作品です。

遙か遠くのクリプトン星では、3人の犯罪者・ゾッド将軍(テレンス・スタンプ)、ノン(ジャック・オハローラン)、アーサ(サラ・ダグラス)が裁判にかけられて、囚人収容の場・ファントム・ゾーンへ追放されます。その頃クリプトン星は太陽に当たるレッド・サンに異常接近してしまっていて、科学者であるジョー＝エル(マーロン・ブランド)は緊急事態を訴えますが、長老たちはそれを信じようとはしません。ジョー＝エルはまだ赤ん坊のひとり息子をカプセルで脱出させると、妻ラーラ(スザンナ・ヨーク)と一緒にクリプトン星と運命を共にします。カプセルは宇宙を飛んで遙か遠く太陽系の地球のUSAの田舎町に着陸。偶然通りかかったジョナサン(グレン・フォード)とマーサ(フィリス・サクスター)夫妻に拾われて育てられます。クラーク・ケントと名づけられた子は赤子の頃から異常な力を発揮し、それは成長と共にどんどん強くなっていきます。やがて育ての父が亡くなり、クラーク(クリストファー・リーヴ)はクリプトン星のクリスタルから出生の秘密を知ります。都会に出てデイリー・プラネット社に入社して新聞記者になったクラークは、同僚の女性記者ロイス・レーン(マーゴット・キダー)に惹かれていく一方、正体を隠しながらスーパーマンとして活躍をします。ところが、悪事を企むレックス・ルーサー(ジーン・ハックマン)は仲間のオティス(ネッド・ビーティ)とイブ(ヴァレリー・ペリン)を引き連れて、とんでもない計画を……。

スーパーマンの第一作だけあって、スーパーマンの誕生からその活躍までを網羅した映画です。第一作目はやはりヒーロー誕生のエピソードは欠かせないものですが、それほど不足なくコンパクトに収められていて後半の活躍までたっぷり見所を残しています。しっかり第二作の前振りを入れているのはさすがですが(笑)。そういえば劇場でのエンディングでは「来年は『スーパーマン2』」という字幕が出ていましたね(笑)。この映画では特にクラーク・ケントの少年時代がちょっとだけ描かれているのがよかったです。

おそらくこれだけ有名なヒーローでありながら実写版劇場映画が作られなかったのは特殊撮影のこともあってなのでしょうが、それだけになかなか飛ぶということに対して「見せる」特殊撮影ができていたのがポイントが高いです。実写テレビ・シリーズの冒頭の惹句にもあったように、「早い、うまい、安い」「早い、強い、飛ぶ」が3大セールス・ポイントですから重要です。空中デート・シーンはシリーズを通して名シーンのひとつでしょう。逆に時代のせいでも電話ボックスが変身場所として使いづらくなった点も、逆にユーモアで見せています。

この映画が初主演のクリストファー・リーヴも実にスーパーマンにぴったりの役柄でした。また

カメオ出演のマーロン・ブランドもさすが『ゴッドファーザー』の貫禄です。

実際のところ、実写映画『スーパーマン』シリーズにはそれぞれ大きなツッコミどころがあるんですが（苦笑）、この映画の「オチ」には正直劇場で脱力しちゃってガッカリしました（大苦笑）。「あれ」が許されたら何でもありになってしまうというか（苦笑）。私は死というものは不可逆であるからこそ生を大事にしなければならないし、それによってドラマが生まれる（例えば『黒いオルフェ』など）と思っているので、どうにも未だに納得してません（苦笑）。逆に「あれ」をやってしまったから大変なことが始めるドラマがあったら面白かったのかもしれませんが。あと、ロイス・レーンの魅力が今一歩わからなかったです（苦笑）。

ロンドン交響楽団を使った豪華なオーケストレーションによる音楽は、ご存知ジョン・ウィリアムズ。この曲と『スター・ウォーズ』の区別がわからなくなってごっちゃになる人が後を断たないとか（笑）。だって、ねえ？（笑）

【スーパーマン（SUPERMAN） 1978年 USA】

・映画メモ『スーパーマンⅡ 冒険篇』

前作『スーパーマン』の劇場公開版の最後で「来年は『スーパーマン2』」とあったものの、3年の月日を要して世に出た続編です。スタッフに入れ替わりがあるものの、同じキャストによる極めて正当な続編映画です。

パリのエッフェル塔がテロリストに占拠され、核爆弾によって破壊されそうだという事件が発生。しかもパリにはデイリー・プラネット社の女性記者ロイス・レーン(マーゴット・キダー)が危険を顧みずにエッフェル塔にいました。それを知ったクラーク・ケント(クリストファー・リーヴ)はスーパーマンに変身するとパリに飛び、ロイス・レーンを助けると核爆弾を宇宙に放り投げて間一髪でパリ市民を救います。ところが宇宙に放り投げられた核爆弾は爆発して、その衝撃で偶然クリプトン星の犯罪者を閉じ込めていた収容所ファントム・ゾーンに脱出口を作ってしまいます。中から出てきたのは3人の犯罪者であるゾッド将軍(テレンス・スタンプ)、アーサ(サラ・ダグラス)、ノン(ジャック・オハローラン)。手始めに月に降り立って宇宙飛行士をからかうと、一路地球のUSAを目指して行きます。一方、レックス・ルーサー(ジーン・ハックマン)は刑務所を脱獄。そしてある出来事によってクラーク・ケントはロイス・レーンに自分の正体を打ち明けます……。

しっかり前作で前振りのあった隠し刑務所の三悪人が登場。スーパーマンと同郷だけあって同じ能力のある超人が3人、地球上で暴れ回ります。おまけに宿敵(苦笑)であるレックス・ルーサーも脱獄。一方、色ボケしている(苦笑)スーパーマンはどういったトンチで悪人を懲らしめるのでしょうかといった趣向の映画だったような気が。

敵が手ごわいだけに、正義対悪のアクションの見せ所はシリーズ初の場面。スーパーマンだけにこういう場面はやっぱり期待したいですね。敵の強さが出ていただけに、なかなか見所がありました。力はないもののスミス博士よろしく口八丁で切り抜けるレックス・ルーサーもまた、なかなか憎めないキャラクターです。禿げてないのが残念ですけど(笑)。

ピンチを脱するトンチについてはともかくも、スーパーマンが愛に溺れ、ラストにささやかな復讐をする等、非常に私的な行動が目立っていたのが、あまり私の持っているスーパーマン像と合わなくてちょっとがっかりした憶えも。それと、邦題の「冒険編」の意味が今一步よく理解できなかったような気がします(苦笑)。

【スーパーマンⅡ／冒険篇 (SUPERMAN II) 1981年 USA】

A.I.=artificial intelligence。人工知能のことを言い、割と古くから使われていた略号です。確か昔のFEP（コンピュータの日本語入力システム今で言うIME）もAI機能云々言われていた頃があったような。

未来の社会では人々のをサポートするために造られたロボットが普及していました。科学力の発達で既に外見は人間と変わらないロボットも既に働いていましたが、まだ感情までは作られることがありませんでした。そんな中でサイバートロニクス・マニファクチャリング社の社員であるヘンリー(サム・ロバース)とその妻モニカ(フランシス・オーコナー)の間に生まれた息子のマーティン(ジェイク・トーマス)が不治の病にかかります。夫婦は治療法が見つかるまでと息子を冷凍保存にします。悲しみに暮れる妻に、ヘンリーは自社で開発された次世代ロボットを連れてきます。それは愛という感情をプログラムされたロボット、デイビッド(ハーレイ・ジョエル・オスメント)で、夫婦に愛されて過ごすことになります。ところが息子のマーティンが治ることになって自宅に戻ると一転してデイビッドは邪魔者に。人工知能をもつおもちゃのテディ(声：ジャック・エンジェル)と共に旅にでることになります……。

今は亡きスタンリー・キューブリックが長年温めてきた企画であると世間では宣伝された映画です。原作はブライアン・オールディスの短編小説の「スーパートイズ」なのだそうです。

テーマ自体は掘り下げるとなかなか興味深く面白いテーマですし、特殊撮影の関連もILMが担当して、マイケル・ランティエリやデニス・ミュレン、スタン・ウィンストンなどという名前が並んでいて、安心して見ることができる特殊撮影シーンを作り出しています。子役である主役のハーレイ・ジョエル・オスメントも『ペイ・フォワード 可能の王国』などで見せたような、素晴らしい演技力を見せてくれています。ただ、お話が私には中途半端に「泣け。さあ、泣け」と言っているようなお涙ちょうだいものになっている感じで、見ながらなんだかなあという気持ちになってしまいました。もっと作りようもあると思うのですが、なんだか過度の思い入れが映画全部を台無しにしているような気がしてなりません。

シブい声でしゃべるクマちゃんことテディがひとつの清涼剤(?)になっていたかもしれません。あと、ジゴロなロボットに扮するジュード・ロウは雰囲気だしていました。頭の中でユニコーンの「ジゴロ」が鳴り響くのは困ったことなんです(笑)。ちなみにヒモという言葉を教えてくれたのは学生時代に漫談風の授業で人気があった歴史の先生で、「西郷さんの犬はオスカメスカ?答えはヒモがついている」というものでした。って、まだそういうことは憶えているんだよなあ(苦笑)。

【林光】

一般にはなじみが薄い名前かもしれませんが、日本を代表する現代音楽家のひとりです。私が好きな現代作曲家のひとりでもあります。

1931年10月22日、東京に生まれた林光は尾高尚忠に作曲を学ぶこととなります。東京芸術大学作曲科に入学して中退したものの、1953年に間宮芳生、外山雄三などと作曲活動を共にし、その年に「交響曲ト調」で芸術祭賞受賞することとなります。1957年から映画の音楽も手がけるようになりますが、わずか4年後の1961年には新藤兼人監督の映画『裸の島』で第2回モスクワ国際映画祭作曲賞を受賞。『日本フィルハーモニー物語 炎の第五楽章』など多くの作品を残しています。

実は私が林光を意識した3つの作品は、実はいずれも映画音楽とは関係なかったりします。

初めて林光の音楽を聴いていいなと思ったのは、大河ドラマの『国盗り物語』の主題曲。オーケストラの勇壮なテーマに挟まれて中間にロマンティックな旋律が聴ける音楽で、今でも好きな曲のひとつです。

そして次に気に入ったのは平日のFM放送でたしか平日の15:40~16:10に邦人の若手アーティストのスタジオ・ライブ等を放送していた『午後のリサイタル』というミニ番組のテーマ曲。弦楽によるリリカルなテーマ曲がとても好きで、いつもフェード・アウトするテーマを聴きながら、じっくり最後まで聴きたかったなと今でも思っている曲のひとつです。ちなみに、すぐその後にはいつも『軽音楽をあなたに』という番組が始まって、リチャード・ティーのフェンダー・ローズのイントロが印象的な、スタッフの「いとしの貴方 (My Sweetness)」が始まったものでした。

そしてもう1曲が林光の代表作のひとつでもある合唱曲「混声合唱のための『原爆小景』」。テーマもさることながら、林光の繊細で美しい音楽を感じることができる合唱曲だと思っています。

アルバム『映画音楽 林光の世界』には代表作が16曲収められていますが、『動脈列島』も画面と共に思い出される映画音楽です。同じ意味で『第五福竜丸』も心の奥底の残るものがありました。意外なところで、大島渚監督の「問題作」（っていろいろありますけど（笑））、『帰ってきたヨッパライ』の劇中音楽や『忍者武芸帳』も担当しているんですね。

しかし今回調べるまで、当時手塚治虫のアニメーション+実写で話題になったテレビ番組『バンパイヤ』の主題歌を含めた曲を担当しているとは知りませんでした。あれもなかなかポップで好きな曲が多かったです。

日本で職業的交響楽団として活動している数は、2005年現在札幌交響楽団から九州交響楽団まで、現在全部で23団体なのだそうです。もちろん、人数も多く維持費もかかる交響楽団ですので、興行収入だけではなかなか難しく、補助金を受け、企業や地方自治体を経営母体として仰がざるを得ないところも多くなります。

『ビルマの豎琴』、『太陽の季節』、そして渡り鳥シリーズなどをヒットさせた日活は映画の斜陽にあわせて、1971年からはロマンポルノ路線に舵をとって、それは1988年までつづくこととなります。1978年には社名を「にっかつ」と変更。経緯については知らないのですが、その3年後の1981年に、にっかつによって作られた一般映画です。

通称・日フィルとして呼ばれることもある日本フィルハーモニー交響楽団は1956年に創立したオーケストラですが、1972年6月に経営母体であった文化放送とフジテレビが交響楽団解散と全楽団員解雇を一方向的に通知。1984年の和解に至るまで、解雇を不当とする労働争議、分裂による新日本フィルハーモニー交響楽団の設立、7割の残ったメンバーによる自主運営と聴衆・音楽愛好家の支援による演奏活動など、さまざまな出来事がありました。この映画はまだ争議中の1981年に、日本フィルハーモニー交響楽団がその難関を乗り越える過程を題材にラブ・ロマンスを絡めたフィクション仕立ての映画です。

それまで『天皇の料理番』などのテレビ番組に出ていた女優、田中裕子の初映画出演作であり、主人公の恋人役であるヒロイン・茂木伸子を演じていました。その主人公は風間杜夫。樺沢昇という、バイオリン奏者として放送局の援助打ち切りによって楽団が混乱状態に陥った日本フィルハーモニーに入団したての新人として演技をしています。

音楽は現代音楽の作曲家でこの頃は映画音楽作曲家としても重鎮であった林光、演奏はもちろん日本フィルハーモニー交響楽団で渡辺暁雄が指揮をしています。

この映画、テレビ局が敵役だけに今までにテレビで放映されたという話を聞きません。まだ、ビデオ、LD、DVDにもなっていないようで、埋もれてしまうのは惜しい映画です。ぜひまた日の目を見ることを望みたいものです。

【フランス・レイ】

1960年代後半からのフランスの映画音楽といえばフランス・レイ（Francis Lai）を抜きに語ることはできません。

1932年4月26日、フランスのニースで生まれたフランス・レイは子供の頃にピアノとアコーディオンに親しんで育ち、パリのコンセルヴァトワールで作曲を学びます。一方ジャズにも夢中になった時期もあり、1950年代にはモンマルトルに住みながら友人で歌手のクロード・ゴアティと活動。その後、ミシェル・マーニュの楽団の仕事を通じてシャンソンの世界に入り、エディット・ピアフやイブ・モンタンと作曲に伴奏にと活動をします。そんなフランス・レイが映画音楽にかかわるようになったのは1964年のジャン＝リュック・ゴダール監督の映画『男性・女性』。そして映画音楽の世界でのフランス・レイを有名にしたのがクロード・ルルーシュ監督との初めての仕事、『男と女』での音楽です。それからは次々とリリカルなメロディによる映画音楽を次々に世に送り出して、1970年の『ある愛の詩』ではアカデミー賞作曲賞、ゴールデン・グローブ音楽賞を受けています。1990年代以降はめっきり作品も少なくなりましたが、一時代を作った映画音楽作曲家として人々の記憶に長く残る人でしょう。

いかにもフランス・レイらしいと言ったらやはり最初の代表作『男と女』ですね。私にとって「ダバダバダ」と言えば『男と女』、「シャバダバシャバダバ」と言えば「11PM」です。確か昔の音楽の教科書にも取り上げられていて、「聞こえるダバダバダバダバダ 声よダバダバダバダバダ」みたいな変な歌詞がついていたような（苦笑）。日本の片田舎に住んでいた人間にとっては、あの曲からフランスのオシャレな感じを受けていたものです。

そして同じような傾向の曲ですが、『白い恋人たち／グルノーブルの13日』のテーマ。改めて聞いてもよくできた美しいメロディで、すべるような3拍子のリズムが心地よい曲です。

ちょっと変り種なのが『華麗なる対決』。BB（ブリジット・バルドー）とCC（クラウディア・カルディナーレ）についつい目が行きがちですが（笑）、ここでのフランス・レイの曲ははっきり西部劇しています。それでありながらちょっとライトで優雅な部分を感じるのはフランス・レイならではのしょうか。

『ある愛の詩』については言わずもがなでしょう。ドラマティックでセンチメンタルな曲ですが、聞いたら強く印象に残る曲であるとは間違いなく、人口に膾炙したのも頷けます。

・映画メモ『白い恋人たち／グルノーブルの13日』

「白い恋人」というとよく友人が北海道土産に買ってくる（催促している訳ではない（笑））石屋製菓のお菓子ですが、サイトの「白い恋人誕生秘話」には、当時の石屋製菓の石水幸安社長の記憶のどこかに、グルノーブル・オリンピックの記録映画『白い恋人たち』があったのではないかと書かれています。また、冬季オリンピックの季節がやってきました。

この『白い恋人たち／グルノーブルの13日』は1968年の2月6日から2月18日まで、フランスのグルノーブルで行われた第10回冬季オリンピックの記録映画です。当時はあのブランデーIOC会長の元、37ヶ国の参加で6競技（スキー・スケート（スピードスケート・フィギュアスケート）・アイスホッケー・ボブスレー・バイアスロン・リュージュ）35種目が行われたそうです。フランスにとって冬季オリンピックは第1回のシャモニー・モンブラン大会以来44年ぶりにフランスで行われた大会で、ド・ゴール大統領の全盛期だったこともあり当時としては盛大に行われました。

私の場合は転校が多くてデラシネ体質だったもので、高校野球やオリンピックなどで、地元を応援するといった習慣がまったくといっていいほど無く、テレビもあまり見ません。その割りに『民族の祭典』や市川崑監督の『東京オリンピック』なんかの映画は見ていますが、この映画もオリンピックの映画としては名高く、また一風変わった映画です。

監督は2年前に『男と女』で評判をとったクロード・ルルーシュ。映画の始まりで下手な歌と口笛をバックに（苦笑）、「この映画は記録映画でもスポーツ映画でも思想を持った映画でもない。ただの1本の映画である。～」というフランス語のタイプの文字が映りますが、確かに正確には記録映画とはいえないでしょう。系統立てて競技を映した編集にはなっていない、気に入ったと思われる競技シーンのいろんなアングルからの撮影による抜き出し（短いながら迫力があり、また撮影のセンスが光ります）に加えて、リハーサルの模様や町のパレード、パーティやバンド演奏のシーンなどが109分という短いフィルムの中に押し込められています。クロード・ルルーシュによる、オリンピックをテーマにしたBGMと言っても間違いではないでしょう。そういえば、途中日本語が聞こえると思ったら4年後の札幌オリンピックに備えて、この大会には多くの日本人選手を送り込んでくれたのですね。

それに加えてBGM化を押し進めているのが、『男と女』でもコンビを組んでいた音楽担当のフランシス・レイですね。この映画のテーマ曲は世間一般によく知られているように、名曲中の名曲です。それが映画の冒頭、聖火リレーの映像にかぶってくる場面は息を呑むほどすばらしく音楽の効果が出ています。アレンジも含めて改めてフランシス・レイの天才ぶりに感心します。途中も数々の曲に映像が彩られ、中でもシャンソンのシニカルな歌詞に乗ると、映像に皮肉な色合いが出てくるところはフランス映画らしいところ。また、エンディングでは冒頭の有名なテーマ曲に歌詞がつけられていて、その曲と共に映画は終わります。

「13日間は過ぎて 人々は帰ってゆく
もとの生活の 日々の流れの中に
フランスの13日間に だれもが恋をした
一瞬たりとも 決して忘れない
競い合った精神は いつまでも消えない」

ちなみにフランスではその1ヶ月後から学生ストや学生運動が全国に広がり、そのまた1年後の3月にはフランシーヌ・ルコントが亡くなっています。

【白い恋人たち／グルノーブルの13日 (13 JOURS EN FRANCE) 1968年 フランス】

・映画メモ『華麗なる対決』

『女ガンマン・皆殺しのメロディ』とこの『華麗なる対決』。実は一時期『女ガンマン/37564(ミナゴロシ)DVD-BOX』という抱き合わせ商法で売っていたので買ってしまいました（爆笑）。なんだよ？「37564」って（笑）。この2作品、女ガンマンが主人公という以外に共通点はありませんが同じ年に作られた作品で、こちらはBBことブリジット・バルドーとCCことクラウディア・カルディナーレの対決が見られるB級映画の佳作です。

1880年頃、ニュー・メキシコはフランスフォート・サーージュ地区一帯では、フレンチ・キングという武装強盗団が暴れまわり一万ドルの懸賞が賭けられていました。実はその正体は両親を亡くし、爺やと放浪生活をするルイズ(ブリジット・バルドー)とその4人の妹たちでした。一方、この地区のフランスの開拓した町ブーヅヴァル・ジャンクションでは、やはり両親を亡くした牧場主マリア・サラザン(クラウディア・カルディナーレ)というじゃじゃ馬娘がアメリカン・ネイティブの爺さまに見守られながら4人の大人の割にやんちゃな弟を養って生活していました。頼りない町の保安官(マイケル・J・ポラード)はマリアに3年越しで惚れていますが、男勝りのマリアはいつも素気無い返事ばかり。クリスマス・イブの日、ブーヅヴァル行きの汽車がフレンチ・キングに襲撃されて、客の1人である胡散臭い男ミラー医師(アンリ・サルアंक)のカバンの中身も奪われます。その中にはブーヅヴァルの外れにあるリトルP牧場の売買契約書が入っていて、5人の姉妹はこれで土地に落ち着いて生活ができると喜びます。一方、運転手が気絶して暴走する汽車はブーヅヴァルを通り過ぎ、クリスマス・プレゼントが乗っていることもあって保安官とマリアたち姉弟は汽車を止めに行きます。そこで弟のひとりが列車に残されたカバンをマリアにプレゼント。ところがそのカバンの底にリトルP牧場の石油鉱脈があることを示す地図が残っていたのです。マリアは早速売りに出ていたはずのリトルP牧場に向かいますが、そこには土地の権利書をもったルイズたちが到着した後でした。二人は睨み合い、火花を散らします……。

お色気たっぷりのウエスタン・コメディです。とにかくブリジット・バルドーとクラウディア・カルディナーレという二枚看板が華やかですね。しかもブリジット・バルドー側は4人の妹もいますし。クラウディア・カルディナーレはこの頃絶頂期、ブリジット・バルドーも旬は過ぎたとはいえ、この映画では輝くばかりの華があります。終始じゃじゃ馬娘に徹するクラウディア・カルディナーレと、クールな強盗としたりやかな淑女の二面を見せるブリジット・バルドーも見所です。ブーヅヴァルに着いた時のブリジット・バルドーの髪型なんかいいですなあ。双方、弟妹達の面倒を見て頼りがいのある姉御肌であるところがまたかっこいいです。

シビれるシーンのひとつはポーカーの後での2人の対決でしょうね。「返すわ 弾が自然にでちゃって」と言うブリジット・バルドー、かっこよすぎです。また、キャット・ファイト派には最後の格闘は見逃さないでしょう。両方の保護者もなかなかいい味を出していました（笑）。ブリジット・バルドー以下4人の妹の遠景からの水浴びのシーンはサービスでしょうけど、マリ

アの4人の弟の取り調べのヌード・シーン（苦笑）もサービスなのではないか（笑）。

音楽はなんとフランシス・レイ。映画の内容にあわせてライト感覚のサウンド・トラックですが、きちんとツボを押さえているところはさすがです。

明るく軽くセクシーでハッピーな西部劇で、こういうのが好きな人にはお薦めです。

【華麗なる対決（LES PETROLEUSES） 1971年 フランス／イタリア／スペイン】

【A.R.ラフマーン】

インド映画のサウンド・トラックといえば一番に名前が挙がるのがこのA.R.ラフマーン（A. R. Rahman）であることは疑いもないでしょう。

A.R.ラフマーンは1966年1月6日にインドのチェンナイで、マラーヤラム語映画の音楽監督でインドで初めてのシンセサイザー奏者だったR・K・シェーカル（言わば「インドの富田勲」みたいな人でしょうか）の息子として生まれています。父親はラフマーンが9歳の時に亡くなってしまいましたが、ラフマーンは11歳からキーボードを始めて演奏活動を始めます。その後ロンドン3大音楽院のひとつ、トリニティ・カレッジ・オブ・ミュージックに特待生として留学、西洋クラシック音楽を学びます。演奏家からテレビ・コマーシャルのジングルやドキュメンタリー音楽の作曲家になったA.R.ラフマーンは、マニ・ラトナムと出会い、『ROJA』の音楽を担当。インド中で大ヒットを記録して、見事ナショナル・アワードを獲得します。その後もタミル語映画を中心に音楽活動を積極的に行い、2002年には『オペラ座の怪人』のアンドリュー・ロイド・ウェバーに招かれてロンドンで上演するミュージカルを作曲。ブロードウェイにも進出したそうです。ちなみにラフマーンという名前が判るようにムスリムに改宗しています。

A.R.ラフマーンと言えど日本でも一番に名前が挙がるのが、『ムトゥ 踊るマハラジャ』でしょう。ミュージカル映画でもあるインド映画らしい作品で歌にバックに、A.R.ラフマーンのメロディが堪能できます。

同様に『パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ！』も、クセになるような濃厚なメロディと独特のアレンジで迫ってくる名作です。これを見てからはしばらくはメロディが頭の中でぐるぐる回っていました（笑）。

『ボンベイ』はノリのいいシンセ・ビートの曲から巧みなコーラス・アレンジによる荘厳な曲まで、バラエティに富んだ曲が挿入されています。まさにA.R.ラフマーンの面目躍如。『インドの仕置人』でこの『ボンベイ』で流行った曲を出してみるなんてサービスもしていましたね。

アカデミー賞外国映画部門にノミネートされた『ラガン』はまたちょっと違った感じで、シンセサイザーをあまり表に出さずにオーケストラとインド楽器を中心にしたアレンジで作られています。これまた見事に気持ちのいい音楽を作りだして壮大な風景にあう音楽をつけています。

中国映画の『ヘブン・アンド・アース』が印象に残っていますね。映画も西域を旅する場面が主だけにA.R.ラフマーンの曲がぴったりでした。映画全編を流れるメロディを主体にした主題曲を台湾の蔡依林が歌っていますが、このプロモーション・ビデオの方がラストでトンデモ世界に誘ってくれる（苦笑）本編よりもいいと思うぐらいです（笑）。

・映画メモ『ムトゥ 踊るマハラジャ』

インド映画というとなりの人はこの映画のタイトルを思い浮かべるのではないのでしょうか。

南インドのタミルナドゥ州の大地主ラージャ(サラットバープ)は大の芝居好き。母シヴァガミー(ジャヤカバールティ)の目を盗んでは屋敷の召し使いの中でも人気者のムトゥ(ラジニカーント)と共に、芝居小屋に行っていました。そんなラージャに母の兄で大地主の座を狙う悪党の叔父アンバラッタール(ラーダー・ラヴィ)は素直で器量良しの娘パドミニ(スバシリ)を結婚相手にと送り込みますが、ラージャは毛頭結婚する気もありません。そんな時、またもや密かにラージャとムトゥは芝居を見に行き、ラージャは旅回りの女優ランガ(ミーナ)に一目ぼれをします。別の日に困っているランガを隣村まで馬車に乗せる機会があり、その流れでリハーサルを見学していると、土地のならず者が劇団員をさらおうと乱入。ラージャはムトゥにランガを逃がして、屋敷に馬車で連れ帰るようムトゥに命令します。無数の追っ手相手に馬車で逃げるムトゥとランガ。やがて追っ手を払いのけて見知らぬ土地まで逃げたムトゥとランガは、お互いに強く惹かれあうようになっていました……。

日本で最もヒットして最も知られているインド映画でしょう。この映画のヒットのおかげでしばらくインド映画の公開が続き、私にとっては『ラジュ出世する』で大いに気に入ったインド映画を見る機会が増えて嬉しかったです。A.R.ラフマーンの音楽との出会いもこの映画からです。

何が踊るマハラジャなのかちょっと謎な部分もありますが(笑)、改めて見てもミュージカル、アクション、ラブ・ロマンス、コメディとバランスのいい映画でした。ポスターやジャケットに本当は主人公であるラジニカーントが判らないぐらいに小さくされて(笑)、インドらしい衣装のミーナを大きくあしらったのも日本での成功の一因かもしれません。オーソドックスなオーケストレーションから打ち込みまで自由自在なA.R.ラフマーンの音楽も生きていて、しゃっくりのサンプリングの裏打ちで始まる曲などもあって、アイデアも豊富です。

これ以降、『パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ!』や『アルナーチャラム 踊るスーパースター』などのラジニカーント主演の映画や、『ラガン』、『ボンベイ』、『インドの仕置人』などといった映画を見ることができたのは嬉しいですね。最近はDVDで謎の日本語字幕(笑)がついているものがあるものの、願わくばもっともっとインド映画が日本で見れる映画が増えてほしいものです。

【ムトゥ 踊るマハラジャ (Murhu) 1995年 インド】

・映画メモ『パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ！』

『ラジュー出世する』以来、日本でもインド映画がそこそこ公開されるようになりましたが、この『パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ！』は、『ムトゥ踊るマハラジャ』のラジニカーントが主演した、インドならではの娯楽映画です。

マドラスで技師として働いていた村の大地主の一人息子パダヤッパ（ラジニカーント）は、妹の結納のために故郷へ帰ってきます。そこでいとこのニーランバリ（ランミヤール・クリシュナン）とその召使の娘バスンダラ（サウングリヤ）に合うこととなります。USA帰りのお嬢様であるニーランバリはパダヤッパに一目で惚れてしまいますが、パダヤッパは清楚なバスンダラに恋をします。召使にパダヤッパを奪われたニーランバリはパダヤッパに復讐を誓います……。

歌あり踊りあり恋ありアクションありで、丸々3時間がまったく飽きないインド映画らしい娯楽映画ですが、とても登場人物のキャラクターが立ってますね。主人公のパダヤッパは主役らしく喧嘩は強く男気溢れる人望厚いスーパー・ヒーロー。顔も濃いです。なんせ葉巻をくわえたまま数人を片付けたりします（笑）。また、『仮面ライダー 響鬼』のヒビキさんばりに手で敬礼する時は「シュッ！シュッ！」とすごい効果音入り（笑）。でも惚れた娘には弱くて前に出ると喋れなくなるし、仲間にラブレターを持たせて2年が経過しちゃうし（笑）、結婚後も妻と娘の尻の下にしかれています（笑）。没落した時ついで泣いてしまうなど、弱いところも見せてくれるという共感させてくれる部分も。娘に言うセリフ、「誰かを愛したら親のことは忘れなさい。結婚した後も相手を愛すること。子供は親を忘れるが親は子供を忘れない」もキマってます。

冒頭の登場シーンから人の数をふんだんに使った歌のシーンはさすがで、「パダヤッパ！パダヤッパ！」と連呼する主題歌は、『包丁人味平』で鼻田香作が出したブラック・カレーみたいにクセになります（笑）。DVD特典についているひらがな字幕の主題歌もGOOD！（笑）「やんべーる ぱらやっぱ いゅらヴあった ならやっぱ」って、アンタ（笑）。

また、妹の結納の場で「武田井！武田井！武田井！」という口パーカッション・ソロは圧巻。音楽は近年は中国映画『ヘブン・アンド・アース』でも活躍しているインドの巨匠A.R.ラフマーン。独特のアレンジと耳に残る音楽で楽しませてくれます。

パダヤッパに対するニーランバリはこちらが主役じゃないかと思うぐらい強力なキャラクターです。最後の字幕でニーランバリの名前の意味を知りましたが、主人公もヒロインもかすんでしまうぐらいの情念の女。ぽっちゃり系の肉感的な女優ですが、パダヤッパの妹の結納の場での踊りはサルサ歌手のインディアばりの迫力で迫ります（笑）。また、特に首を釣った父親の前で踊るインドのサロメとも言うべき踊りのシーンは、鬼気迫るものがあってすごいですね。それもあって単なる能天気な娯楽映画にはなっていませんが、なかなか見所があります。

寺院での最初の復讐は内容が内容だけに涙流して笑っちゃいましたが（爆笑）。それに対するパダヤッパの機転も爆笑ものだし（笑）。ちなみに牛は犬のように色覚はなく、闘牛ができるのはひらひら動くものに反応するからなのだそうです。その後の情念の復讐からラスト・シーンまではかなりごっついものがあって、目が離せませんでしたね。パダヤッパが娘のためにニーランバリの家に行った時は西部劇なみの緊張感でした。

おかげで影が薄いヒロインのバスンダラですが、その役をやっていたサウンダリヤは昨年春に飛行機事故で亡くなっています。これからも活躍できる人だったでしょうに、とても残念です。

【パダヤッパ いつでも俺はマジだぜ！（PADAYAPPA） 1999年 インド】

・映画メモ『ボンベイ』

インド最大の商業都市であって貿易港であるボンベイは「良い入り江」という意味の言葉。インド映画を現すハリウッド映画という造語も、「ボンベイ+ハリウッド」から来ています。1995年を境に旧英領の名残をなくすために、大昔に呼ばれていたムンバイと改称しました。ムンバイというのは、ヒンズー教のパールバティー女神の化身「ムンバデヴィ」に由来する名前だということです。

ジャーナリスト志望の青年セーカル(アラヴィンドスワーミ)は久々に故郷に帰ってきた時に出会ったシャイラー・バーヌ(マニーシャ・コイララ)と恋に落ちて、2人は愛し合うようになります。やがて結婚を誓う2人ですが、セーカルの家はヒンズー教徒、シャイラーの家はイスラム教徒であるために、お互いの親も大反対。ところがバーヌはボンベイに戻ったセーカルのもとへ行くと結婚をします。そして新聞記者となったセーカルとバーヌの間には双子の男の子が生まれ成長していきます。6年後の1992年12月6日、インド人民党と世界ヒンズー協会の率いる2万人によるインド北東部のアヨディアにおけるイスラム寺院=モスクの破壊事件をきっかけにインド全土でヒンズー教徒とイスラム教徒の対立が激化、ボンベイでも殺戮をも辞さぬ大暴動が発生します……。

映像に凝ることでは定評があるマニ・ラトナム監督の問題作。この映画が公開されるや、監督の自宅に爆弾が投げ込まれるという事件がおきたりもしたそうです。インド国内での植民地時代を含む歴史の深く大きなテーマでもあるヒンズー教徒とイスラム教徒の対立問題を扱っているだけに、いろんな反響もおおきかったそうですが、結果的には本国では大きなヒットにもなった映画だそうです。

なにせ本来イギリスが撤退後にインドとして一緒に独立するはずだった地がパキスタンとなって、現在もインドの名指しの敵国であることも、あのマハトマ・ガンジーがヒンズー教徒とイスラム教徒の和解を願って引退の身から復帰して力を尽くした結果、自分と同じヒンズー教徒に暗殺されたのも、この宗教対立が大きな影を落としているようです。この映画でも述べられてるアヨディアでのモスク破壊事件は実際に起こった事件で、この時にインド各地でイスラム教徒が2000人以上も殺戮されたとのこと [参考コラム]。この映画はその直後に作られています。

今の日本にいると過激な宗教対立や紛争と無縁でありピンとこない事柄だと思えますが、貧困、飢餓や天災、紛争などなどのよる大きな括りでの不幸に身を置いている場合には宗教が大きな心の拠り所になることは否めないでしょうし、また宗教は人が作ったものである故に絶対的な性格を持たざるをえない存在であるにもかかわらず、持つ者によって同じ宗教内でさえ齟齬がおこらない訳もなく、そこに対立の構造が生まれてくるのでしょう。もっと普遍的に見るのであれば主義主張、民族間、国家間の対立も同じような構造を持っている部分があるのではないのでしょうか。そういう意味では決して遠い話でもない訳です。

とは言ってもそこはこの『ボンベイ』もインド映画。歌に踊りに恋にアクションにと、インド映画のオヤクソクであるエンターテインメントがてんこもりです。当然のように休憩を挟んで2時間半近くもあるのですが、それを飽きさせないだけの娯楽たっぷりの要素もあって、それがメッセージ性の強い映画と混ざり合って融合しています。逆に言えばもしかしたらラストの作り方も含めて、インドではこのような形式でないと広く上映できなかつたり、多くの支持を受けることができないのかもしれませんが。もちろん、映像は随所にはっとするような場面を見ることができました。

監督も描きたかったことのひとつでしょうが、結婚前にあれだけ大反対したお互いの父親が孫の誕生で宗教を超えて仲良くなる場面とかは、本当に嬉しくなる場面です。それだけに火事の中、コーランを持ち出すシーンは心にぐっときましたけど。また夫婦のラブラブな描写がとても微笑ましく、見ている方がうれしくなるような感じでした。子供を授かった時の歌や、「女の子がほしい」と親子でねだるシーンの歌とかは、もうインド映画ではないと見ることはできない場面でしょうなあ。その美しさで目を楽しませてくれた主演女優のマニーシャ・コイララはネパール出身で、ネパールの首相を4度務めたネパール会議派の党首ギリジャ・プラサド・コイララ（先月も現王政下にあって、首都カトマンズでの民主化デモに参加して昏倒したそうです）の姪。マニーシャ自身はヒンズー教徒でありながら役柄はイスラム教徒を演じていました。

音楽はマニ・ラトナム監督との出会いが映画音楽に入るきっかけになった、おなじみA.R.ラフマーン。この映画ではオーソドックスなスタイルからヒップホップ調の曲、ラフマーンならではの凝ったアレンジによる曲など実に多彩なスコアを書き、才能の赴くままに書いているといった感があります。父親の死がきっかけでヒンズー教からイスラム教徒に改宗し（A.R.RahmanというペンネームはつなげるとARRahman=アラー神を信じる人という意味だそうです）、自宅を守るために警備を警護にしているラフマーンのことですから、この映画には強い思い入れがあったのではなかろうかという想像にかたくないです。

【ボンベイ (BOMBAY) 1995年 インド】

・映画メモ『インドの仕置人』

この映画、日本語タイトルが『インドの仕置人』。で、日本でのキャッチ・コピーが

「ナマステ御免！世のため、人のため、男の恨みナイフに込め、悪いやつらは生かしちゃいかねえ！」

いやちょっと、「ナマステ御免！」って？（苦笑）

村役人、警部、行政部長と賄賂をもらっている政府関係の役人が次々と刺殺されるという事件が発生。警察は少ない手がかりを元に犯人の足跡を追いますが、なかなかその実像が明らかになりません。実はその犯人の正体は齢75歳で白髪の新パティ（カマラ・ハーサン）という老人。彼はインド独立運動に身を投じた清廉潔白の正義の人で、ある事件をきっかけに世直しを決意、インド古武術にある点穴とベルトに隠したナイフを用いて、賄賂をせしめる悪徳役人を闇で成敗してまわっていたのです。一方、かつて親父の厳格さに嫌気がさして家を出た新パティの息子で32歳のチャンドゥ（カマラ・ハーサン）は車両検査員として賄賂をもらいながら出世を目指して彼を憎からず思っている有力者の娘スワプナ（ウルミラ・マートーンドガル）に取り入りますが、恋人のイスワリヤ（マニーシャ・コイララ）と度々鉢合わせすることになって……。

イロモノ全開みたいな日本語タイトルとキャッチ・コピーですが、中身は結構真面目なストーリー。『必殺仕置人』のインド版と言えるような内容ですのでタイトルとしては間違っていないですな。マニーシャ・コイララとウルミラ・マートーンドガルというどちらも素晴らしく素敵な女優の共演。美人でセクシーでナイスボディな2人に挟まれるチャンドゥがうらやましいです（笑）。

また、主演のカマラ・ハーサンはで白髪の新パティと息子のチャンドゥと一人二役をやってしっかりキャラクター分けをしているところはさすがですね。この映画でインドナショナル賞最優秀男優賞を受賞したそうですが、むべなるかなというところです。

ところがそういう素敵な2人の女優の存在を霞ませてしまうような強力なキャラクターが、本編の主人公、75歳の必殺仕置人新パティ翁です。白髪の姿ながら矍鑠とした姿でターゲットに近づくと、『笑傲江湖』も真っ青の点穴で相手を動けなくして、ベルトから出したナイフで相手の胸部や腹部を刺して念を押すように数度押しして刺殺。その間、無表情な顔、特に鋭い目がピクリともしません。しかもしわがれた渋く低い声がまた迫ってくるような威厳があります。結構その渋さがかなりカッコいいのですが、同時に怖ええ〜〜〜〜！賄賂なんてもらったことないですが、実際に会ったらちびっちゃんいそうです。しかも最後のアクションでは空港の滑走路を舞台に大立ち回りを演じてジェット機を1機大爆発させちゃうし、もう平松伸二の「マーダーライセンス牙」や「ブラックエンジェル」も真っ青です。

その中にインドがイギリスの植民地から独立するための壮絶な戦いや、現実にバクシーシの国＝インドでの賄賂が横行することに対する問題提起、夫婦・親子の愛情や父と子の意見の対立などを盛り込んだお話ですから、盛りだくさんです。ラスト近くでのセナパティと老妻、そしてイスワリヤとの会話はなかなか心に染みしましたわ。

それに加えて息子のラブ・コメディと動物ランドなシーンまで入ってくると、かなりおなかいっぱいですな。それでもってインド映画ですので、これにももちろん大人数のミュージカルのダンス・シーンが加わります。1フレーズごとに衣装が変わるは、歌詞に単にメルボルンとあるだけでわざわざメルボルンで撮影するはと、大サービス。さすがはおそるべし、インド映画。しかもCGによるモーフィングや画面合成をいろいろ「試してます」（笑）。音楽はおなじみA.R.ラフマン。心くすぐるメロディにいつもの細部に凝ったアレンジで聴かせてくれます。前年の『ボンベイ』からヒット曲を出したのもあって、役所にマニーシャ・コイララが現れるシーンでは『ボンベイ』の「Andha Arabic」がちょこっと流れるし、ウルミラ・マートードガルがマニーシャ・コイララに初めて会った時にはからかうように「Kuchi Kuchi Rakma」（『ボンベイ』で、夫と子供が女の子がほしいとねだるシーンのかわいい曲）と歌うニヤッとさせられるシーンもあります。

いやあ、インド映画の奥深さを改めて認識させてくれる映画でしたわ。

【インドの仕置人（HINDUSTANI） 1996年 インド】

・映画メモ『ラガン』

クリケットというスポーツを知っていますか？前田製菓の和風ビスケットのことではありません。詳細は日本クリケット協会のサイトなどを覗けばにありますが、ラウンダーズと共に現代野球の先祖とも言われているスポーツです。

え？お前は知っているのかって？実は私も、見たこともやったこともないのです。

インドがまだイギリスの植民地であり、現地では藩王が治めていた1893年。インドの村チャンパニールでは長い長い干ばつが続いていて、人々は雨を待ち望んでいました。実権を握るイギリス軍大尉のアンドリュー・ラッセル（ポール・ブラックソーン）は森の中での狩の最中、ブバン（アーミル・カーン）に邪魔をされて怒り、捕まえて折檻をします。機嫌の悪いアンドリュー大尉は藩王ラジャー（クルブーシャン・カールバンダー）の頼みの揚げ足を取るように、年貢＝ラガーンを2倍取り立てるように命じます。

困ったのは村人達。前の年も干ばつで作物がとれないところを藩王の計らいで通常の半分にしてもらってようやく生き延びたのに、この雨が降らない中で2倍も取り立てられては飢え死にしていまいます。なんとかしてもらおうと藩王に直訴を願いに村人が出かけたところ、藩王はアンドリュー大尉に誘われて彼のクリケットを観戦していたため、終わるまで待つことにします。そこでブバンがクリケットなんか子供の遊びと言ったのが発端で、アンドリュー大尉は腹を立てて底意地悪さを出し、ブバンたちを叩きのめすために「一ヵ月後、村人がクリケットで勝てば3年間藩王の治める全地域で年貢を免除、負ければ3倍の年貢払うこと」という賭け試合を飲ませます。

ところが村人たちは誰一人クリケットをやったことがないどころか、きちんと見たことすらがありません。成行きで無謀な賭けに応じるはめになったブバンを村人は軽蔑しますが、ブバンは闘志を燃やして我慢強く仲間を誘い、1人また1人と賛同者が少しずつ増えてきて、また幼なじみでブバンに恋するゴウリー（グレーシー・シン）も手伝います。それに加えてブバンに惹かれたアンドリュー大尉の妹のエリザベス（レイチェル・シェリー）が兄に黙って密かに道具を持って、ブバンたちにゲームのやり方とルールを教えに来ます……。

長いと言われるインド映画の中でもことさら長く、4時間近くの映画です。植民地への反発と屋外での熱血スポーツ対決、勇気と友情と根性と愛、そしてもちろん歌と踊りが満載の超娯楽大作。全編の長さが4時間近くと言いましたが、いろんな見せ場を作って飽きさせないところはさすがです。なんせ対決が決まるまでに1時間、仲間を集めて特訓して試合まで1時間、試合も審判が「1回の裏表での決着」と言っていたので「えらく短いな」と思ったら、その裏表1回というのが映画の中の時間で3日間を費やして試合をやってます（爆笑）。

この手の映画の常ですが、ルールも知らなければ競技も知らない連中ばかりで野球部……もとい、クリケットのチームを作るには、やはり特技を持った個性派ぞろいなのがミソですね。最初、これ見よがしに目立つ場所で少年とクリケットの真似事をしているうちに、バースみたいな奴やアリアスみたいな奴が徐々に参加してきて仲間になってきます。ふいにカースト制度批判みたいな部分も出していて、なかなかあなどれません。

そして、試合はルールはわからないなりに白熱した試合を展開します。試合の最中、突然みんなで歌いだしたり踊りだしたりはしないので、安心して見れます（笑）。特に試合の終盤は手に汗握るようなうまい作り方をしてますよね。思わず身を乗り出して見てしまいました。

音楽はあなじみA.R.ラフマーン。シリアスな内容と100年前の時代を扱っているということもあって、極力変なシンセサイザー音は使わず（笑）、オーソドックスで豪華なオーケストレーションをやっているかつ、独特の味付けをしているところはさすがとしか言い様がありません。中でもクリシュナを称える村祭りの踊りと音楽は、何度見てもため息の出るすばらしいシーンです。

【ラガン (LAGAAN) 2001年 インド】

・映画メモ『ヘブン・アンド・アース』

どう書こうかと悩んでいた問題作です（苦笑）。なんと言うか、途中までわりと面白く見ていたのに最後で一気に唖然となってしまふ怪作です。

唐の時代の中国（紀元700年頃）で、幼少の頃に遣唐使として渡来した日本人・来栖旅人はずっと唐の政府の刺客として働いていましたが、最後の仕事を終わらせたらようやく日本に帰ってもよいと言われます。その最後の仕事とは、元軍人で政府を裏切った李の暗殺。来栖はインドから唐王朝への献上品を積んで長安をめざす駱駝隊を護る李に近づき任務を遂行しようとしませんが、同時にその献上品を奪おうとする一行が現れて次々に駱駝隊に襲いかかります……。

中国西域の、所謂「絹の道」の風景は美しく雄大で目を奪いました。馬を生かしたアクションは中国版西部劇みたいな感じで、久しく見ない懐かしい雰囲気でした。だがしかし、ラストの部分で観客を1人残らず置いてきぼりにしちゃって、あさっての世界に行っちゃいます（笑）。

『2001年宇宙の旅』も真っ青（っていうか、あれは意図の上に十分な計算の上に作られてるんで比べたら失礼ですね）。「な？何がおこったの？」としばし呆然としてしまいました。そのまま終わっちゃうし（苦笑）。

来栖旅人に扮する中井貴一が『日記―「ヘブン・アンド・アース」中国滞在録』というタイトルでこの『ヘブン・アンド・アース』のロケ日記を出しているのを読みましたが、これが映画を見てると裏話としてはなかなか面白い本でした。読むといかに現場での作業が遅々として進まなかったのかよくわかります。監督以下スタッフが全体の工程と予算がいかに読めてないか、人の使い方を知らないかということが、ひしひしと伝わってきました。どうも脚本にあったシーンの半分ぐらいしか撮れてなかった模様。それじゃあ……ねえ（苦笑）。途中、ついに趙薇（チャオ・ウェイ）がキレまくったことにも触れていますが、なるほど納得です。

私としてはラストが無かったことにすれば、チャオ・ウェイがふんだんに拝めたし（甲冑姿がかっこいい）、途中はそこそこ面白かったので印象はぜんぜん悪くは無い映画でした。ラストさえ無かったことにすればですけど。むしろ主題歌を歌う蔡依林（ジョリー・ツイ）のプロモーション・ビデオの方が、映画のいいシーンのよりぬきで楽しめるし、うまくまとまってるような気さえます。ということで人それぞれ好みがあるので一概には言えませんが、私的にはあまり普通には人にはお薦めできませんので、見る時は心してかかるように。チャオ・ウェイのファンは、見ても多分損はないです（笑）。でもこの映画の撮影のために中国中央電視台の大作テレビドラマ『射[周烏]英雄伝』の出演（黄蓉役）を断ったのは残念ですねえ。

ちなみに音楽は『ムトゥ・踊るマハラジャ』のA.R.ラフマーンで、「絹の道」の音楽にはぴったりでした。この人の父親がインドにおける富田勲みたいな存在だったとは知りませんでしたけど

ところで来栖旅人を見て、『英雄 HERO』の秦王に似てると思ったのは私だけ？

【ヘブン・アンド・アース（天地英雄／WARRIORS OF HEAVEN AND EARTH） 中国】

【バート・バカラック】

映画音楽家として紹介するにはどうかと思う向きの方もおられるかもしれませんが、多くの印象的な映画の主題曲になっている20世紀最大のメロディ・メーカーのひとりがバート・バカラック（Burt Bacharach）であることに異論を唱える人は少ないのではないかと思います。

バート・バカラックは1928年5月12日にミズリー州カンザス生まれました。3歳の時にニューヨーク州クイーンズに移り、かつては歌手を目指していた母親の勧めで、12才頃からチェロやピアノ、ドラムを習うようになります。やがてジャズにはまったことがきっかけで音楽家を目指すようになり、ニューヨークのマンズ音学院とカリフォルニアのサンタ・バーバラ音楽アカデミーで音楽を学んで、兵役から除隊後ピアニストとしてのキャリアをスタートします。最初は売れないミュージシャンとして苦しい生活を過ごしてしまいましたが、マレーネ・ディートリッヒのツアー・バンドの指揮者兼アレンジャーに雇われたことがきっかけで徐々に名前が知られるようになります。1958年に映画『マクティーンの絶対の危機（ピンチ） 人喰いアメーバの恐怖』のための主題曲が初めてのヒットで、全米33位を記録。そしてこの頃、作詞家ハル・デイヴィッドとの出会いがその後のバート・バカラックを運命づけました。マーティー・ロビンスの「ストーリー・オヴ・マイ・マイフ」、ペリー・コモの「Magic Moments」などのヒットによって押しも推されぬポップス界のヒットメーカーとなっていきます。その後の活躍は皆さんのご存知の通り。カーペンターズをスターダムに押し上げた「クローズ・トゥ・ユー(遥かなる影)」などの長く愛されている作品も多くあります。

バート・バカラックといえば、まず外せないのが『明日に向かって撃て！』の「雨にぬれても」ですね。映画のロマンティックな雰囲気にあう音楽にはこれ以上のものはありません。バート・バカラックはこの曲でアカデミー作曲賞を受賞しています。

そして、後の『オースティン・パワーズ』や『オースティン・パワーズ デラックス』のスクリーン上にカメオ出演するきっかけになったであろう映画が、『007／カジノ・ロワイヤル』。「恋の面影（The Look of Love）」のロマンチズム溢れるメロディは好きで、よく口ずさんでいます。『オースティン・パワーズ』でも使われていましたね。

『幸せはパリで』の「エイプリル・フール」も切なくなりながら微笑が浮かぶ美しい佳曲です。そして『アルフィー』の「アルフィー」も名曲ですね。『マクティーンの絶対の危機（ピンチ） 人喰いアメーバの恐怖』は、初めてのヒット曲とあって曲としてはいいのですが、曲の能天気さが内容とマッチしていないような気もしないでもなかったような（笑）。

「クローズ・トゥ・ユー(遥かなる影)」は舒淇（スー・チー）、趙薇（チャオ・ウェイ）、莫文蔚（カレン・モク）の出た香港映画『クローサー』で挿入歌として、実にステイリッシュに印象

的に使われていました。バート・バカラックのメロディが生み出すマジックのひとつでしょう。

バート・バカラック自身は喜寿を越しながらますます元気で、先だっては28年ぶりにソロ・アルバム『AT THIS TIME』を出して、しかも初めて作詞に挑戦したりしています。初めてメッセージ性の強いアルバムにもなっていますが、サウンドは新しくメロディはバカラック節が随所に見られる作品で、これもグラミー賞を受賞しました。これからもますます活躍してほしい20世紀の巨匠です。

・映画メモ『幸せはパリで』

映画の主演男優と女優。その組合せで見る前に、内容にいろんな想像をすることは少なくないですよ。原題を『THE APRIL FOOLS』とする『幸せはパリで』のカップルは女優がフランスの華、カトリーヌ・ドヌーヴ。そして、男優はジャック・レモンといった組合せです。

ニューヨークのウォール街での敏腕証券マンとして活躍するハワード・ブルーベイカー（ジャック・レモン）は仕事一筋の男。そして家に帰れば、妻のフィリス(サリー・ケラーマン)はまったく夫に無関心という虚しい生活。ある夜、社長宅に開かれたパーティーに出席したハワードは美しくもどこか寂しげなフランスの婦人に気を惹かれます。彼女の名前はカトリーヌ・ギンター（カトリーヌ・ドヌーヴ）。実は怖いことで知られる社長テッド・ギンター（ピーター・ローフォード）の妻なのですが、そんなことは知らないハワードはカトリーヌと意気投合。退屈なパーティーをエスケープしてナイトクラブに出かけます。そこでハワードは妻に昇進したことを電話で伝えますが、無関心の妻は連れない答えを返すだけ。そして一方、カトリーヌも夫に電話しますが、つれない反応が返ってきて悲しみにくれます。この様子を見ていた有閑マダム（グレース・グリーンロウ(マーナ・ローイ)）はふたりに同情して、愛する夫のアンドレ（シャルル・ボワイエ）が待つ自分の邸宅に招かれます。そこで、ハワードとカトリーヌは……。

カトリーヌ・ドヌーヴとジャック・レモンという意外な組合せによる大人の愛のおとぎ話。ストーリーは他愛もないお話なのですが、主演はもちろん脇を固める俳優の味のある演技によって、味わいのある映画になっています。仕事一本で家庭に顧みられない真面目で疲れたビジネスマンをジャック・レモンがいい感じに演じていますね。歳をとってくるとこういう映画が心に染みます（苦笑）。カトリーヌ・ドヌーヴはいうまでもなくスクリーンの中で素晴らしく輝いていますが、ちょっと周りから浮いていたかも（笑）。ハワードの妻のフィリスを演じているのは、この映画の後、『M★A★S★H マッシュ』で「熱い唇」ことホーリハン少佐を演じたサリー・ケラーマンです。

音楽はマーヴィン・ハムリッシュとバート・バカラックが担当していますが、なんと言ってもディオヌ・ワーウィックがエンディングで歌っている「April Fools」は、いまやスタンダードと言ってもいいほどの名曲中の名曲。バカラックらしいコード進行とメロディで心にじわじわと染みこんできます。そしてまたバカラックの「小さな願い (I SAY A LITTLE PRAYER)」も小粋な使われ方をしていますね。他にもモンゴ・サンタマリアなども参加していて、この映画を洒落なものにしています。

【幸せはパリで (THE APRIL FOOLS) 1969年 USA】

・映画メモ『マックィーンの絶対の危機（ピンチ） 人喰いアメーバの恐怖』

テレビで放映された時には『S F 人喰いアメーバの恐怖』というタイトルだったこの映画。今ではなんだかえらく長い邦題になっちゃってますが、原題は『THE BLOB』。続編として『S F / 人喰いアメーバの恐怖 NO.2 (悪魔のエイリアン)』、リメイクとして『ブロブ / 宇宙からの不明物体』が作られている、地味ながらそこそこに人気がある作品の元祖です。

スティーブ(スティーヴ・マックィーン)が恋人のジェーン(アネタ・コーシュ)と、オープンカーでデートをして星空を見上げた時、大きな流星がよぎって森に落ちます。落下点の近くに住んでいた老人(オーリン・ハウリン)がその隕石を棒切れでつつくと、中からどろどろの赤い液体が出てきて老人の手を覆つくすではありませんか。激しい苦痛に走る老人をちょうど落下点を見に行こうとしたスティーブの車と出くわし、2人は老人を車に乗せると病院に連れて行きます。ところが病院でその液体はだんだん大きく膨れ上がり、医者も看護婦を飲み込んでしまいます。それを知ったスティーブとジェーンは警察に駆け込んで2人の警官と一緒に病院に行きますが、怪物は影も形もありません。結局警官は2人を信用しないばかりか不良扱いします。そればかりか校長をやっているジェーンの父親に付き合うなどと言われる始末。スティーブとジェーンは夜中にこっそり抜け出して密かに会々と、怪物を信じてもらうための証拠を探しに出ます。まずは友人の助けを得ようと映画館やパーティなどにいる友人たちを訪ねますが、だれもが笑って相手にしてくれません。車で回るうちにスティーブの親が経営する食料品店の前に着くと、金曜の夜で誰もいないはずなのに真っ暗な店のカギが開いていました。不審に思ったスティーブとジェーンが恐る恐る店に入るとそこには……。

スライム状宇宙生物ブロブ君の初主演作(笑)。この頃はまだ初登場で初々しいので最初はあまり派手に暴れることも無く、ホラー映画テイストで地味にあべれます。しして、次第に町がパニックになっていくという黄金のパターン。この中でも特に映画館の映写室から出てくるシーンは有名ですね。さすがに特殊撮影を極力避けた低予算の映画でB級臭は否めませんが、結構子供心には怖かったし、普通には楽しめる映画でした。

そしてこの映画のキモのひとつはオヤクソクである宇宙人の唯一の弱点、そしてこれもありがたいですがラストの「THE END」のところでしょうね。

冒頭、サイケデリックなタイトルバックについている音楽が非常に能天気で、映画を間違ったんじゃないかと思ってしまうますが、なんとテーマ曲はバート・バカラック(笑)。なんで？(笑)

ちなみにスライムというおもちゃがツクダオリジナルから発売されて爆発的なヒットをしたのが1978年のことです。

【マッキーンの絶対の危機（ピンチ） 人喰いアメーバの恐怖（THE BLOB） 1958年 USA】

【ダニー・エルフマン】

近年の映画音楽での多作家のひとりがダニー・エルフマン（Danny Elfman）。特にティム・バートン監督とのコンビは、つとに知られています。

1953年5月29日、テキサス州アマリロに生まれたダニー・エルフマンは、十代の頃をカリフォルニアのロス・アンジェルス郊外で過ごしました。17歳の時にパリにいる兄リチャードのアバングャルド音楽劇団、レ・グランデ・マジック・サーカスに参加。その後1年ほど西アフリカを旅してロス・アンジェルスに帰る途中に、兄のリチャードのステージ・パフォーマンス集団、ザ・ミスティック・ナイツ・オブ・ジ・オインゴ・ボインゴに参加することになり、そこでトロンボーンやギターを弾くようになったダニー・エルフマンは作曲も手がけるようになります。そのグループが8年後にバンドとしてオインゴ・ボインゴとなり、ダニー・エルフマンのプロとしてのキャリアがスタートしました。映画音楽に関るようになったのは、兄リチャードが監督として、ザ・ミスティック・ナイツ・オブ・ジ・オインゴ・ボインゴのパフォーマンスを映画にしようと思って作った1980年の『フォービデン・ゾーン』がきっかけ。1984年のトム・ハンクス主演の『独身S a Y o N a R a ! バacheler・パーティ』を挟んで1985年に『ピーウィーの大冒険』で映画監督初体験のティム・バートン監督と出会い、次第に大作も手がけるようになっていきます。

やはりインパクトが強かったのが人形アニメーション・ミュージカルである『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』。映画自体も印象の強いものでしたが、ミュージカルとして音楽もなかなか印象に残る曲が多く素敵な映画です。主人公ジャックの歌はダニー・エルフマン自身だそうですね。

『バットマン』、『バットマン・リターンズ』、映画自体のもダークな世界観と共に記憶に残ります。特に『バットマン・リターンズ』での情感溢れるスコアは気に入っていました。

S F系では『マーズ・アタック』もそうですね。レトロでチープな感覚を音楽の方もしっかりサポート。いい味を出しています。

『ミッドナイト・ラン』はダニー・エルフマンとしては初期のスコアで、強力な個性は打出していませんが、非常にアメリカアメリカしたロード・ムービー風の音楽がとてもマッチしていました。

これからもまだまだ期待のできる映画音楽家のひとりです。

・映画メモ『ピーウィーの大冒険』

『マーズ・アタック!』、『ナイトメアー・ビフォア・クリスマス』などで知られるティム・バートン監督の長編映画デビュー作品。USAの子供向けテレビ番組で人気があるというキャラクター、ピーウィー・ハーマンの劇場向け映画で、大変明るい作品です（笑）。

ピーウィー・ハーマン（ポール・ルーベンス）は、なりは大人ですが心も行動も無邪気な子供のような人。なぜか毎度何かをするたびに騒動を起こします。ピーウィーが大好きなのは、自慢の赤い自転車に乗ること。ところがその自転車を盗まれたから、さあ大変。警察にも取り合ってもらえず、怪しい占い師に相談したところアラモの果てにあるというご神託が。自転車を探すピーウィーの大冒険が始まります……。

ポール・ルーベンスもかつて一騒動起こしていますが（苦笑）、いつも一騒動起こしてしまうピーウィー・ハーマンの映画。身体はオトナ、心はコドモというキャラクターで、現実近くにいたらちょっとアブナイと思ってしまうかもしれない感じの主人公ですが（苦笑）、確かに目線から子供が親近感を持ちそうな感じで、人気があるというのも頷けます。、向こうのテレビ番組は知らないのですが、子供に人気のある番組だそうです。この映画も基本は子供向けのドタバタ・コメディなので、対象観客層外の大人が真剣に見るには物足りない内容になると思います。

そういった所謂キャラクターものの映画ではありますが、映画全体を包む派手な色合いとオモチャ箱をひっくり返したような雰囲気など、後のティム・バートン監督を思わせる片鱗があちこちに見え隠れしています。ピーウィーの家のシカケなんか特にいいですね。童心に帰ってあいうギミックがほしくなってきます。

ピーウィーがゴジラ対キングギドラの撮影場面に乱入するところは、私的一番の見所です（爆笑）。微妙にパチモンくさいゴジラとキングギドラがとてもいい味を出している（特に吊られているキングギドラ）上に、こだわりと愛を感じるのはやはりティム・バートン監督だからでしょうか。どうせなら「アレ」じゃなくて、ティム・バートン監督版『ゴジラ』が見てみたかったような（笑）。

そして好きなシーンは荒くれ共に捕まって酒場で踊るシーン。「テキーラ」がかかってそれに合わせて踊るのですが、ポップで楽しいシーンで改めて名曲だなあと感じます。あと、最後のスパイ映画のシチュエーションはなかなか「わかって」て好きです（笑）。

この映画の音楽を担当したのが、かのダニー・エルフマン。この映画で初顔合わせした2人が、これ以降強力なタッグを組んで、数々の映画を生み出すことになるのは皆さんもご存知の通りです。。ここでは結構派手なオーケストラのアレンジで、映画の全編を覆っています。

【ピーウィーの大冒険 (PEE-WEE'S BIG ADVENTURE) 1985年 USA】

・映画メモ『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』

近年は万聖節（ハロウィン）もにぎやかしくなってきましたが、やはり今も降誕節（クリスマス）がメジャーな行事であることは変わりません。日に日に街が彩られる降誕節が近づくにつれて心にぎわう人も多いのではないのでしょうか？

ハロウィンタウンでは、見た目は怪しげですがどこか憎めない人々（？）が集っています。今年のハロウィンも大成功。そのハロウィンを演出するカボチャ大王のジャックは皆から称賛を受けますが、ジャック自身は毎年同じことの繰り返しで内心うんざりしています。ある日、愛犬ゼロと共に森を彷徨っていると、そこにクリスマスタウンを見つけます。始めて見るその光景に心奪われたジャックは、ハロウィンタウンでクリスマスを行おうとして動き出します……。

ストップモーション・アニメーションで作られたミュージカル映画です。10年前の映画ですが、この秋にリマスター版が劇場で上映されましたね。

この映画でキャラクターも光景も一見不気味なようで、なんとなく親しみがわいて愛嬌を感じる不思議な感覚があります。それぞれのキャラクターの動きや性格に血が通っているからでしょう。気がついたらすぐに感情移入していました。なんとなくメキシコにおける生活に根づいてるガイコツみたいな感じもします。

また、独特の世界観と細かく練り上げられた美術が、より完成度の高い映像を作り上げているのでしょう。実際細部にまで丁寧で作られている印象を受けます。

音楽はよくティム・バートンと組んでいるダニー・エルフマン。不思議な映像世界との違和感をまったく感じさせないミュージカルに仕上がっています。ジャックの歌の部分もダニー・エルフマンが歌を当てていて、これがまたいいんですな。

毎年クリスマス前には見ているおすすめの映画です。

【The Nightmare Before Christmas 1993年 USA】

・映画メモ『バットマン』

「バットマン」と言っても野球でのスラッガーのことではなく、直訳すれば「コウモリ男」の方です。「コウモリ男」と言っても仮面ライダーや怪物くんに出てくるアレではありません。言わずと知れたアメリカン・コミックスの老舗のヒーローであるバットマンです。

無法都市ゴッサム・シティでは、いつからか謎の覆面をした人物が夜な夜な悪人をつかまえるという「事件」が起こるようになりました。新聞社と警察ではバットマンと名乗る人物の正体をつきとめようします。ある夜、化学工場を襲った暗黒街のボスであるグリソム(ジャック・パランス)と部下ネピア(ジャック・ニコルソン)ですが、突如現れたバットマン(マイケル・キートン)に阻止されてネピアは廃液タンクの中に突き落とされます。。かろうじて生き残ったものの廃液の毒で変わり果てたネピアはジョーカーと名乗り、裏切ったボスのグリソムを殺してバットマンへの復讐を誓います……。

ブルース進行の主題歌で有名な昔のTVシリーズはおぼろげな記憶しかありませんが、バットマンはなんとなくよわっちいイメージがあった気が私はしてました(もっともスーパーマンと違って普通の間人がいろんな道具を駆使して正義を守るのですけど)。灰色のコスチュームのせいもあったかもしれませんが、この映画ではコスチュームも含めて町全体に至るまで暗く黒い独特のイメージで統一されていて壮観です。期待せずに見に行ったのですが、ティム・バートンの美学が端々に見える映像に引き込まれました。

ジョーカーを演じたジャック・ニコルソンの怪演が見ものです。バットマンの敵役は狂気に取り付かれたようなキャラクターが多いですが、その1人であるジョーカーの異常な姿を印象付けます。バットマンの活動自体が両親を殺された復讐が動機の一つになっている部分と、ジョーカーが己の姿を醜く変えたバットマンに対する復讐を考えている部分とのぶつかり合いという、およそ単純な勧善懲悪とは少し違った構図がまた惹き付けるものがあります。

実は90年代のバットマン・シリーズは続編では三つ巴、3作目では2対2、4作目は3対2と段々主要人物が増えていきますが、このこの映画では1対1でした。

【バットマン (Batman) 1989年 USA】

・映画メモ『バットマン リターンズ』

前作から3年たった1992年。バットマンの映画が帰ってきました。

ある富豪の家に生まれた赤ん坊が奇形だったために、ひっそりと川に流されて捨てられてしまいます。ペンギンたちが住む下水道の中に流れ着いた赤ん坊は、いつしか大人に成長していきます。野望と復讐を心にもつ彼（ダニー・デヴィート）はペンギンと名乗り、ゴッサム・シティの実力者マックス・シュレック(クリストファー・ウォーケン)と結託して自分の両親を探していることを大々的にアピールして住民の心をつかもうとします。一方、マックスの野望を知ってしまった秘書のセリーナ(ミシェル・ファイファー)はマックスにビルの窓から突き落とされてしまいますが、降り積もった雪のおかげで命が助かり、集まった猫達の力でキャットウーマンとして甦ります。ペンギンの野望に気づいたブルース・ウェイン(マイケル・キートン)はバットマンとしてペンギンに戦いを挑みますが、ペンギンはキャットウーマンと組んで逆にバットマンを悪者に仕立て上げてしまいます……。

ティム・バートンがメガホンを持ったバットマン・シリーズの2作目です。2人の敵役それぞれの生きてきた険しい人生と、情念に溢れる行動、そして絡まりあう人間関係がずっしりと重いドラマを作っています。ティム・バートンがそれまでの映画でも見せていたマイノリティへの視線がここでも強く打ち出されています。もちろん、画面全体も前作同様暗く黒い独特の雰囲気をもっています。

また普通の人間であるマックス・シュレックも悪役としてしっかり存在感を見せているところもミソ。ある意味主役であるバットマンが比較すると一番地味な存在なのですが、敵役と同様苦悩の中で行動する姿、特にラストにわたっては目が離せません。

私はアメリカン・コミックスは大好きなので、映画化された作品はなるべくチェックを入れているようにしていますが、私の中ではこれはベストの作品じゃないかなと思っています。何度も繰り返し見た作品です。

前作に続いて音楽はティム・バートンとよく組んでいるダニー・エルフマンですが、冒頭のシーンから情感溢れる音楽全開です。音楽が場面と共に印象に残るシーンが多く、サウンド・トラックとしてもいい出来だったのではないのでしょうか。

【バットマン リターンズ (Batman Returns) 1992年 USA】

・映画メモ『マーズ・アタック！』

火星人間というどんな格好をしていると思いますか？会ったことがない人は、タコみたいな形だったり、指が6本ある緑色の小人だったり、人間そっくりだったり、スカートで茶巾包みしたりと色々なイメージがあると思います。

日常の喧騒に湧くUSAに火星人間が円盤に乗って襲来します。目的も不明のままアリゾナ州の砂漠に火星人間の空飛ぶ円盤が着陸した彼らを出迎えるべく、USA政府首脳は歓迎の準備をします。果たして空飛ぶ円盤から出てきたのは身長70cmぐらいで、脳が丸見えで骸骨のような顔に飛び出した目玉を持つ火星人間でした。USA政府が友好の合図を伝える中、火星人間は光線銃で殺戮を始めます。強大な火星人間の武力の前に次々と人々が殺されていきます。政府は対策を練りますが妙案は浮かばず万事休すの事態に……。

USAのSF黄金期のパルプ・フィクションやトレーディング・カードから抜け出したような、チープでキッチュでありえない火星人間が大暴れします。光線銃や空飛ぶ円盤も、ひたすら100円ショップ製かと思うぐらいに安っぽさが光ってます。ストーリーにはありませんが持ってる宇宙食を食ったら合成着色料で舌に色がつきそうな予感がするような感じです。これがとてもポップでいい雰囲気です。

そこそこに大スターを惜しげもなく使っていて、ほとんどが惜しげもなくやられてしまいます。トム・ジョーンズにいたっては本人役。

オチはやはり『宇宙戦争』リスペクトなのではないでしょうか。人間……じゃなかった、宇宙人にはどこかに泣き所があるもんですね。そうすると、もしも絶対音感を生まれつき持っている宇宙人に日本の（以下省略）。

この映画のヒットで、アメリカン・コミックスでも「マーズ・アタック」のコミック版が発売。あの火星人間たちと地球のスーパー・ヒーローの連合軍（イメージ。コミックス限定）の戦いが繰りひろげられます。

しかし『SF／ボディ・スナッチャー』といいこれといい、人面犬ってやっぱインパクトがあるから使われるのかなあ。

タイトルを忘れてましたが（爆笑）、ちょうど同じ頃、やはり同じように宇宙人間が何を考えたのかUSAの独立記念日直前に地球を攻めてきて、それを国威発揚で撃退するという真面目に作ってる風の映画がありましたが、私的には『マーズ・アタック！』はその映画の何十倍も面白い映画でした。

しかし、ホワイトハウスに進入する女性火星人（変装バージョン）を見ると、唐突にブライアン・フェリーを思い出してしまうのはなぜでしょう？（笑）

【マーズ・アタック！（Mars Attacks!） 1996年 USA】

・映画メモ『ミッドナイト・ラン』

人と人との出会いは不思議な偶然。お互いの立場で騙しあい、そして思わぬところで気が合うのも不思議な偶然。

シカゴ警察を退職してロス・アンジェルズで荒っぽい賞金稼ぎを営んでいるジャック・ウォルシュ(ロバート・デ・ニーロ)は、馴染みのマスコーニ保釈金融会社の社長エディ(ジョー・パントリアーノ)から依頼を受けます。依頼の内容は、ギャングのボス、ジミー・セラノ(デニス・ファリナ)の金1500万ドルを横領した上に慈善団体に寄付して行方をくらませた会計士のジョナサン・マデューカス(チャールズ・グローディン)=通称デュークに貸した45万ドルを回収するために、彼の身柄を拘束すること。撃たれる心配もなく日帰り仕事だと言うエディから10万ドルの成功報酬を引き出すことに成功したジャックは、危険な賞金稼ぎから足を洗って店を出すためにこの仕事を引き受けます。ところがセラノ逮捕のための重要な証人であるデュークを渡すことはできないと、FBIの捜査官アロンゾ・モズリー(ヤフエット・コッター)はジャックを恫喝。それを逆手にとって、ジャックはこともあろうにモズリー捜査官の身分証を拘ると彼に成りすましてしまいます。デュークの潜む東海岸のニューヨークに飛んだジャックは、持ち前のテクニクを駆使してデュークの居場所を探り出すとまんまと捕獲。意気揚々とロス・アンジェルズに戻って報酬を手にする……と思いきや、なんとデュークは高所恐怖症の閉所恐怖症で飛行機恐怖症だと騒ぎ立てます。おかげで旅客機から追い出されて汽車とバスを使って延々と西海岸のロス・アンジェルズまで護送するはめに。こうして逃げたいデュークと逃がせないジャックの珍道中が始まります。しかし、重要な証人であるデュークを追っている上に身分証を盗まれたFBI、デュークを許せないセラノ一家、そしてデュークが金になると知った商売敵の賞金稼ぎたちがふたりの行方を追ってきたから、さあ大変……。

ロバート・デ・ニーロとチャールズ・グローディンによるロード・ムービーであり、アクションであり、コメディの映画。友情と家族でちょっぴりほろりとさせてもくれる、お気に入りの満点娯楽映画です。ロバート・デ・ニーロとチャールズ・グローディンはそれぞれさえない野暮ったさと生真面目さを感じさせながら、海千山千の喰えない部分と過去を持っているところの描写が、またなかなかいい感じ。それでありながら、共通する部分は心に秘めた正義感とプライドなんですよ。お互いが話をしていくうちにだんだん分かり合えそうになりながら、それでも利害が相反するコンビ。それだけに、ラストはありがちなながら見事だと思います。

コメディとしても爆笑はしないまでも終始微笑ましく、ふたりのキャラクター付けに裏打ちされた会話がなかなか秀逸です(笑)。そしてアクション・シーンもなかなかカッコいいです。特にヘリコプターの尾翼に文字通り弾丸を「ぶち込む」シーンは痛快ですね。

ジャックと娘のシーンはやられましたね。娘がジャックを思いやる場面ではぐっときちゃいました。酸いも甘いも噛み分けた大人の男の映画とも言えるでしょうか。歳とってから見るとまた

味わいがあります。

音楽はダニー・エルフマンですが、そうとは知らずに聴いた私は、「ライ・クーダーもファンキーになったな」とか思っちゃいました（笑）。USA横断のロード・ムービーにふさわしいアメリカアメリカした感じの音楽が実にあってます。

【ミッドナイト・ラン（MIDNIGHT RUN） 1988年 USA】

【ジョン・バリー】

映画音楽家として名高い人は多くいますが、その中でもよく知られている人のひとりとしてジョン・バリー（John Barry）を挙げることに異論がある人は少ないのではないのでしょうか。

1933年11月3日、イギリスに生まれたジョナサン・バリー・ペンターガスト（Jonathan Barry Prendergast）ことジョン・バリーは、映画館を経営する父の影響で映画に親しんで育ちました。幼い頃からピアノとトランペットを習ったジョン・バリーはロンドンの音楽学校で作曲と楽器法を学びます。その後、ジャズ・バンドや兵役での軍楽隊を経て、ジョン・バリー・セブンというリーダー・バンドでデビュー。それがきっかけでテレビの劇伴を担当するようになり、1959年、映画『狂っちゃいねえぜ』の音楽を担当して映画音楽の世界に進出します。ジョン・バリーの出世作となり、その名が大きく知られるようになったのは、ご存知『007』シリーズの音楽からでしょう。昨今は手がける作品も少なくはなりませんが、現役の作曲家として活動しているようです。

やはりなんと言ってもジョン・バリーといえば『007』シリーズで、主題歌も多く手がけていますから知られている曲も多いです。特にラウドなホーン・アレンジを使った音楽はスパイ映画の音楽のひとつの形を確立したにも等しいと思います。例えばマイケル・ジアッキノによる『Mr. インクレディブル』のサウンド・トラックは、大いにジョン・バリー・リスペクトの音楽に仕上がってます。007のテーマについては、実は『007／ドクター・ノオ』の音楽を担当したモンティ・ノーマンが書いたものであるらしく、過去3度の訴訟が行われていますが、いずれもモンティ・ノーマンが勝訴しているそうです。

定番である007の主題歌集を聴いても数ある主題歌の中で、『007／ゴールドフィンガー』は鮮烈ですね。喉飴を差し上げたいようなシャーリー・バッチャーが「ご〜〜ふいんガァ〜〜！」とドスを効かせて唸る歌と、それにかぶさる野性的ホーン隊が多分に魅力的な曲です。金が好きなのか、『007／黄金銃を持つ男』という映画もあって、こちらもジョン・バリーが担当しています。

逆にストリングスの流れるようなオスティネートのバックキングが印象的だったのが、『007は二度死ぬ』です。イントロでも使われている大きなフレーズがそのままバックキングに回って美しい曲でした。ナンシー・シナトラが歌っていました。

美しいといえば『野生のエルザ』もいい映画音楽でした。この作品でアカデミー賞作曲賞を受賞しています。主題歌の「Born Free」は広大さを感じさせてくれる美しいメロディの佳曲です。

忘れてはならないのが、ブルース・リーの遺作、『ブルース・リー／死亡遊戯』でしょう。ここ

での音楽はカッコいいの一言。曲を聴くと黄色いトラックスーツを着て暴れたくなる人も少なくないのでは？（笑）

『コットンクラブ』では、1920年代の禁酒法時代の雰囲気映像にマッチした音楽の雰囲気がぴったりです。ハーレムの中でにぎわうナイトクラブが舞台だけに、ジョン・バリーの音楽が果たす役割が大きい映画でした。

USAではジョン・バリーの4枚組ベストとかも出ているそうですね。

・映画メモ『007／黄金銃を持つ男』

『007』シリーズの第9作目。三代目ジェームズ・ボンド役をロジャー・ムーアが担当してからの2作目になります。敵役はイギリスを代表する名優クリストファー・リー。最近では『カンフー・ハッスル』の大家のおばさん役を皮切りに『カンフーマージャン(雀聖)』、『雀聖2 自摸天后』、『野蠻秘笈』などにも出ている元秋(ユン・チウ)が、実は出演してたということでも知られています。ボンドガールではありませんが(笑)。それと麥嘉(カール・マッカ)が助監督を務めていました。

しかしこの映画、なかなか微妙な作品で、トホホかというトホホにもなりきれていない、『007は二度死ぬ』、『007／カジノ・ロワイヤル』などと並ぶ怪作なのではないでしょうか(苦笑)。

100万ドルの報酬で殺しを請け負う男、フランシスコ・スカラマンガ(クリストファー・リー)は中国領のある小島に基地を構え、優雅な暮らしをしています。スカラマンガのお気に入りの武器は、一見ライターやペンに見える部品を組み立てた4.2口径の黄金銃。そしてイギリス諜報部の007ことジェームズ・ボンド(ロジャー・ムーア)の元に暗殺予告の黄金の弾丸が送られてきます。ボンドはスカラマンガとの対決の手がかりを得るために、ベイルート、そして香港へと飛びます……。

銀の弾丸はだめでも金の弾丸はいらしいクリストファー・リーが敵だけに、期待できそうに思えるこの作品ですが、冒頭からズドンッとやってくれます。まず海岸で水着で立つクリストファー・リーの胸がアップになると、なんと胸の斜め真ん中寄り近くにも第3の乳首が(大爆笑)。あの名優クリストファー・リーの真面目な顔と、その付属物のギャップにいきなり黄金銃で撃ち抜かれたような衝撃を感じました(笑)。

その後、イギリス諜報部のMの部屋で「スカラマンガを知っとるか」と訊かれた博識なボンドの口からは、以下のセリフがスラスラと空で出てきます。

「黄金銃の男ですね。父は団長、母は蛇使いのサーカスに生まれ、10歳で曲撃ちの極意を体得、15歳で射撃の名手。ソビエトKGBにスカウトされ、薄利多売の殺し屋に変貌。50年代後半に独立。殺しの報酬は1人100万ドル。写真は一枚もなく肉体上の特徴が顕著です。乳頭です。第3の乳首があります。黄金銃には黄金の弾丸を使用。現住所は不明。以上です」

そんなに有名なのか?第3の乳首(苦笑)。

それだけではありません。ボンドはスカラマンガの居所を探るためにモード・アダムス扮するアンドレアの泊るホテルの部屋に侵入、隙をついて締め上げるとスカラマンガの居所を訊き出し

ます。

「彼はどこにいる？」

「知らない。本当よ。でも今夜、クラブ『ボトム・アップ』へ行く」

「(彼の)目立つ特徴は？」

「あるわ。普通の人と違って…3つも…」

いや、だからいいかげんそこから離れてください(苦笑)。そもそもそんな特徴、服着てたらわからないってば(笑)。

で、映画の前半で散々引っ張ってきたこの第3の乳首。物語の中でどう関わってくるのかというと、ボンドがスカラマンガに殺しを依頼した大富豪ハイ・ファットの屋敷に侵入した時。ハイ・ファットがプールサイドに立つ不審者に、「何をしとる？」と怖い顔でボンドに近づきます。それを見ながら黙って上半身のシャツを脱いで、半裸で声の方を向くボンド。その胸の斜め真ん中寄りあたりには、なんと第3の付け乳首が(大々々爆笑)。スカラマンガと思いこんだ男は「失礼した」と言って引き下がります(笑)。そしてこれを境にして、この後一切第3の乳首ネタは出てきません(苦笑)。こ……、このためだけのネタ振りだったとは(大汗)。

ちなみにこの大富豪ハイ・ファットの屋敷の庭には怪しいオブジェがたくさんあり、スモウ・レスラーの像とかもあったりするのですが、夜、ボンドが庭を探索していると、なんとそれが本物のスモウ・レスラーに(爆笑)。四股を踏みながらボンドに襲いかかります。ジェームズ・ボンドが東洋に来ると言うから、すごく悪い予感はしていたのですが(苦笑)。

この頃は『燃えよドラゴン』の大ヒットもあって、世界的にカンフー・ブームだった訳ですが、もちろん期を見るに敏な007もしっかり取り入れてます。スモウ・レスラーと戦った際に後ろから殴られて気絶したジェームズ・ボンドは、ハイ・ファットの屋敷内の謎の道場で謎の門下生相手に戦うことに。隙を見て逃げ出したボンドとそれを追う大勢の門下生たち。そこの現れた2人の女子高生がバツバツと門下生たちを投げ倒しますが、そのうちの一人が30年前の若き元秋(ユン・チウ)です。

ちなみにボンドガールのひとり、メアリー・グッドナイトを演じるのはブリット・エクランド。Mに「ボンドひとりじゃ当てにならん」と言われてつけられたサポートの割には、見事なまでに「足ひっぱり系」のドジッ娘(苦笑)。ビキニ姿もふんだんで、かわいいから許しますけど(笑)。このかわいい系のボンドガールとスカラマンガの背が小さい従者のニックナックが、多分後の『オースティン・パワーズ デラックス』の元ネタになっているのでしょうね。

ところでクリストファー・リー演じるスカラマンガは、ジェームズ・ボンドと歴史に残る名勝負

をしたいがためにすぐには抹殺をせず、決闘をしますが、その最後の舞台が秘密基地内に作ったまるで遊園地みたいな部屋（笑）。鏡の部屋やウエスタン射的の部屋みたいなところで戦うのですが、これが歴史に残る名勝負とはとてもとても（苦笑）。何百年も棺桶の中で眠っている人の美学はちょっと違うのかもしれませんが（笑）。

ラストがなんだかしょぼかったりか、車が川を一回転ジャンプする時にまぬけなスライドホイッスルの効果音だとか、ボートのエンジンを治してくれたのに大人ってズルいと思いますな場面とか、007の映画でベッドでの三角コメディやられてもなあとか、まだまだ語ればいろいろありますが、この『~~007／3つの乳首を持つ男~~』、もとい、『007／黄金銃を持つ男』の魅力の一端についてお判りいただけただけでしょうか。

【007／黄金銃を持つ男（THE MAN WITH THE GOLDEN GUN） 1974年 UK】

・映画メモ『007は二度死ぬ』

1962年の『007／ドクター・ノオ』以来、好評を博してシリーズ化されたイアン・フレミング原作、ショーン・コネリー主演のスパイ映画『007』シリーズ。その第5弾は日本を舞台にした『007は二度死ぬ』でした。

地球の軌道に乗ったUSAの有人宇宙船・ジュピター16号に謎の宇宙船が近づいて通信が途絶え、忽然と姿を消すといった事件が発生。国際会議の席でUSAはソビエト連邦を非難しますが、イギリス情報部は謎の宇宙船が日本から発射されているという情報を得て、007ジェームス・ボンド(ショーン・コネリー)を英領香港経由で日本に潜入させます。調査の最中に大里化学に進入することになったボンドはそこで手に入れた情報と、秘密警察のトップであるタイガー田中(丹波哲郎)と部下のアキ(若林映子)の協力もあって、大里化学の貨物船の停泊する神戸に急行します……。

前作『007／サンダーボール作戦』に続いて暗躍する国際的陰謀団スペクターを相手に、ショーン・コネリー扮する007ジェームス・ボンドが活躍する映画です。今回はのっけから、ちょうど1965年に打ち上げられたジェミニ計画の宇宙船をモデルにしたようなジュピター16号の宇宙空間の場面から始まるといったスケールの大きさ(当時比)。毎度の格闘アクションにカー・チェイス、ミニ・ヘリコプターなどの秘密兵器、大掛かりなスペクターの秘密基地、大勢のニンジャ軍団の活躍と見所満載になっています(当時比)。特にスペクターの秘密基地は当時のお金で100万ドルをかけただけあって、セットとは言ってもちょっとしたドーム施設の建造物を鉄骨組んでひとつ立てただけあって、特殊撮影ではない実物なりの迫力がありません。ラストのいつものオチもお金かかってますわなあ。荒唐無稽、大風呂敷な映画ですが、娯楽大作に仕上がっています。

ちなみに、この映画は『007』シリーズの中でも『オースティン・パワーズ』の元ネタが盛りだくさん。それだけ「心をくすぐる」ものがあつたのでしょうか。

一方、1960年代に欧米から見ての極東の島国を舞台にしているだけあって、なかなか笑える描写が多いのも事実(苦笑)。もっとも、最近では是正されているかと言われればそうでもないのが悲しい事実ですけど(苦笑)。

まず大里化学の持ち船の名前がNING-PO(爆笑)。忍法ですよ?じつにあやしい(爆笑)。そしてその忍法丸が立ち寄った島が神戸と上海の間にあるマツという島だということだそうで(笑)。そこで秘密警察の長であるタイガー”丹波哲郎”田中がボンドを案内したのが、姫路城の中でニンジャの訓練を行う面々。カラテ、ケンドー、シュリケンなどの訓練をしていましたが、気になったのは真剣で人をぶった斬ってた人(苦笑)。敵でもないのにいいんでしょうか?(苦笑)

そしてすごいと思ったのが、タイガー”丹波哲郎”田中がボンドに「人の目を欺くために、日本人の漁師になって海女と結婚しろ」というところ。カツラや染料で変装させますが、日本人の漁師どころかどう見てもアヤシイガイゴクジンにしか見えません。しかも擬装結婚した浜美枝とは英語でしゃべりまくるし。ケンブリッジ大学仕込みの日本語というのはウソだったんでしょうか？（苦笑）

DVDの特典に映画のメイキングと称して裏舞台のドキュメントがありますが、これが本編に負けず劣らず面白いので必見です。優秀なヘリコプターのカミカゼ・パイロットの話や、浜美枝が英語の覚えが悪く監督が丹波哲郎を通じて降板を告げたところ「ホテルから飛び降りる」と言われて慌てて浜美枝と若林映子の役柄を入れ替えてしのいだ話、この映画で足を切断する事故に逢っても最後に復帰してカメラを持ち『キャッチ22』で転落死するまで空中撮影に賭けた空中カメラマンのジョニー・ジョーダンの話、最初チェコスロバキアの名優をスペクターのボスであるブロフェルドに採用したところサンタクロースみたいな好好爺で全然感じが出ずに5日で降板させた話（猫を抱いた写真入り。確かに本当にすごく人がよさそうで、見ただけで大爆笑）、巨大秘密基地のセットの建造現場写真など、こちらも見所がたくさんです。

音楽はおなじみジョン・バリー。主題歌はナンシー・シナトラの歌う「YOU ONLY LIVE TWICE」で、イントロの弦のフレーズが美しい曲です。残念ながらアレンジを変えても格闘シーンには合わないメロディではありました（苦笑）。

【007は二度死ぬ（YOU ONLY LIVE TWICE） 1967年 UK】

【マーク・アイシャム】

ミュージシャンとしても一部に人気が高く、映画音楽の作曲家としても1980年代後半から作品の数が多いマーク・アイシャム（Mark Isham）。近年ではますますいろんな映画の音楽に挑戦しています。

マーク・アイシャムは1951年9月7日にUSAはニューヨークの音楽一家に生まれました。子供の頃からクラシックに親しみピアノやトランペット、バイオリンを学んだそうです。一家がサンフランシスコに移住してからは、移りました。そこでは、アイシャムが地方のオーケストラに参加、一方ジャズ、ポップス、ロックのバンドにも参加していました。また1970年代後半にはシンセサイザーに興味をもってマスターして、それが後の活動に大きくプラスになっています。まずはトランペッターとして、セッション・ミュージシャンとしてスタジオやツアーで活躍。ソロ・ミュージシャンとしてウイングダム・ヒルからアルバムを出したり、またパトリック・オハーン、ピータ・マニュと共にGroup87を結成します。1983年の『ネバー・クライ・ウルフ』をきっかけに映画音楽の世界に入り、その後の活躍はみなさんのご存知の通りです。

映画音楽からは離れますが、Group87は私も大好きなグループで、ゲストにテリー・ボジオやピーター・ウルフなども参加。曲はプログレッシブ・ロックの風味を感じる、ポップ・インストゥルメンタルに仕上がっています。1980年にリリースしたアルバム『Group87』は、予備知識がなければ何かの映画のサウンドトラック盤だと言っても納得してくれそうな聴くとビジュアルが浮かんでくるような曲が詰まったアルバムでした。

マーク・アイシャムは映画によっていろんなサウンドを手がける幅広い音楽傾向を持っていますが、その音楽のセンスのよさを見せてくれたのが『クール・ワールド』。アニメーション+実写のこの映画は作品としては少々ナニでしたが（苦笑）、映画音楽でのマーク・アイシャムの一面を見ることが出来ます。

印象的なのが『遠い空の向こうに』。この心に残る映画の感動をしっかりと支える、大きさを感ずるスコアが聴けます。

最近も『ツイステッド』、『イン・ハ・シューズ』、『南極物語』（2006）など大作、話題作に名を連ねることが多く、今後とも期待したい作曲家のひとりです。

・映画メモ『クール・ワールド』

昔からテレビや映画では実写とアニメーションの合成が試みられていました。『メリー・ポピンズ』なんかもそのうちのひとつです。ある意味、特殊撮影やコンピュータ・グラフィックスの合成もその応用と言えるでしょう。

第2次大戦から復員したフランク（ブラッド・ピット）は、買ったばかりのオートバイで事故にあって、そのショックで2次元のアニメーションでできている世界＝「クール・ワールド」に迷い込んでしまいます。その世界でフランクは捜査官になりますが、47年後、「クール・ワールド」の作者であり服役していた漫画家のジャック（ガブリエル・バーン）がその世界に迷い込んできます。そこに現実世界に憧れる「クール・ワールド」の美女ホリー（キム・ベイシングー）がジャックを誘惑して、生身の人間になろうと企てます……。

「アニメと実写を合成した大人のためのセクシー・ファンタジー」という謳い文句の映画で、『指輪物語』のラルフ・バグシの監督による作品。ブラッド・ピットとキム・ベイシングーが出演しています。で、仕事を選べばいいのによくこんなオファーを受けたなあ（笑）。

お話の内容は限りなく薄く、かなりC調で、冒頭の事故の深刻な雰囲気「あれはなんだったんだ？」と思うような浮き方で、見る方が困惑してしまいます。ある意味カートゥーン版『ヘビー・メタル』みたいといえば近いかもしれませんが、あちらほど「根性」が入ってません（苦笑）。おまけにまったく意味なく画面中を動き回るアニメーションが、どうもうっとうしく感じるんですよね。一言で言えば、「何をしたかったのかわからない」映画に見えました（苦笑）。セクシーでおバカな役をやっているキム・ベイシングー目当てにとっては、ちょっぴりうれしいんですけどね。

音楽は『遠い空の向こうに』のマーク・アイシャム。というのでやっと最近気づいたんですが、トランペット&シンセサイザーのマーク・アイシャムと同一人物で、最近映画音楽ばかりやっていたんですね。私は1980年にテリー・ボジオ、パトリック・オハーンらザッパなリズム隊と結成したインストゥルメンタル・ポップ・グループ、Group87が大好きで今でもアルバムを愛聴しています。思えばこのグループも情景が浮かぶ音楽でした。

【クール・ワールド（COOLWORLD） 1992年 USA】

行けたらと、長い長い間、多くの人が憧れていたのではないのでしょうか。

1957年にソ連の人工衛星スプートニクを見たウェスト・ヴァージニア州の炭鉱町コールウッドに住む高校生ホーマーは、自分もロケットを打ち上げたいと思い立ちます。早速友人を説得して仲間に引き入れて、ロケットを作ってみては飛ばしますが失敗に次ぐ失敗の連続。地元の炭鉱の責任者であるホーマーの父ジョンは息子の行動に理解を示さず、親子は対立してしまいます。唯一の理解者である学校の物理教師のライリー先生は、ロケットが成功して全米科学コンテストに出て優勝すれば、ヴァージニア州立大学への奨学金が出ると言って、彼らを励まします……。

ちょうど同じ年に作られた映画『アイアン・ジャイアント』もソ連の人工衛星スプートニクが打ち上げられた1957年が舞台ですが、『遠い空の向こうに』のジョー・ジョンストン監督はその『アイアン・ジャイアント』のデザインも手がけています。『アイアン・ジャイアント』は「なりたい自分になる」というのがひとつのテーマでしたが、この『遠い空の向こうに』も夢を持ち続けてそれを強く追い求めていく映画です。特に根が技術屋肌の人間にとっては非常に同感できる部分が多く、ぐいぐいと引き込まれていくものがありました。中でも全国大会で「あこがれの人」に声をかけてもらうシーンがたまりませんでした。

原作はNASAの元エンジニアであるホーマー・ヒッカム・ジュニアの自伝である『ロケット・ボーイズ』。このほとんどの部分が映画化されています。原作のエピローグにある父親が印をつけていたというアンジェロ・デ・ポンチアノの詩にはぐっとくるものがありました。

この当時はまだ父親の仕事を継ぐという考えが割と一般的だったので、それを経済的に自立していない子供が拒否することはなかなか難しいことだったようです。最近文庫で出た『神様。仏様。稲尾様 私の履歴書』という西鉄ライオンズの不世出の投手・稲尾和久の自伝でも、同じ時代の日本の話ですが進学進路で親の漁師の仕事継がないで夢を追う難しさについても触れています。

また時代背景からすると、1960年前後の石炭から石油にエネルギーが切り替わる前、所謂エネルギー革命前夜のお話です。この頃、「黒い米」、「黒ダイヤ」と呼ばれた石炭は重工業の発達と共に産業の重要な基幹を握るエネルギーでした。当然そのエネルギーの確保が重要になってきますが、その石炭を掘るといことは暗く空気の良い場所、粉塵を吸いながら重労働に従事するという極めて劣悪な環境の中での作業でした。その上、出水、落盤、爆発などの危険が大きく伴う仕事であった訳です。そんな中でホーマーの父のような人間を支えていたのは、自分たちが産業を支えているといった誇りではないかと思えます。そして、ホーマーも炭鉱で働くことによってそんな父の生き方を少し理解できるようになっていきます。

ちなみに映画の原題「October Sky」は原作「Rocket Boys」のアナグラム（文字の順序を換えて別の意味にする）になっているという凝ったタイトルです。野球ファンとしては「ロケット・ボーイズ」と聞くとヤクルト・スワローズの豪腕コンビ、石井弘寿投手と五十嵐亮太投手を思い出してしまいますが（苦笑）。

この映画が好きな人には、川端裕人の小説『夏のロケット』と、あさりよしとおのマンガ『なつのロケット』をおすすめします。どちらも『遠い空の向こうに』リスペクトのお話で、思わずニヤリとして思わず心温まることうけあいです。

【遠い空の向こうに（October Sky） 1999年 USA】

【ビル・コンティ】

ビル・コンティ（Bill Conti）といえば『ロッキー』、『ロッキー』といえばビル・コンティですが、彼も多作な映画音楽家です。

1942年4月13日にUSAはロードアイランド州で生まれたビル・コンティは常にイタリアン・オペラが流れているような家で育ち、幼少の頃はバロック音楽のような曲の作曲家になろうと考えていました。ルイジアナ大在籍時にナイトクラブでジャズを弾いていたビル・コンティは名門ジュリアード音楽院に進んだ後、学士・修士を修得。映画音楽の道に入り、『ロッキー』で世界的に知られるようになります。

私がビル・コンティの音楽で印象的なのは『ハリーとトント』ですね。とても静けさを感じるバックに素朴なシンセサイザーのメロディが溶け込むように流れて、とてもさわかな曲です。これも関光夫の番組で録音して、本当にテープが擦り切れるぐらいに何度も聴き込んだ曲です。

もちろん、代表作でもある『ロッキー』の音楽もすばらしい出来だと思います。気分が著しく高揚する曲のひとつだし、聞けば聞きこむほど、本当にアレンジがすばらしいと思います。

・映画メモ『ハリーとトント』

2003年1月に亡くなったアート・カーニーの出世作。この作品でアカデミー賞の主演男優賞をもらっています。老人と年老いた猫の心温まるロード・ムービーです。

アート・カーニー扮する72歳のハリーは年老いた愛猫のトントとニューヨークのマンハッタンに住んでいたのですが、区画整理のためにアパートから強制的に立ち退きさせられます。仕方なくハリーはトントを連れて長男のバートの家に行くのですが、家庭内でのいざこざが絶えずシカゴにいる娘の世話になることを決心します。ところが飛行機に乗ろうとしたところ、猫のトントを乗せてもらえなかったために、バスに変更。ハリーとトントの長い旅路が始まります。

アート・カーニーは姿もさることながら声がいいですね。ハリーの豊饒としていて前向きな姿勢は、歳を取ったらああんりたいなあと思わせる理想の姿のひとつです。

初恋の相手のダンサーに会いに行ったところ、彼女はもう健忘症が進行していて、ハリーをどうしても思い出せず他の人と間違えているんですよね。それでも一緒にダンスを踊るシーンは切なくも美しいシーンでした。また、公園で話していた仲間が物言わぬ姿になってからお別れを言うシーン、娘と湖のほとりで話しあうシーン、トントとの別れのシーン、そしてラストの猫を追いかけて海辺で砂の城を作る少女のそばに来るシーンなど、ひとつひとつのエピソードが後からじわっと思い出されてきました。

ハリーとジンジャーとノーマで車で移動しながらはしゃぐシーンで、ハーモニカとシンセサイザーがメロディのこの映画のテーマ曲が流れます。ビル・コンティのペンになるこの曲が好きで昔は繰り返し聴いていました。『ハリーとトント』の映画にピッタリの名曲だと思います。ガールズ・バンドの"Long Train Running"のライブ・シーンは謎でしたが（笑）、あれはあれで好きです。

立ちションで拘置所に入れられた時（笑）に、同室のアメリカン・ネイティブ（チーフ・ダン・ジョージ）に、猫のトントの名前の由来を「ローンレンジャーのトントからつけたんだ」というシーンも印象に残ってます。ご存知、ローン・レンジャーの中では頼れる相棒であったアメリカン・ネイティブのトントだったので、そう言ったのでしょう。でも彼は鬼警部アイアンサイドしか見てないんですよね（笑）。

決して派手さはないのですが、味わい深い何度でも見たくなる映画でした。

【ハリーとトント (Harry and Tonto) 1974年 USA】

・映画メモ『ロッキー』

前年にはロバート・ミッチャムの『さらば愛しき女よ』にチンピラ役としてチョイ役で出ていたシルヴェスター・スタローンが、テレビで見たモハメッド・アリの試合に感動して三日間で書き上げた脚本を持って、自分の主演を条件に売り込んだと言われる映画です。ご存知の通り、この映画は世界的な大ヒットを飛ばしてシルヴェスター・スタローン自身も一気にスターダムにのし上がった作品でもあります。

スラム街で賞金稼ぎの三流ボクサーとしてヤクザな生活をしているロッキー・バルボア(シルヴェスター・スタローン)は通称「イタリアの種馬」というあだ名でラフ・ファイトを得意としていましたが、どうにも金にならないとジムをほうり出されてしまいます。ロッキーは精肉工場で働く親友ポーリー(バート・ヤング)の妹であるエイドリアン(タリア・シャイア)に恋していましたが、次第にお互い惹かれあってきます。建国200年祭が近づくその頃、イベントの一環として無敵の黒人ボクサー、アポロ・クリード(カール・ウェザース)が世界ヘビー級タイトルマッチを行うことにしますが、対戦相手が負傷のため出られなくなります。アポロ側は代役を探す中、実力差が歴然としている無名の三流ボクサー、ロッキーを指名。半ば強制的に試合を開催することになってしまいます。ロッキーは絶対に勝てない試合であると思いながらも、元ジムの老トレーナーのミッキー(バージェス・メレディス)やポーリー、そしてエイドリアンに支えられながら死に物ぐるいの特訓を始めます。そして試合当日、無敵のアポロと無名のロッキーとの試合のゴングは鳴らされました……。

今でもシルヴェスター・スタローンの映画というと、この映画を挙げる人が多いのではないのでしょうか。愛と友情と努力をシンプルに描いて、這い上がっていくアメリカン・ドリームを見せながら、清々しいラストまでつながっていく脚本は素晴らしいと思います。何度見てもいい映画のひとつですね。願わくば2までぐらいでやめていてくれれば、伝説になったんでしょうけど(苦笑)。

またこの映画では『ハリーとトント』のビル・コンティが音楽を担当していますが、テーマ曲の「Gonna Fly Now」は名曲といえるでしょう。映画を見なくてもこの曲を聴くだけでアドレナリンが大量に出てきそうになりますが、ホーン・セクションからストリングス、リズム隊、コーラス、シンセサイザーと実に巧みにかっこよく作られています。この頃はなんだかラジオでは、イーグルスの「ホテル・カリフォルニア」と「ロッキーのテーマ」ばかりかかっていたような気が(笑)。

そういえばこの映画のヒロインのエイドリアンからエイドリアンは女性だけの名前だと思っていたのですが、象のパオパオ・ギターでトーキング・ヘッズやキング・クリムゾンに参加したエイドリアン・ブリューは男でしたね(笑)。

【ロッキー (ROCKY) 1976年 USA】

【ヴァンゲリス】

多重録音を駆使するシンセサイザー演奏家としても有名なヴァンゲリス（Vangelis）ですが、その映像的な作風から映画音楽も少なからず手がけています。

ヴァンゲリスという名義で活躍中のヴァンゲリス・オデッセウス・パパタナシューは1943年3月29日、ギリシアのヴァロスに生まれました。ピアノを習い始めたのは4歳の時、6歳からアテネの音楽学校の通いはじめ曲を作る早熟ぶりで天才少年として知られるようになりました。1960年代にはフォルミンクスというバンドで演奏活動を始めますが、ギリシアの軍事クーデターをきっかけに1967年にフランスのパリに移住しました。1968年にはアフロディティス・チャイルドというバンドを結成してヒットを放ちました。1972年の解散と前後して、1971年にはソロ・アルバムを発表。以降、ヴァンゲリスとしてシンセサイザー等キーボードを駆使した多重録音のアルバムを次々に発表します。1974年にはプログレッシブ・ロック・バンドの雄、イエスに脱退したリック・ウェイクマンの後任として誘われますが、本人はソロ活動に専念するためにそれを辞退。なお、1979年からイエスのボーカルのジョン・アンダーソンとデュオ・アルバムを5枚製作しています。その映像的な音楽によって、1970年代から映画音楽やテレビ、舞台の音楽の作曲および制作を依頼されるようになり、また2002年のFIFAワールドカップのテーマ曲も手がけています。

ヴァンゲリスの映画音楽が日本未公開のものを含めて1970年代から多く出ていましたが、何と云ってもヴァンゲリスの名を広く知らしめたのは『炎のランナー』のテーマでしょう。ヴァンゲリスらしい柔らかなシンセサイザーの音をイントロにスケールの大きさと爽やかさを感じさせてくれるテーマ曲は多くの方が耳にしたことだと思います。この曲を大変気に入っていた親友のドラマーも、結婚式の入場のテーマとして流していました（私の時はカーペンターズの「We've only just began」でした（←誰も訊いていない（笑））。今でもテレビの場面で重宝して使われる曲らしく、時々耳にすることもあります。

そしてまた、『ブレードランナー』も忘れられないサウンド・トラックです。エレクトリック・ピアノによるメロディの切ない曲や、いつものヴァンゲリス・サウンドによるアレンジ、そして打込みを前面に出したエンディング・テーマなど、曲を聴けば場面が思い出せるような曲が目白押しでした。この2作品に『イグナチオ（奇跡のランナー）』を加えてヴァンゲリス・ランナー3部作とは、誰も言うてはいません（笑）。

ヴァンゲリスにとっては1982年の『ミッシング』も重要な作品ではないでしょうか。監督は暗にギリシア軍事政権の横暴を描いた名作『Z』の監督でもあるギリシア出身のコンスタンチン・コスタ・ガブラス。ギリシアと同じような構造で軍事クーデターが起きた南米の国（チリであることは明らかです）を舞台にした映画ですが、不気味に蠢く陰謀を暗示するような音楽がじわじわと心に浸入してきます。

日本映画界の大ヒット作でもある『南極物語』の音楽を担当していることは、意外に知られていないかもしれません。壮大な風景にぴったりの音楽家だけに、まさにはまり役だったと思います。

・映画メモ『ブレードランナー』

『ブレードランナー』と最初聞いた時には「刀の走者？剣の舞？」とか思って、どういう意味だったのか分からなかったのですが、実は今も分かっていません（苦笑）。

人類が宇宙に進出していた2019年。レプリカントという人間そっくりの人造人間が作られていましたが犯罪や叛逆を起こすことがあるので、警察ではレプリカントと人間を識別するためのフォークト・キャンプ検査で罪を犯したレプリカントを抹殺していました。そんな時、宇宙に出ていた4体のレプリカントが脱走。刑事であるデッカー(ハリソン・フォード)は脱走したレプリカントを追います……。

2019年といえは15年後ですが、この映画が作られた年からは40年近く先のことでした。猥雑とした未来の雰囲気は、フィルム・ノワールの世界を未来に移した感じです。個人的には化学プラントを見慣れているので、内陸部であんな炎が上がっているのがまず疑問でしたが（笑）、まあ雰囲気というものでしょう。映画全体の雰囲気も未来版フィルム・ノワールと言った印象です。また生命をテーマにしているだけに、ひとつひとつの死のエピソードを丁寧に描いて見せてくれます。

音楽を担当しているのはバンゲリス。昔からの機材をずっと使っているんだらうなあと思わせる、一貫してバンゲリスらしい音色使いのサウンド・トラックですが、これが実にはまっています。

公開後に「完全版」、「ディレクターズ・カット最終版」が作られたそうですね。バンゲリスのシーケンサー主体の音楽とナレーションをバックに、森の上を失踪するラストの部分などが変わっているとのこと。現在DVDで出ているのは「ディレクターズ・カット最終版」らしいですね。

原作はフィリップ・K・ディックの「アンドロイドは電気羊の夢を見るか?」。風変わりなタイトルだけはよく知られているのではないのでしょうか。ただ、映画の方は設定とかいつまんだストーリーを引っ張ってきて使った感じで、小説とはちょっと離れた感じになっています。原作は非常に面白い小説でまさに名作ですので、まだ読まれてなくて興味のある向きはぜひ読んで見られることをお勧めします。映画に無い部分でヘミングウェイの「老人と海」を思わせるようなラストも好きです。

【ブレードランナー (Blade Runner) 1982年 USA】

・映画メモ『ミッシング (1982)』

映画を最も見ていた頃は、2本立ての映画を1日に2館ハシゴしたり駅前の500円で見る事ができた名画座に通ったりしていました。もうひとつ楽しみだったのが12月に映画研究会が主催する映画マラソン。映画館を借り切って、夜8時から翌朝8時まで6本の映画をオールナイトで見るという過酷ながら素晴らしい催しでした。当時はビデオも無かったし、実は私はテレビを持っていなかったのでテレビのロードショー番組を見る頃ができなかったのです。

その時期に見た映画で、心に銃弾を打ち込まれたように印象に残った映画の1本が、この『ミッシング』です。

南米の某国で暮らすチャールズ・ホーマンが軍のクーデターが起きた日に失踪します。その妻ベスと知らせを聞いてUSAからかけつけたチャールズの父のエドワードは、必死でチャールズの行方を追います。かねてから息子夫婦の主義主張を快く思っていないエドワードは、ベスと反発しながら大使館に搜索依頼を出したり聞き込みをしたりします。なぜか非協力的な大使館の態度もあってなかなか搜索は進展しませんが、次第にこのクーデターの背後に母国であるUSAが絡んでいることが分かってきます。

南米某国となっていますが、誰が見ても1973年9月11日のチリの軍事クーデターを思い起こすでしょう。選挙によって社会主義政権を築いたアジェンデ政権に対して、USAの後ろ盾をうけたピノチェト元大統領が軍事クーデターを起こしたあの事件です。その後17年間大統領として独裁政治を続け、その間に3000人以上の反体制の人々が「行方不明」となったもまた有名な話です。

父エドワードを演じるジャック・レモンの演技がとにかく素晴らしいの一言に尽きます。その前に見た『チャイナ・シンドローム』での演技も素晴らしかったのですが、終始ほとんど抑えた演技でも、表情で心が伝わってくる名演です。軍の発砲に居合わせて思わず「やめろ！」と暴れて殺されそうになり、「息子さんも前に同じようなことをしたわ」と言われた時のシーンが特に心に残っています。

また、戒厳令下でのこれでもかというような軍の殺戮と死体の山は、実話が元になっている事を知るだけに衝撃的でした。そしてこれは、これからも起こりえないことではないのです。

USAをアメリカ表記しないのは、中南米の人と話をしていると「アメリカというのはアメリカ大陸だ。合衆国だけがアメリカじゃない」という意識が根強いのを知ってからです。

【ミッシング (Missing) 1982年 USA】

・映画メモ『南極物語 (1983)』

公開当時は大ヒットして、確か当時の興行成績を塗り替えた邦画です。邦画の動物モノに「～物語」というタイトルが多いのは、なぜなのでしょうねえ？

昭和33年2月、南極の昭和基地では第一次越冬隊と第二次越冬隊の交代の時期が来ていました。ところが例年になくあまりにひどい悪天候のために第二次越冬隊の逗留は中止。労働力である十五匹のカラフト犬は基地に置き去りにされたまま、隊員たちは日本に帰ることになりました。残された犬たちは……。

犬が出てくる映画ですが、公開当時は見に行きませんでした。犬は大好きなのですが、犬にとってはつらい話だと耳にしていたもので迷いがあったのです。後にビデオで見ることにはなりますが、やはりちょっとつらかったですねえ（苦笑）。やはり動物もので凄惨極まりないものはなかなか平静に見ることが出来ません。犬が亡くなるたびに名前や年齢のテロップが出るのは『仁義なき戦い』かなんかと思ってしまいましたけど（苦笑）。俳優陣も高倉健、渡瀬恒彦、夏目雅子、荻野目慶子なんかが出ていたんですね。

余談ながら、安永航一郎のマンガ『県立地球防衛軍』の単行本の空きページに『南極物語』のレビューもどきが載っていましたが、これが実は内容がどうみても前年公開の『遊星からの物体X』（爆笑）。巧妙に『南極物語』であるかのように書いていました（笑）。同じ南極基地でも違いますわな（苦笑）。「タロの顔が突然夏みかんのようにバククリと割れるシーン」なんて書かれた日には（笑）。

音楽はどういう経緯かヴァンゲリスが担当。さすがはヴァンゲリスで広大な自然の風景に負けていない大きな音楽が見事でした。

【南極物語 1983年 日本】

【ヴィクター・ヤング】

第二次世界大戦を挟んでハリウッドの映画音楽家として活躍し、マックス・スタイナーやアルフレッド・ニューマンと共に賞賛されるヴィクター・ヤング (Victor Young)。彼の美しいメロディを愛する映画愛好家、映画主題曲愛好家も少なくないでしょう。

ヴィクター・ヤングは19世紀も終わりの1900年8月8日にUSAはシカゴで生まれました。最初はバイオリン奏者として音楽活動を始めたヴィクター・ヤングはポップスに転向すると、自分のバンドを結成して活動をしていました。そして34歳の頃、ラジオ仕事をした時に映画音楽の仕事の声がかかりました。その後、1956年11月11日に亡くなるまで100を越す映画の音楽にかかわり、多くの名曲を世に送り出しました。忘れてはならないのは、「ジャーニー・ギター」、「ラヴレター」、「愚かなりし我が心」、「星影のステラ」、「マイ・ロマンス」といった映画の主題曲も含めて後世に残るスタンダードの曲を作り出したことでしょう。

ヴィクター・ヤングと聞いてまず浮かぶのが、『シェーン』の「遥かなる山の呼び声 (The Call for Far-away Hills)」。牧歌的な感じのする中にも哀愁の帯びたメロディが心に残りました。

晩年の作品『80日間世界一周』もよく耳にしますし、よく知られた曲ですね。メロディが美しく、聞くと心が期待にワクワクしてくるような曲です。長寿テレビ番組、「兼高かおるの世界の旅」の主題曲にも使われていたと思います。

そういえば『腰抜け二挺拳銃』の音楽も担当しています。主題歌「ボタンとリボン」の方はジェイ・リビングストンの曲になるのですが、麻薬のように繰り返し心に残って知らない間に口ずさんでいそうで、「ボタンとリボン」は英語で「Buttons And Bows」なんです。「バッテンボー」と聴こえて仕方ありません (笑)。

・映画メモ『シェーン』

すべてにおいてシンプルな西部劇、『シェーン』という映画は今も知られているのでしょうか。

西部開拓時代、初夏のワイオミングの高原地帯にシェーン(アラン・ラッド)と名乗る一人の旅人がやってきて、開拓移民のジョー・スターレット(ヴァン・ヘフリン)の家で水をもらったのが縁で、家族の好意で泊めてもらうことになります。妻のマリアン(ジーン・アーサー)、一人息子のジョーイ(ブランドン・デ・ワイルド)というスターレット家でしたが、このあたりでは牧畜業者のライカーと揉め事が多い日々を送っていました。冬まででも働いてくれないかと頼まれて残ったシェーンは町で絡まれても相手にしないようにしましたが、次第に凶に乗ったライカー農場のシンパは乱闘を起こします……。

1953年に作られた西部劇。主人公の名前を冠したタイトルもストーリーも人物関係もすべてシンプルな映画。そして、ラスト・シーンがずっと余韻として残る映画でした。ヴィクター・ヤングの牧歌的でありながら、少し哀愁を感じる曲「遥かなる山の呼び声 (The Call for Far-away Hills)」が心に残ります。EP盤を持っていて何度も聴きました(ちなみにCMWは『エデンの東』でした)。

西部劇俳優としては小柄なアラン・ラッドと敵役ジャック・パランスの対比がうまいですね。銃の撃合いの場合は多分野球の投手とは違って、身長差や見た目の迫力は実際にはあまり大きな要素ではなさそうですが、映画的に判りやすくハンデを見せるという意味で、うまい演出だと思います。そのジャック・パランスがまたいい感じでしたよ。

【シェーン (Shane) 1953年 USA】

・映画メモ『腰抜け二挺拳銃』

ボブ・ホープの腰抜けシリーズの中でも評判の高いのがこの『腰抜け二挺拳銃』。その心に残る主題曲と共に愛された映画です。

禁固10年を言い渡されている女盗賊でガンマンのカラミティ・ジェーン（ジェーン・ラッセル）はその刑を免ぜられるのと引き換えに、秘密裏にアメリカン・ネイティブにダイナマイトやライフルなどの武器を密売するギャングを探ることを命ぜられます。ところが密売者一味もその情報を得ていてスパイを探している状況で、ジェーンは擬装のために、たまたま出会った肝っ玉は小さいがお調子者の歯医者ペインレス・ピーター・ポッター（ボブ・ホープ）を口説いて、結婚すると幌馬車隊に加わります。そこでジェーンは幌馬車隊の中にダイナマイトが隠されているのを知り、ギャングが同行しているのを知ります……。

クールで強いジェーン・ラッセルと、弱虫でお人好しのボブ・ホープといった役柄で人気を博したウェスタン・コメディ。二人とも役に実に合っていていいですな。冒頭、牢屋に強盗もどきが現れてから2人が出会うまではシリアスな西部劇かと思いましたが、ところがどっこい、ボブ・ホープが現れてからはどんどんコメディの方向へ。後半なんか普通の西部劇では緊迫する場面がいくつかあっても、全然緊張感がありません（笑）。安心してみてられます（笑）ギャグは時代もあって基本のキミたいなものばかりですが、しっかりテンドンなどの繰り返しギャグもあってニヤリとさせられることしばし。おバカでハッピーな映画です。しっかり、最後にオチもつけてくれます（笑）。

馬車の中で手風琴を弾きながらボブ・ホープが歌う主題曲「ボタンとリボン」は、本当に耳に残る名曲ですね。ウェスタンらしい歌詞も心に染みるし、「バッテンボー」（=Buttons And Bows）と言われて流行ったのも判る気がします。

【腰抜け二挺拳銃（The Paleface） 1948年 USA】

【金培達（ピーター・カム）】

今や香港映画の音楽にはなくてはならない人のひとりで、香港電影金像獎でもノミネート・受賞の常連になっている金培達（ピーター・カム(Peter Kam)）です。

実際のところ、外国語に疎いのでプロフィール・経歴などは調べてもなかなか判らなかったので、知っておられる方がいらっしゃったらぜひ教えていただきたいものです。したがってフィルムグラフィもあまりちゃんとしたものが見つかりませんでした。

私が初めてピーター・カムの名前を知ったのは『星願～あなたにもう一度』です。張柏芝（セシリア・チャン）が歌う主題歌が最佳原創電影歌曲を受賞しただけある心に染みる曲だったのもあるのですが、映画の中でサックスの演奏が一つのキーになっているのもあり、またコーラスによって盛り上げるサウンド・トラックは美しい映像と相まって映画に深く感情移入させてくれました。その音楽で最佳原創電影音樂も受賞しています。サウンド・トラック盤を探しているのですが、既に廃盤でないようで残念に思っています。この映画を初めとして、馬楚成（ジングル・マ）監督とは『東京攻略』、『シルバーホーク』などとコンビを組んで映画を作っています。

そのうちの一つ、『芭[口拉]芭[口拉]櫻の花』(Para Para Sakura)はパラパラに馴染まない私でもあやしいニホンゴと共に頭にこびりついた主題歌（笑）と共に、挿入曲やサウンド・トラックの美しさが好きです。

最近だと『ワンナイト・イン・モンコック』も印象的なサウンド・トラックです。通奏低音と多くの打楽器や簫などを使って、緊張感を非常に盛り上げていました。あの音楽があるのとないのでは、かなり違うと思われる場面が多々あります。これもピーター・カムならではのものだなと思っています。

・映画メモ『星願～あなたにもう一度』

なにげない日常がずっと続くと思っていた時、

大切な人に会えなくなってしまった時、

「あの人もう一度会いたい」と思ったことはありませんか？

一生懸命になって周りが見えなくなった時、

ふと素直に戻ろうと思うことはありませんか？

この映画は現代のおとぎ話です。

ストーリーはとてもベタでありがちな話です。青年オニオン（洋葱頭）は、子供の頃の事故で目が見えず口も聞けなくなっていたのですが、病院で明るく働き看護婦のオータム（秋男）にほのかな思いを寄せています。ある日、オニオンは不慮の事故で死んでしまうのですが、天国の係官のはからいで「5日間だけ別人として生き返ることができるが、その間は絶対に自らの正体を明かすことができない」と言われます。地上に別人として戻ったオニオンはオータムに会ってなんとか思いを伝えようとするのだけど……。そんな話です。天国の場面や一部使っている特撮も予算をかけている映画を見ている肥えた目には、いかにもしょぼく感じることでしょう。

しかし、まず撮影監督出身のジングル・マ（馬楚成）監督の青を基調とした映像美と編集が素晴らしいです。後にジングル・マ監督は『Parapara Sakura』という上野公園でパラパラを踊るという迷作（笑）を撮ってますが、これも夜に羽根が舞う中でダンスをする幻想的なシーンが素晴らしい出来でした。加えて金培達（ピーター・カム）の静かで豊かな響きのセンスのいい音楽。話の中で重要な役割を果たすサックスの使い方がまたうまいと思います（吹いているシーンからそれがそのまま違和感なくBGMに移行していくところとかも）。

そして、なんと言ってもオータムに扮する当時新人のセシリア・チャン（張柏芝）のけなげな演技にノック・アウトされました。ラブ・ストーリーは基本的に苦手なので見ない私なのですが、この映画には恥ずかしげもなくぼろぼろ泣いてしまいました。また、エリック・ツァン（曾志偉）がすごくいい味を出しています。

昨年日本で『星に願いを』というタイトルでリメイクされましたが、残念ながら元の『星願』の方が数倍いいように思えました。

オニオンの次の言葉がずっと心の中に響いています。

どうかみんな、目を閉じて……

隣りにいる人を心で感じて。

とてもいい感じがするから……

【星願～あなたにもう一度（星願／FLY ME TO POLARIS） 1999年 香港】

・映画メモ『東京攻略』

馬楚成（ジングル・マ）監督が東京ロケを行って撮った2000年の香港映画です。もちろん舞台はほとんどが東京。

大銀行に務める父親に反対してメイシー（陳慧琳／ケリー・チャン）は、日本人ビジネスマンの高橋（仲村トオル）とラスベガスで挙式をするはずでした。ところが結婚式の時間になっても新郎は現れません。一人寂しく香港の新居に帰ったメイシーの前に内装デザイナーのユン（鄭伊健／イーキン・チェン）が現れて、高橋から受け取った小切手が偽物だったと迫ります。二人は高橋を探しに東京へ。高橋のマンションを訪ねたところ、謎の男たちに襲われて逃げる途中、私立探偵リン（梁朝偉／トニー・レオン）の部下（遠藤久美子）に助けられます……。

『星願』とはうって変わって、いかにも香港映画らしい映画でした。そこそこのアクションがあり、カー・チェイスや隅田川をボートで登っていくシーンなどもみせてくれます。東京を知っている人間には、いつのまにかテレポートしちゃってるような無理な移動は笑えるでしょうけど（笑）。

トニー・レオン扮するリンは小さい頃から日本で育ったという設定ですが、それにしては日本語が怪しすぎます（笑）。もっとも、遠藤久美子の活舌の悪いセリフもどっこいどっこいで、『戦場のメリー・クリスマス』の坂本龍一のセリフに字幕がほしいと思った私にはあまり気になりませんでした（笑）。

そのトニー・レオン、セリフは別にして、スマートな大人のカッコよさを振りまいてくれました。「顔はやめて」には「薬師丸ひろ子リスペクトかいな？」と笑っちゃいましたけど。またイーキン・チェンは毎度いい人光線を振りまいて軽快にアクションをしてました。ケリー・チャンはいつものおすましさんですが、泳げないのにあのアクション・シーンに挑戦したとか。しかし、電話ボックスの前であんなひどいセリフを言われていいんでしょうか？（苦笑）阿部寛もなかなか渋くてよかったです。セシリア・チャンは何のために出てきたのかまったく不明（笑）。とにかくアラは山ほど見えるもの、楽しい香港映画という感じの作品でした。

現在、ジングル・マ監督は続編『韓城攻略』を撮っているといううわさです。トニー・レオンと舒淇（スー・チー）が出るとか言う噂もあります。そこそこに『東京攻略』ぐらいに期待していますが、日本での公開のタイトルが『スー・チーの韓国攻略』みたいだったらやだな（苦笑）。

【東京攻略（東京攻略／Tokyo Riders） 2000年 香港】

・映画メモ『シルバーホーク』

ミシェル・ヨー姐さん自らプロデュースの単純明快ヒロイン・アクション作です。

近未来のポラリス・シティでは正体不明の悪を倒す正義のヒロイン、シルバーホークが大活躍。今日もパンダの子をさらったギャングの大型トレーラーに追いつき、一味を捕らえます。銀のスーツに銀のマスクで正体を隠した彼女の素顔は、ポラリス・シティでは大富豪として知られるルル・ウォン（楊紫瓊／ミシェル・ヨー）。ところが警察はメンツ丸つぶれで、シルバーホークを逮捕するためにリッチマン警視（任賢齊／リッチー・レン）を指名します。そしてリッチマン警視は最初は気づきませんでした。ルルとは幼い頃に少林寺で一緒に修行していて、ルルが去るまではまるで兄妹のように仲が良かった間柄でした。そんなある日、人工知能によって人間をコントロールすることに応用できる技術を開発したホ教授（陳大明／チェン・ターミン）が世界征服を狙うアレクサンダー・ウルフ（ルーク・ゴス）の手下のモリス（マイケル・ジェイ・ホワイト）とジェーン（李冰冰／リー・ビンビン）にさらわれてしまいます。その行き先を追ってリッチマン警視とルル、そしてホ教授の助手で自称シルバーホーク・ファンクラブ会長のキット（張卓楠／ブランドン・チャン）はゼンダ・シティへ行きます……。

初期の仮面ライダー・テイストが漂う正義のヒロインによる痛快アクション映画です。『バットマン』みたいにダークな雰囲気は漂うのでなし、『スパイダーマン』みたいに主人公が悩みぬくのでなし、極めて明朗単純にできてます。正直、ミシェル姐さんのアクションを見せるための映画と言っても過言はありません（笑）。な〜んだ、じゃあ私が見に行くにふさわしい映画じゃないですか（笑）。

ということでミシェル姐さんは終始カッコいいアクションを見せてくれます。冒頭から華麗な足技は炸裂するし、気がつくといつも次々に敵と戦っているし、ラストもハラハラするような仕掛けで見せてくれますね。「アクションは『卒業』した」、「『演技派』になりましたから」と言ったりする人が多い中、アクションの面白さを年齢に関係なく自らプロデュースして見せてくれるミシェル姐さんには、本当に「どこまでもついていきます！」と言いたいですな。『レジェンド 三蔵法師の秘宝』にはCGなどで今もうちょっと乗り切れなかった分、こちらは満足です。

ルルを演じている時も、服装や髪型を頻繁に変えてまるでファッション・ショーみたいでしたね。雑誌「ポラリス」の表紙なんかよくできていました。温泉のサービス・シーン（?）もありましたが、チンミー・ヤウみたいに「温泉では日本ではみんな混浴なのよ」とは言ってませんでした（笑）。セルフ・プロデュースだけあって、最大限に意見も通したのでしょうか。冒頭でバイクで万里の長城を飛び越すのに3ヶ月かかって撮影許可を取ったり、パンダと戯れるためにパンダを出したりしてそうです（笑）。なんとと言ってもミシェル姐さんがリッチー・レンと幼なじみで妹分だったというちょっと無理がありそうな設定は、なんとなくあるプロデューサーからの圧力があつたようなニオイがするのは気のせいでしょうか？（笑）『レジェンド 三蔵法師の

秘宝』でもブランドン・チャンと姉弟という設定がありましたし（苦笑）。

岩城滉一がゼンダ・シティ（地図からするとまるで東京みたいな場所（笑））にあるシライシ・エンタープライズの社長、アキラ・シライシを演じていて、なんか風貌がどこぞの現首相に似ていて笑いましたがあれは狙っているのでしょうか？（笑）岩城滉一は、今はぴちゃんくんがメイン・キャラクターを張っているダイキンの昔のイメージ・キャラクターだったんですが、今ではコングロマリットのトップになっているとはびっくりです（笑）。あと、公主顔のイメージがあるリー・ビンビンのアクションを見ることが出来たのも嬉しいですね。ホット・パンツに網タイツというセクシーな姿で悪の手先として戦っていました。幼いルーとリッチマンを演じた子役2人も好感度大です。

監督は馬楚成（ジングル・マ）で、やはり映像がいいですね。ミシェル姐さんをきれいに撮った功績大です。敵の「ホッケー・チーム」が現れたシルバーホークを前にして、揃ってステイックを床に打ちつけて鳴らすのは『冷戦』や『芭[口拉]芭[口拉]櫻の花』でも見せたジングル・マ印のシーンですね。女装リッチー・レンとミシェル姐さんのアクションをちょっと夜のコンクリートに映る影で見せたりなど、いつもながら工夫が好きな映像です。また、ジングル・マといえば音楽は金培達（ピーター・カム）。意識しなければ気づかないのですが、実に全編かなりの部分で音楽を入れています。この映画ではアレンジの下世話な感じがまたさすが仕事人らしいのですが（笑）、いつもいい仕事していると思います。

【シルバーホーク（飛鷹／SILVER HAWK） 2004年 香港】

・映画メモ『芭[口拉]芭[口拉]櫻の花』

『サタデーナイト・フィーバー』がディスコ・ブームを生み出した映画だとすれば、これは世界初のパラパラ映画です（多分）。もし他にあったら教えてください）。パラパラ映画といっても教科書のすみっこに少しずつ動く絵を描く手動アニメーションのことではありません。しばらく前に流行ったユーロ・ビートに乗せてやる気なさそうに踊るあのパラパラです。

生まれつき色覚がない郭富城（アーロン・クオック）扮する王は上海でダンス教室を開いていて、教室の宣伝のために街頭でデモンストレーションを行います。そこに現れた日中ハーフのユリ（張柏芝（セシリア・チャン））と出会い、二人は次第に惹かれあうようになります。ところがユリは実は日本の大財閥の娘で親から逃げ回っていること、実は婚約者がいることがだんだんわかってきます。二人で逃げようと思った矢先に王は友人に裏切られて、ユリは親元に戻されて日本に帰ってしまいます。傷心の王はユリを取り戻そうと日本に行く決意をします……。

『星願』、『東京攻略』の馬楚成（ジングル・マ）監督が、おそらく上野公園で桜の下でパラパラを踊る光景が撮りたいがだけのために、日本でロケしたいと思ったに違いない映画です。最初みた時はトホホ映画だと思っていたのですが、何度か見ているうちにまあまあいい映画かなと。まあ、何度見てもオチのあまりの強引さ（あれでいいのか？本当に？（笑））は変わりませんし、セシリア・チャンの日本語は『東京攻略』の梁朝偉（トニー・レオン）に負けていないし、そもそも「遊楽子」（なんとも言いがたい名前ですが）を「ユリコ」って読むのは無理あるんじゃないかなあとだったり、新宿新南口から出た時に見えるユリの親の会社の看板が横書きで「櫻グル|プ」だったりしますが、よしとしましょう。

純情な青年をアーロン・クオックが好演。結婚式でセシリア・チャンに思いの丈を告白するシーンは見どころです。ちなみに神前結婚の場面なんでセシリア・チャンの角隠し姿も見れます。恋敵の菊川グループの御曹司に扮する西村和彦もいい演技でした。

また途中の夜の街で踊るシーンは、ここだけを取り出して上映しても1つのプロモーション・ビデオとして完成しているようなすばらしさでした。ライトアップされた夜の広場に羽毛が舞う中、皆で踊りタップしたりする場面の美しさは、さすがは撮影監督出身のジングル・マならではの思います。

最後はとってつけたように桜舞い散る上野公園でパラパラ・ガールズ（笑）と踊りながらカット・バックをさしはさみますが、この曲、聞いているとすごく耳につきまますね。「ナンデスカー?」、「サクウーラァ」という謎の日本語もさることながら、サビの「見にこーいサクラーはえーよ、Come and Dance with me」という歌詞が耳に強力にこびりつきます（笑）。DVDのチャプターもしっかりそこにセットされてるし（笑）。

ちなみに2001年6月の記事を以下に。

広州：2000人が「パラパラ」でアジア大会招致

中国では、香港映画『浪漫桜花』（芭[口拉]芭[口拉]櫻の花）の上映をきっかけとして、若者を中心にパラパラブームが到来した。現在では、ダイエット目的の健康ダンスとしても人気を博している。

【芭[口拉]芭[口拉]櫻の花／Para Para Sakura 2001年】

【武満徹】

現代音楽家として世界的に知られている作曲家が武満徹です。映画音楽も数多く手がけていて、本人も「映画と音楽」について講演したりと、映画には並々ならぬ興味を持っていたようです。

1930年10月8日に東京都で生まれた武満徹は保健会社に務める父親の勤務地の大連で幼少期を過ごしました。14歳の頃は海軍のパイロットになりたかったそうなのですが、予科練の試験で不合格、また戦時中に聴いたシャンソンによって、音楽に大きな興味を持ちます。清瀬保二に作曲を師事しますが、基本はほとんど独学。家にピアノがなかったので紙鍵盤で練習したり、ピアノのある家に上がらせてもらって、弾かせてもらったなどというエピソードも残っています。1950年に処女作であるピアノ曲『2つのレント』を発表、1951年には作曲家の湯浅譲二らと「実験工房」という芸術集団を作って活動をして、次々に作品を発表します。1956年、永井荷風原作の小説を中村登監督が映画化した『つゆのあとさき』を始めとして約100本程の映画の音楽を担当しています。また現代音楽の作曲家としても、『弦楽のためのレクイエム』がストラビンスキーに認められたり、1967年にはニューヨーク・フィル125周年記念の作曲を当時の常任指揮者であるレナード・バーンスタインに依頼されて、琵琶と尺八とオーケストラによる『ノヴェンバー・ステップス』を書き、押しも押されぬ作曲家としてその名を不動のものにします。1996年2月20日、がんのために享年65歳で亡くなりました。

思い出深い曲は、五木寛之原作の映画で主題歌もヒットした『燃える秋』です。「翼をください」や「竹田の子守唄」でヒット曲を出したフォーク・グループの赤い鳥が解散して、ハイ・ファイ・セットと紙ふうせんになってから4年経った頃の映画です。この曲を歌ったハイ・ファイ・セットにとってもヒット曲になりました。ちなみにハイ・ファイ・セットのメイン・ボーカルだった山本潤子は、今もソロで活動しています。もちろんこの主題歌も武満徹の作曲です。武満徹自身、その他にポピュラーな作品もいくつか書いていて、石川セリなどがレコーディングもしています。また、『天平の躰』も地味ながらも大作で、浪漫あふれる作品でした。

『どですかでん』の音楽も心に残ります。映画の題名自体電車の擬音だったりしますが、独特の世界観をよりいっそう印象深くしてくれました。鈴木大介が渡辺香津美と共演した武満徹の作品集の中にも、この『どですかでん』の音楽が採り上げられています。

『乱』については音楽自体もさることながら、この作品を最後に武満徹が黒澤明の仕事は二度としないと誓った作品としても有名です。文春文庫から出ている野上照代著『天気待ち 監督・黒澤明とともに』にその経緯が載っています。『影武者』で佐藤勝が音楽担当を降りた時に代役を頼まれた武満徹はちょうどUSAにいてその時には池辺晋一郎を推薦したことや、『乱』の制作に入って音楽を担当してからの軋轢。そしてフィルムへの音楽のダビング時に、ティンパニーの迫力を出すためにテープの回転を落とすように黒澤明が言ったために、ついに堪忍袋の尾が切れます。

この時、武満さんは、ついに立ち上がった。

「黒澤さん！ 僕の音楽を切っても貼っても結構です。お好きなように使って下さい。でも、タイトルから僕の名前をけずってほしい。それだけです！ 僕はもう、やめる。帰ります！」

武満さんは、そんな意味のことを言うと、楽譜や鞆を抱えて出て行った。マネージャーの宇野さんが沈痛な面持ちで続く。私は、帰りの車を、と慌てて追いかける。場内はただ呆然。凍りついたように見送った。

この後プロデューサーの必死のとりなして、なんとか和解にこぎつけます。そしてダビングの最終日、打ち上げの時に黒澤明が引き上げた後、武満徹はピアノの前に座って、「これは黒澤さんに捧げる歌なんだ」と言って弾き語りを始めたそうです。

「昨日の悲しみ、今日の涙
明日は晴れかな、曇りかな
昨日の苦しみ、今日の悩み
明日は晴れかな、曇りかな」

これが武満徹の曲として親しまれている「明日ハ晴レカナ、曇リカナ」の原型だといわれています。そして、その後は黒澤明の映画音楽を二度とやることはありませんでしたが、『武満徹 音の河のゆくえ』の「映画と音楽」の講演記録を読むと、映画監督としての黒澤明を認めている部分もしっかりと持ち続けていたようです。

また、武満徹の現代曲には鳥をテーマにしたタイトル、そして水をテーマにしたタイトルがありますが、タルコフスキーの追悼として「ノスタルジア — アンドレイ・タルコフスキーの追憶に—」という曲を作っているように、タルコフスキーが好きであったそうです。

・映画メモ『天平の躰』

昔好きだった作家の一人に井上靖がいます。「蒼き狼」、「楼蘭」、そして「天平の躰」など、大陸を舞台にした歴史物語にはわくわくさせられたものです。

奈良時代に朝廷は、律令国家を確立し、仏教を広めることを大きなテーマとしていました。その中で大陸の文化を吸収する意味でも遣隋使に続く遣唐使が企てられていて、天平五年（733）春には第九次遣唐使船が大津浦を出航。若い日本人僧の普照（中村嘉律雄）、栄叡（大門正明）、玄朗（浜田光夫）、戒融（草野大悟）等が再び日本に帰れる保証もないまま、船に乗り込みます。四人が拝命した任務のひとつは唐の高僧に渡日してもらえないかと要請することでした。洛陽から長安を巡り10年の歳月をかけて、途中戒融が仏陀の真理を悟るために一人離れてしまうなどのこともありながら、道抗（陶隆司）の高弟である鑿真（鑑真）和上（田村高廣）が一同の熱意にほだされて渡日を決意します。ところが許可なく日本人僧が帰国することは許されず、中国人僧が勝手に渡日することも禁じられていました。張警備隊長（沼田曜一）の監視下、栄叡と道抗は密出国の主謀者として逮捕され、玄朗は一行から別れて還俗してしまいます。そして道抗は獄死してしまい、三年後に栄叡は釈放されます。

天宝七年（748）に鑿和上は渡日を企てますが暴風雨に遭遇して失敗、度重なる疲労から失明してしまい、栄叡は疲労と熱病でとうとう亡くなってしまいました。朝廷は第十次遣唐船を遣わして、普照や駐唐大使の藤原清河（高野真二）の働きと張警備隊長の温情で、鑿真和上と普照は日本へ帰る船に乗ることが出来ます。第九次遣唐使船から既に20年が経過していました。だがその船も暴風雨に見舞われ、写経した膨大な経典を人命救助のために海中に投げ捨てられ、唐で写経に一生を捧げていた業行（井川比佐志）も自ら経典と共に海に身を投げます。ようやく船は薩摩の秋妻屋浦に着き、一行は奈良に向かい迎え入れられた鑿真和上は、日本の仏教の発展に寄与することになります。

原作は井上靖の歴史小説「天平の躰」で、ほぼ原作にそった内容です。というよりは真面目に歴史に即して作っています。枝葉末節を切り落としても2時間半、遣唐使船作りや中国でのロケーションも含めて超大作映画でした。映画でも主役の一人でもある鑑真をはじめ、吉備真備や阿部仲麻呂などの有名人（笑）が出てくるので、そういう親しみやすさはありませんでした。スケールの大きな映画です。航海技術もが未熟な時代において、命をかけて長い時間の流れの中で苦勞をしながら文化を伝えていこうとする姿には素直に感銘を覚えました。

業行が一生をかけて写経した経典と共に運命を共にするシーンが印象的でした。荒れる海上とは違って静寂を称える海中で経典が海草のように揺れるシーンは今でもはっきりと覚えています。また、普照が20年ぶりに日本に戻って昔の許婚に会うシーンもぐっときました。未だにLDはおろかDVDにもなっていないみたいなのが残念です。

音楽は日本を代表する作曲家である武満徹。次の年には「海へ」や「雨の樹」を作り、2年前にはハイ・ファイ・セットの主題歌でも知られる『燃える秋』の音楽も担当していますが、この年は「遠い呼び声の彼方へ！」も発表している非常に充実した年ではなかったのでしょうか。スケールの大きさを感じさせてくれるサウンド・トラックでした。

【天平の薨 1980年 日本】

【エルマー・バーンスタイン】

映画音楽の巨匠たちには多作家が多いのですが、昨年お亡くなりになったエルマー・バーンスタイン（Elmer Bernstein）もその一人と言えるでしょう。

1922年4月4日、ニューヨークのブルックリン生まれ。ジュリアード音楽院で作曲を学び、現代音楽の作曲家で映画音楽もこなしたアーロン・コープランドに手ほどきを受けています。第二次世界大戦の最中には空軍放送局に勤めた後、ハリウッドでテレビの劇音楽や映画音楽の作曲を始めます。その作品は数多く、また多方面に渡ってハリウッドの映画音楽を支えてきました。昨年（2004年）8月20日に82歳の生涯を閉じました。

エルマー・バーンスタインも駆け出しの頃は、『ロボット・モンスター』や『月のキャットウーマン』と言った、トホホ系映画好きには非常に香ばしい映画の音楽を担当させられた時期もあったのですが、なんと言っても出世作といえるのは超大作『十戒』の音楽をおいて他にはないでしょう。映像自体も当時のもてるものを駆使した超大作でしたが、音楽もそれに負けないだけのフル・スコアによる大スペクタクルな音楽に仕上がっています。

『大脱走』も耳に残る有名なマーチによるテーマ曲を始めとして、印象の強いサウンド・トラックです。マーチによるテーマ曲はよく単独でも演奏されることが多く、聴く機会も多いと思います。

また、エルマー・バーンスタインの名を不動にしたのが『荒野の七人』を始めとするシリーズですね。アカデミーの劇・喜劇映画音楽賞にノミネートされたものの受賞にまではいたりませんでした。メキシカン・タッチの乾いた緊張感のあるカッコいい曲が目白押しでした。その延長上にコメディの『サボテン・ブラザーズ』がありますが、こちらも手馴れたものでぼったりはまって気持ちのいい音楽です。

珍しいところではアニメーション作品である『ヘビー・メタル』。ロックの挿入曲以外の部分でのオーケストラによるスコアのサウンドトラックで映画を彩っていました。

・映画メモ『大脱走』

「逃げる」というのは非常にスリルのあるテーマのひとつですが、その中でも出色の出来の映画が1963年の『大脱走』。そのタイトルに恥じない面白さです。

第二次世界大戦中のドイツでは、何度も脱走を繰り返す連合軍の捕虜たちに手を焼いていました。そこで脱走常習犯たちを脱走不可能と言われる収容所を作ってそこに押し込めます。ところが捕虜たちも不屈の魂の持ち主。それぞれ得意技を持ち寄って、ドイツ軍の兵士の監視の中、実行不可能と思われる脱走計画を進めていきます……。

実話を元にした映画だそうです。死を賭けた脱走というテーマがスリルと緊張感を生み出します。ドイツ軍との知恵の勝負。仲間たちで協力して密かに仕掛けをしていく様子。いつ、発覚するかわからない脱走計画。敵味方含めてそれぞれの登場人物が粒だって描かれていて、それぞれに感情移入してしまい、3時間近くの映画があっという間です。決して能天気な明るさに満ちた映画ではなくむしろ暗い部分もあるのに、見た後に心の底からわいてくるようなものを感じますね。

出演した俳優もスティーヴ・マックィーン、チャールズ・ブロンソン、ジェームズ・コバーン、リチャード・アッテンボローなど、そうそうたる面々で、これで脚本もよければスタッフもいいのですから面白くならないはずがありません。調達屋のヘンドリーの扮するジェームズ・ガーナーなんか、いい味だしていましたねえ。

今は亡きエルマー・バースタインの書いたテーマ曲、「大脱走のマーチ」は憶えやすいメロディで単独でもよく演奏されたりします。この口笛でも吹きたくなるような軽快なテーマ曲が、映画を支えています。収容されたメンバーによる讃美歌「Joy to the World」や「Yankee Doodle」などの、捕虜の誰しものが共通に持っている歌も印象的でした。

40年以上前の映画ですが、まさに傑作と呼ぶべき映画だと思っています。

【大脱走 (THE GREAT ESCAPE) 1963年 USA】

・映画メモ『サボテン・ブラザーズ』

原題は『Three Amigos!』。『!tres amigos!』でないところが、いかにもUSAのおっさんがパチモン・メキシカンをやってるなという雰囲気、うまくかもし出してると思います。邦題はジョン・ランディス監督がかつて『ブルース・ブラザーズ』をヒットさせたからでしょうか？

1916年のこと、メキシコはサンタ・ポコの村で、悪党エル・ワポー味は略奪のやり放題。困り果てた村人は偶然教会で上映されている『Three Amigos!』のサイレント映画を見ます。悪を討ち謝礼も貰わずに帰る3人の映画をドキュメンタリーだと勘違いした村人は、「彼らに頼めば助けてくれるに違いない」と思い込み、サボテン・ブラザーズの3人に短い電報を打ちます。本国では落ち目の3人は撮影の仕事が入ったものと思い込み大喜びでサンタ・ポコの村へ出向きます。村では救世主が現れたと上へ下への大歓迎。はたしてその翌日、エル・ワポー味が村を襲いにやってきます……。

もうこれは愛すべきおバカ映画です。笑ってジーンときて勇気をくれる映画でした。

村人を救おうと堅い決意をしてからも、3人のオトボケぶり、オマヌケぶりが止まらないところがなかなか笑わせてくれます。村娘のカルメンを救いに行ったのに、どっちが救いにいってるんだかといった場面もありますし。かっこいいんだかかっこ悪いんだかわからない（笑）キメのポーズもおいしいです。と思うと野営なんかはカキワリをバックに模型の動物を臆面も無く出すし（苦笑）。また歌う木と透明の騎士のあたりは、モンティ・パイソンっぽいテイストも感じました。

白眉の場面といえは3人のうちの一人の早撃ちネッドと、彼に子供の頃憧れていたというドイツ人との一騎打ちで、懐かしい西部劇ならではの緊張シーンです。オチもつきますが（笑）。

この映画の西部劇らしさを一層演出しているのが、『荒野の七人』のシリーズなど数々の名画の音楽を手がけているエルマー・バーンスタインのスコアです。とても1986年の映画とは思えないような、懐かしくて場面に溶け込んだ音楽を手がけています。その彼も2004年の8月18日に鬼籍に入ってしまった。ご冥福をお祈りいたします。

【サボテン・ブラザーズ (Three Amigos!) 1986年 USA】

・映画メモ『ヘビー・メタル』

音楽でもヘヴィメタルというジャンルがありますが、実はこの映画、それとは直接関係ありません。本邦初公開時には『ヘビー・メタル』というタイトルで、1996年には『ヘヴィ・メタル』というタイトルで再映されたR指定のアニメーションです。

帰還した宇宙飛行士の父が娘の前でカバンから取り出したものは、緑色に光る丸い物体でした。生き物のように動くその物体は瞬く間に父を殺し、娘に迫ります。緑色の光る球体は自らを悪の権化ロック・ナーと名乗り、時空を越えた物語を語り始めます……。

物語は「ソフト・ランディング」、「グリマルディ」、「ハリー・キャニオン」、「デン」、「キャプテン・スターン」、「B17」、「美人は危険」、「ターナ」の8つの部分からなり、それぞれ別々の監督によって作られています。話の内容もそれぞれ独立して見るようになっていて、話の中に最終的にロック・ナーを絡ませて統一感をとっているといった印象です。

学生時代は洋書店でアメリカン・コミックス漁ってた頃がありまして、その頃よく見かけていたコミック雑誌が「MAD」、「National Lampoon」そして「Heavy Metal」でした。「MAD」は英語が判らなくてもそこそこに判りやすいコミック誌で（『スター・ウォーズ』のパロディとかが載ってたりしました）、「National Lampoon」はテキストも多くコミックも独特の画調でシニカルで判りにくいコミックスでした。その「National Lampoon」の出版社がフランスのアダルト向けSFコミックス誌「メタル・ユルラン」（Metal Hurlant）をUSA向けに翻訳して出したものが「Heavy Metal」誌の始まりだということです。その後、その路線を引き継ぎながらもUSA独自の作家陣の連載の比重が大きくなり独自のアダルトSFコミックの世界を確立していました。当時の「HEVY METAL」誌を眺めると、日本のマンガ家の中にも（悪い意味ではなく）いろんな影響を受けた作家少なくないことが判ります。

その「HEVY METAL」誌そのものをそのまま映画にしたものがこのアニメーションです。ストーリーは二の次で映像インパクトと雰囲気重視、頻繁に出てくるアダルトでエロティックな表現など、まさに「HEVY METAL」誌ならではの世界がここでは展開されてます。独特なタッチとアニメーション技術のこなれてなさによる自主制作臭まで「HEVY METAL」誌っぽいのはご愛嬌かもしれませんけど（笑）。ちなみに、1999年には続編も作られました。

音楽にはブルー・オイスター・カルト、チープ・トリック、ジャーニー、ブラック・サバスなどが使われてますが、かなり添え物的です。ドナルド・フェイゲンの曲も使われてたりします。それ以外のかかなりの部分で流れるにロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラの演奏によるスコアを書いたのが、なんと必殺仕事人（笑）、エルマー・バーンスタインでした。

なお、音楽のヘヴィメタルを「ヘビメタ」と略すると、メタル・ファンの中には気分を害する人が少なくないのでご注意を。

【ヘヴィメタル (HEAVY METAL) 1981年 USA】

【エンニオ・モリコーネ】

映画音楽の作曲家としては非常に高名でまた大変多作家で、今なお現役として精力的に活躍しているのがこのエンニオ・モリコーネ（Ennio Morricone）でしょう。

1928年11月10日、イタリアのローマでトランペット奏者マリオの子として生まれたエンニオ・モリコーネは、家庭環境から小さい頃から音楽に親しみ、10歳の時にローマのサンタ・チェチーリア音楽院にトランペットを学ぶために入学します。そこの先生から作曲を学ぶように言われたエンニオ・モリコーネは和声法を学び、後にイタリアの現代音楽の巨匠ゴッフレード・ペトラッシに師事します。今は亡きゴッフレード・ペトラッシはその名前を冠した国際作曲コンクールがあるほどの作曲家で、イギリスのレイトンやピーター・マクスウェル・デーヴィス、ハンガリーのドゥルコー・ソルトやアンドラーシュ・セーレーシュ、ブルガリアのラザロフなどの弟子を輩出しています。こうして現代音楽の曲を書く傍らラジオの劇音楽や編曲をやっていたエンニオ・モリコーネの元に1960年頃から映画音楽の仕事が舞い込んでくるようになり、1964年に黒澤明の『用心棒』を翻案したマカロニ・ウスタン『荒野の用心棒』の映画音楽を担当したj ことによって、一気に世界的に名前が知られるようになります。その後の活躍はよく知られるとおりで、数え切れないほどの映画音楽を担当。そのエンニオ・モリコーネならではの官能的なメロディは多くのファンを魅了して、今も現役で活動しています。日本のファンには2004年にテレビドラマの『武蔵 MUSASHI』の音楽を担当したことも、耳新しいと思います。現在までにエンニオ・モリコーネがアカデミー賞にノミネートまではいくものの、受賞までは至っていないのも七不思議のひとつだと言われています（あとの6つは知りませんが（笑））。

思い出深い曲は、まずやはり『荒野の用心棒』ですね。独特の雰囲気を作るさすらいの口笛をはじめとして、ぞくぞくしてくるような音楽でした。続く『夕陽のガンマン』、『続・夕陽のガンマン／地獄の決斗』も含めてマカロニ・ウスタンを強く印象づけたのがエンニオ・モリコーネの音楽でした。

映画自体はあまり好きではありませんでしたが、『エーゲ海に捧ぐ』のテーマもとても印象的な音楽でした。この頃はまだ映画音楽番組でも確かエンリオ・モリコーネと呼ばれていたように記憶しています。

『ニュー・シネマ・パラダイス』や『海の上のピアニスト』もモリコーネらしい上品さが出た映画共々雰囲気の実にいい作品でした。私自身はエンニオ・モリコーネにはどっぷりとは浸かりませんが、忘れがたい作曲家のひとりです。

・映画メモ『海の上のピアニスト』

盆地育ちの山猿だった私には、海というものはあこがれのひとつでした。「ずっとここに住んでいたら、死ぬまでに海を見ることなんてあるのかな？」と思ったものです。

1900年、欧州からニューヨークへと多くの移民たちを運ぶ豪華客船ヴァージニアン号の中で、機関士のダニー(ビル・ナン)はダンス・ホールに置かれているピアノの上に置き去りにされた赤ん坊を見つけます。ダニーはその子をその歳にちなんで1900 (Nineteen hundred)と名付けて育てます。やがてダニーは不慮の事故で死んでしまいますが、1900はその後もずっと船の中で育つことになります。そんなある日、船内のダンスホールでの音楽に魅了された1900はピアノに興味を持って弾き始めますが、その天性の才能もあってか見る見るうちに上達、やがてその船ではピアニストとして弾きはじめることになります。その間も一度も船を下りることなくずっと暮らす1900でしたが…………。

冒頭、トランペッターであるマックス(プルート・テイラー・ヴァンス)が現れて語り始める物語として始まりますが、この導入部に引き込まれてしまいました。疲れたバンドマンといった風貌、訥々とした語り口が雰囲気たっぷりです。そして数奇な一生を過ごしたピアニストの物語が語られるのですから、身を乗り出したくなるというものです。

1900の一生については正直リアルな話として見るには突っ込み所が多いような話なのですが、老トランペッターによる摩訶不思議な運命を背負った不器用な男についての大人の童話として聞けば、しみじみとする映画で私は結構好きです。各エピソードとそれを見せる映像が美しく、呆けたように画面を見ていました。

エンニオ・モリコーネの音楽もとても印象的でしたね。逆にこういう映画でしたらエンニオ・モリコーネが一番ぴったりなのかもしれません。

【海の上のピアニスト (The Legend of 1900) 1999年 イタリア=USA】

【ジョニー・マンデル】

映画音楽の作曲家としてはあまり名前も知られていないのか、なかなか作品集も見かけないジョニー・マンデル（Johnny Mandel）ですが、メロディ・メーカーであり編曲家としても素晴らしい人です。

1925年11月23日、USAはニューヨークで生まれたジョニー・マンデルは12歳でトランペットを始め19歳の時にトロンボーンをやるようになって、ジュリアード音楽院に学び、ボイド・レイバーン・オーケストラ、ジミー・ドーシー・オーケストラ、バディー・リッチ、ウディ・ハーマン、アーティー・ショー（先日お亡くなりになってしまいました）等のアレンジを手がけるようになります。1949年にラジオ放送局WMGMで音楽部門を担当して劇音楽の作曲を経験、1950年から1951年にはTVを手がけ、1953年にトロンボーンと編曲担当として変革期のカウント・ベイシー・オーケストラに参加、『ダンス・セッション』等のアルバムを出します。1954年にロス・アンジェルズに移ったジョニー・マンデルはジャズやラスベガス・ショーのための音楽を書きながらハリウッド映画の音楽を担当するようになります。最近はほとんど映画音楽の仕事はやっておらず、シャーリー・ホーンやマンハッタン・トランスファー、そしてダイアナ・クラールのアルバムのアレンジャーとして活躍しています。

ちなみに、いとこのマイルス・グッドマン（Miles Goodman／1949-1996）も映画音楽の作曲家で『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』（1986）、『ラ・バンバ』（1987）、『天使にラブソングを2』（1993）、『フットルース』（1984）などを手がけています。

ジョニー・マンデルの曲で一番有名なのは『いそしぎ』の主題歌である「The Shadow of Your Smile」でしょう。この曲はアカデミー賞を受賞し、またジャズのスタンダードとして多くの人に愛されています。スローなナンバーとしても、またボサ・ノバとしても演奏されることが多く、スタンダードの中でも好きな曲のひとつです。キーボードで弾くとコード進行の落ち方がとても心地よい曲です。

主題歌の印象では『M★A★S★H（マッシュ）』も強く残っています。劇中でも歌われるしっとりとした「Suicide Is Painless」は後のTVシリーズではインストゥルメンタルのテーマ曲にもなっています。この曲はジャズのビル・エバンスやマーク・コーエンも「THEME FROM MASH」として採り上げています。ビル・エバンスのスコアは昔キーボード・マガジンに載っていて、学生の頃、この曲と「カバティーナ」を演奏したこともありました。

私が密かに映画音楽の中でもベスト10に入れたい曲が『午後の曳航』のテーマ曲です。触るとこわれそうに思えるような繊細で静かな曲で、ピアノのメロディと対旋律をなす高音のストリングスが澄み切った音を奏でる佳曲です。ジョニー・マンデルのストリングス・アレンジの手法は、

現在のマンハッタン・トランスファーのクリスマス・アルバムやダイアン・クラールでのアルバムでも生きていますね。この曲は大昔にエア・チェックしたものしか持っていないのですが、海外サイトなどでずっと捜してもどうもCD化された様子がありません。私的な名曲だけにぜひCDで聴きたい曲です。

ジェリー・マリガンも入っているジャズ・コンボによる『私は死にたくない』も印象的なサウンド・トラックです。ボンゴのロールに始まるサスペンス・タッチのテーマ曲を始めとしてジャズ・アルバムとしても楽しめるサウンド・トラックでした。

MASHとはMobile Army Surgical Hospitalの略。日本語では米陸軍移動野戦外科病院のことだそうです。

1950年初頭、朝鮮戦争もたけなわの頃、現地の最前線にある第4077米陸軍移動野戦外科病院に、ホークアイ・ピアス大尉（ドナルド・サザーランド）、デューク大尉（トム・スケリット）、トラッパー・ジョン（エリオット・グールド）の3人の軍医が着任します。3人とも医者としては一流の腕を持ちますが、揃いも揃って破天荒な悪戯好き。レーダーことオリリー伍長(ゲイリー・バーゴフ)も巻き込んで、規律を重んじる軍隊の中であるにもかかわらず、次から次へと騒ぎを起こします……。

ロバート・アルトマン監督による1970年の映画です。1960年代初頭に始まったベトナム戦争が泥沼化していた時期。映画好きの両親を持っていたので公開時に名前は知ってはいたものの、私が映画を見たのは後の話。当時は岩国に住んでいたのですが、学校の窓は2重ガラス。毎日、基地から発進する戦闘機がどこかに飛んでいました。

この映画、登場人物がとても魅力的でした。普段は好きなだけおちゃらけるけど、やる時ややるぜ（もちろん、やられたらやり返す）ってな感じで、主役の3人が実にいい味を出してます。普段のドタバタと、間に何度か差し挟まれる手術シーンとの対比が絶妙です。騒動に巻き込まれる連中との描き分けもお見事。

前線に仮設された野戦病院で日本語のヒット曲（笑）が流れたり、ゴルフをしに（笑）日本に行くぐらいで、あまり朝鮮戦争らしさを感じさせる描写はありません。戦地であれば他のどこかの場所に置き換えても成り立つ映画だったりします。

音楽は『いそしぎ』のテーマ曲でも有名なジョニー・マンデル。映画の中でも歌われていて「マッシュのテーマ」として知られている「Suicide Is Painless」は心に染みる名曲で、ビル・エバンスやマーク・コーエンなども「Thema from MASH」としてこの曲を採り上げています。

とかなんとか書きながら、反戦、反骨、ブラック・ジョークと、この映画に関してはいろいろと書いただけ野暮かなとも思わせてくれます。なんせこの映画自身の語り口が実に見事で、映画を見るのが一番ですし（と言うと、他の映画も同じことになって全部手抜きレビューになっちゃいそうですね（笑））。

この『M★A★S★H』は1972年にテレビ・シリーズ化されて、日本でも放映されていました。テーマ曲は劇中でも使われているあの曲のインストゥルメンタル・バージョン。これがまた大変面白いシリーズで、長寿シリーズとなりました。本国ではこのテレビ・シリーズのDVDも格安

で発売されていますのですが、今のところ日本で発売予定がなさそうなのが残念です。一昨年、FOXのサイトのアンケートに、DVDで出してほしいテレビ・シリーズという項目の選択肢にあったので、思わずチェックボックスの項目でキーボードを強く押したのですが、ちょっと押す力が足りなかったのかもしれませんが（笑）。まだ希望は捨てていませんけど、出てくれないかなあ。

「今日の映画は『マッシュ』でした」

【M★A★S★H マッシュ (M★A★S★H) 1970年 USA】

【ニーノ・ロータ】

イタリア生まれの偉大な映画音楽作曲家として名高いといえば、ニーノ・ロータ（Nino Rota）がまず思い浮かぶのではないのでしょうか。

1911年12月3日、イタリアのミラノで生まれたニーノ・ロータは作曲家でピアニストだった祖父と母親の影響で幼い頃から既に音楽の才能が芽生えます。8歳で作曲を始めて11歳でオラトリオを発表して欧米にセンセーションを巻き起こして神童ぶりをあらわします。1923年、ミラノ音楽院に入学し、1930年にローマのアカデミア・サンタ・チェチーリアを卒業。ロマン派あたりに影響を受けたような交響曲やいろんな楽器の協奏曲を手がけるニーノ・ロータでしたが、祖父の友人である指揮者アルトゥーロ・トスカニーニの勧めでUSAに渡ります。1933年頃から映画のためにの音楽を書きはじめ、1937年に和声学科作曲教師としてバリ音楽学校で教鞭を振るい、1950年『魔の山』のヒットにより名前を知られるようになりました。その後、数多くの映画音楽で知られ巨匠の名を不動にしましたし、フェデリコ・フェリーニ監督とのコンビはつとに有名です。『オーケストラ・リハーサル』の映画音楽を最後に1979年4月10日にローマで亡くなりました。

ニーノ・ロータといえば、まずは美しいメロディを思い浮かべる人が多いでしょう。実際、Serious Music（という書き方は好きではないのですが、便宜上）を手がけていた頃の曲は交響曲第1番～第3番やピアノ協奏曲などを聴いたことがあります。近代的な和声を使っている部分もありますが、極めて前世紀的なオーソドックスな作りになっています。イタリアでは私の大好きなリムスキー＝コルサコフの弟子であるレスピーギ（1879～1936）の方が古いのに、音楽は新しいように思えるぐらいです。20世紀の作曲家としては社会主義的リアリズム以外は禁止だった国を除けば、これだけ極めて古典的な手法を前面に押し出すことはかの分野ではあまり多くは知りません。岩城宏之が以前イタリアで武満徹の曲を演奏した時に生タマゴやトマトを投げつけられたそうですが、まさかイタリア人気質ということはないでしょう（笑）。ある意味ではこの時代に映画音楽に進んだのは正解だったのかもしれない。映画音楽の中にも一貫してこのメロディとそれを支えるアレンジは生きています。ムーティがミラノ・スカラ座フィルを振った『ニーノ・ロータ映画音楽集』というものがありますが、ここでもそれを堪能することができます。

ニーノ・ロータの曲だとまず意識して聴いたのは『ロミオとジュリエット』でした。よくテーマが流れるセリフ部分と一緒に聴く機会が多かったように思えます。

『ナイル殺人事件』もエジプトのまぶしい太陽を浴びた色彩感あふれる画面に、華麗なオーケストラの音楽が印象的でした。多分、サンディ・オニールの「ミステリー・ナイル」は違うのでしょうか。

遺作となった『オーケストラ・リハーサル』も題材が題材だけに、音楽と映像がよく調和してい

ました。いろんな楽器をフィーチャーするような形で、場面に表情付けをしています。

『ゴッド・ファーザー』の愛のテーマは、言うまでもなく誰でも知っているメロディになっていますね。なんか中途半端に終わる車のクラクションに使われているのは気になりますが（苦笑）。

今なお音楽がずっと生き続けている作曲家の一人です。

・映画メモ『ナイル殺人事件』

灰色の脳細胞を働かせて難事件を解決するアガサ・クリスティの生み出した探偵、エルキュール・ポアロを主人公にした作品は数多くありますが、その中のひとつ「ナイルに死す」を映画化したのが『Death on the Nile』＝『ナイル殺人事件』。ミア・ファロー、ジョージ・ケネディ、オリヴィア・ハッセーなど豪華キャストによる異国情緒溢れる映画です。

莫大な遺産を相続したリネット(ロイス・チャイルズ)は、親友のジャクリーン(ミア・ファロー)から彼女の恋人のサイモン(サイモン・マッコークインデール)と会います。ところが、リネットは間もなくサイモンと婚約を発表、エジプトへハネムーンに旅立ちます。その後ろにつきまとう影はジャクリーン。豪華客船に乗り組んだリネットとサイモンですが、ジャクリーンの他にも叔父のアンドリュー(ジョージ・ケネディ)や作家のサロメ(アンジェラ・ランズベリー)とその娘のロザリー(オリヴィア・ハッセー)、医師のベスナー(ジャック・ウォーデン)に看護婦のミス・パウアーズ(マギー・スミス)、メイドのルーズ(ジェーン・バーキン)、学生ファーガスン(ジョン・フィンチ)、バン・スカイラー(ベティ・デイヴィス)など、リネットといわく因縁が少なからずある人々が偶然なのか乗り組んでいました。私立探偵ポアロ(ピーター・ユスチノフ)もこの船に乗り合わせていたのですが、その中、ピストルで撃ち抜かれたリネットが死体となって発見されます。枕元にはJの血文字。真っ先に疑われたジャクリーンにはアリバイがありました。ポアロは旧友レイス大佐(デイヴィッド・ニーヴン)と共に、殺人犯を探し始めますがさらに次の犠牲者が……。

俳優も豪華であれば舞台も異国情緒あふれて、スクリーンいっぱいドラマを感じた映画でした。うちの地方では、確かアニメーション映画第一作目の『ルパン三世』と同時上映でした。冒頭の水面を映したオープニング・タイトルから印象的でした。ニーノ・ロータの壮大なテーマにワクワクした憶えがあります。推理物としては普通に面白いかなと思ったのですが、ドラマと演技が楽しめてなんといってもラストの結末。ミア・ファロー渾身の演技と共にあのシーンは忘れられない場面になっています。

私はエルキュール・ポアロの姿を映画で見たのはこの映画が初めてでしたので、これ以降エルキュール・ポアロ＝ピーター・ユスチノフといったイメージが焼きついてしまいましたね。そういえば洗面台のコブラのシーン。あれは映画であると判っていても、何度見てもすごくドキドキしてしまいます。毒ヘビが苦手なのもあるのでしょうか。また「再現シーン」が印象的だったのは、私にとってはこの映画が初めてかもしれません。

日本では映画の中では流れないキャンペーン・イメージ・ソング「ミステリー・ナイル」は、確か上映当時のヒットチャートに食い込むぐらいよくラジオから流れていたと思います。探したらうちにもEP盤があるはず。歌っていたのはサンディ・オニール。後に細野晴臣プロデュース、イエロー・マジック・オーケストラ参加のアルバム『イーティン・プレジャー』を出したサンディです。そのまた後には夕焼け楽団の久保田真琴と一緒にサンディ＆サンセッツを結成し

たのはご存知の通り。

【ナイル殺人事件（DEATH ON THE NILE） 1978年 USA】

【バーナード・ハーマン】

バーナード・ハーマン（Bernard Herrmann）も20世紀の中盤に活躍をして、数々の名曲を作った思い出深い作曲家です。

1911年6月29日、ニューヨーク生まれのハーマンは特待生としてジュリアード音楽院に学んで22歳でCBSに入社、翌年CBS管弦楽団の常任指揮者になります。この頃はアイヴス（この人も面白い経歴を持った作曲家ですが）などの作品を初演したりしたとのこと。同時にハーマン自身も現代曲を書きためていました。

1936年にオーソン・ウェルズのラジオ・ドラマ「マーキュリー放送劇場」の音楽を担当したことが大きな転機となり、オーソン・ウェルズに付き従う形で劇伴音楽の世界に入っていきます。。1938年のハロウィーン前夜に放送されて大パニックをおこしたというあのH. G. ウェルズ原作のSFドラマ『宇宙戦争』の事件の時も、バーナード・ハーマンが音楽を担当していたものでした。その後、オーソン・ウェルズの『市民ケーン』を皮切りに映画音楽の世界に入って、『サイコ』、『鳥』、『地球の静止する日』、『シンドバッド7回目の航海』などの作品を手がけました。1975年12月24日、クリスマス・イブに心臓発作で亡くなったハーマンの遺作は1976年に上映された『タクシー・ドライバー』でした。

現代曲を振り自ら作っていたこともあって、古典の管弦楽法にあまりとらわれないアレンジがハーマンの持ち味でした。またテルミンなどの新しい楽器も意欲的に取り入れて、『地球の静止する日』で使っていたりします。

遺作となった『タクシー・ドライバー』ですが、ラジオでよくかかる『タクシー・ドライバーのテーマ』のバージョンはフェンダー・ローズのイントロにはじまり、ニューヨークの夜を思わせるエモーショナルなトム・スコットのサクスが印象深い作品です。映画の中では3拍子のスローなアレンジが印象的でした。

また『華氏451』での音楽も印象が強いです。現代音楽に造詣が深いハーマンらしく、フランソワ・トリュフォーの硬質な映像にマッチした独特の音楽を展開しています。後にこのサウンド・トラックを『弦楽器とハープと打楽器のための華氏451組曲』という形で発表していますが、弦を生かした変幻自在な編曲で美しくも不安を想起させる世界を作り上げています。エサ=ペッカ・サロネンがロス=アンジェルス・フィルを振った『バーナード・ハーマン 映画音楽集』というアルバムにもこの組曲や『知りすぎていた男 序曲』、『タクシー・ドライバー オーケストラのためのナイト・ピース』が収められています。

偉大な作曲家である割に名前に触れられることが少ない人ではありますが、映画音楽史に確実に

刻まれる人の一人だと思います。

今年ももう残すところ50日となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今年の干支はトリだということは1月も過ぎないうちに忘れてしまいました、1年が経つのも早いものです。

突然舞い降りた1羽のカモネが、人の額をつついて飛び去ったのを発端に、村では鳥の大群が飛ぶのを見たりと不思議なことがおこりはじめます。小学校の校庭では数多くのカモメが生徒を襲撃し、暖炉の煙突から無数の小鳥が舞い込んで来たり。そしてついには鳥によって殺された人が出てきます。次第に鳥の数は増えていって村を覆いつくし、思いもよらない知恵で人を襲っていきますが、なんとかしようとする人々はだんだんと追い詰められていきます……。

アルフレッド・ヒッチコックの中でも特に有名な映画です。とにかく人とは比べ物にならないほどの非力な鳥が人を襲ってじわじわと追いつけていくという話ですから、意外性と思わぬ怖さがあります。私は小学校低学年の頃あたりにテレビで見て、それ以来鳥が怖くて怖くて近寄れませんでした。クリスマスに七面鳥（じゃなくて多分チキン）を食べることにはすっかり忘れてましたけど（笑）。鳥自身、ああいう目ですから、何を考えているか判らない怖さもあります。特に鳥がだんだんと増えてくるのにはまたぞっとするのを感じます。このあたり、ヒッチコックならではの演出に惹き込まれてしまいます。ガソリン・スタンドのシーンや、ジャングル・ジムのシーン、そして息詰まるエンディングは忘れられませんね。

そういえば昔道を歩いていた時に、大きなカラスにいきなり頭をつかまれて飛び去られた時には肝をつぶしましたね（苦笑）。おいしそうに見えたのかも知れませんが（笑）、いくら腹が減ったからといって太った人間を持ち上げようとは何を血迷ったものなのか。

ちなみにこのblogは「活動映像の街」。の三歩歩くと忘れる「小鳥頭同盟」参加しています。

追記：『鳥』と聞いて『バーバーレラ』を思い出した私は悪い子でしょうか（笑）。

【鳥（THE BIRDS） 1963年 USA】

・映画メモ『地球の静止する日』

1951年に作られたロバート・ワイズ監督のSF映画の古典であり、同時に金字塔とも言える作品です。

1950年頃、宇宙空間から地球に向かって信じられない高速で空飛ぶ円盤が飛来してきます。銀色に光るその未知の宇宙船はワシントンの広場に着陸。警戒する軍隊が見守る中、宇宙船の中から光る服とヘルメットを装着した宇宙人クラトゥ(マイケル・レニー)が出てきます。ヘルメットを取ったクラトゥは地球人男性と同じような姿をし、英語で、他の惑星から来て危害を加えることはないと説明しますが、兵のひとりが発砲。クラトゥは重症を追って倒れてしまいます。すると宇宙船の中から巨大なロボット・ゴートが現われて、軍隊の持つ武器を次々に消却していききました。驚く地球人。クラトゥはロボットを押し止め、近くの病院に運ばれます。そこでクラトゥは大統領秘書に、地球人がこのまま争いを続けていればやがて他の星に災いを及ぼしかねないと見られて他の星からの攻撃を受けることになることになると、各国の指導者が揃った場で忠告したいと申し出ます。しかし世界が東西対立の冷戦状態にあり、調整は困難を極めます……。

この当時、宇宙人が出てくる映画と言うと侵略してきてドンパチが始まる映画が多かったりしますが、この映画はそれらとは一線を画していて、友好的であるようにと諭すためにやってきます。

この時期は第二次世界大戦が終結してから6年しか経っていないのですが、終戦直後からの東西対立が激化してきた頃です。1947年のトルーマン＝ドクトリンとマーシャル＝プラン、ドイツ分割、1948年のコメコン設立とチェコ革命、ベルリン封鎖、1950年の朝鮮戦争勃発と、世界は新たな世界戦争の影を感じざるをえなくなってきた時代になります。それと平行して1949年にはソビエト連邦が秘密裡に原爆実験成功したことが公に知られ、1951年頭には水爆保有命令を発表して開発に着手します。

1950年の朝鮮戦争では11月にマッカーサーが状況によっては原爆の使用を示唆、それを受けてトルーマン大統領は「米国は朝鮮における軍事的情勢に対応するため、原爆を含めすべての軍事力を行使する。自分はマッカーサー元帥を強力に支持する」と発言。「ストックホルム・アピール」署名運動により、世界で5億の人々が署名し、また直後にロンドンでアトリー英首相、プレヴァン仏首相の緊急会談が生まれ、マッカーサーに原爆を使用させないという合意事項を持ってアトリー首相がトルーマン大統領と交渉をします。

同時にこの時期は共和党のジョセフ・マッカーシーらが中心となって組織された委員会HUACによって、「赤狩り」が大々的に行われました。この委員会においては有名人を召喚することが世間に対して大きなアピールになるので、ハリウッド映画界は格好の標的になったのです。時代背景もありマス・ヒステリーの世相の中で、反戦思想を持っているというだけで召喚されるこの委員

会は恐れられ、誤解や密告などもあって事実上言論の弾圧が強い時代で、またチャールズ・チャップリンなど多くの方がハリウッドを追放されました。ちなみにリチャード・ニクソン下院議員がこの委員会に属していたことは、よく知られています。

この映画はこういう時代に作られました。決して派手さはないのですが、サスペンス仕立てにもなっていて見所がありますし、平和を願うメッセージが込められています。空飛ぶ円盤、宇宙服、巨大ロボット・ゴートなど、デザインも大変よく、未来感覚あふれる造型でした。

音楽はバーナード・ハーマンで、テルミンを使っていることでも有名です。映画『テルミン』でもこの映画のシーンが紹介されていました。

ちなみにリンゴ・スターの1974年のアルバム、『Goodnight Vienna』のLPジャケットのデザインは、この映画をモチーフにしています。

【地球の静止する日(The Day the Earth Stood Still) 1951年 USA】

小さい頃は転校が多く急には新しい友人に馴染めなかったもので、内向的な私にとっては本が大事な友達でした。その中でもSFには特にハマってしまいまして、大学になった頃にはSF研究会がなかったので古典の先生を顧問にお願いして設立したぐらいです。当時はなけなしの小遣いを握り締めて、早川文庫や創元文庫の目録をなめるように読んで、1時間も2時間も悩んでレジに本を持っていったものでした。

SFの中でもよく読んだ作家のひとりにレイ・ブラッドベリがいます。そのブラッドベリの長編をフランソワ・トリュフォー監督が映画化したのが、『華氏451』です（原題：『FAHRENHEIT451』）。華氏という単位は一般にはなじみがないかもしれませんが、G.D.ファーレンハイトが1717年ごろに製作した水銀温度計が元で、水・氷・食塩を混ぜて得られる温度を0度、体温を96度と基準とした温度です。もちろん体温は変動しますから今ではもっと厳密な測定で値を決めています。そして1942年にA.セルシウスが氷の融点を0度、水の沸点を100度とする摂氏温度目盛(セルシウス度)を提唱して、これが現在日本で使われている温度の単位です。USAで使われている単位は未だにヤード＝ポンド法が主流で、温度も華氏が使われているそうです。

で華氏451度は摂氏でいえば約233度、紙が発火する温度のことです。時代設定は当時からみた近未来。その世界ではすべてテレビからの情報でしか知識を得ることが出来ず、本を読むことはおろか所持することも一切禁止。もし本を所持していることが見つかりと消防士が駆けつけて全ての本は没収され、焼かれることとなります。自由な時間に自由なものを読める次世代に知識を伝える本という選択肢を閉ざし受動的な情報しか与えない社会で、本に興味をもった昇進前の消防士・モンターグの行動を描いています。

原作が書かれたのが50年代、作者が持っていた危機感はある部分では今現実になっているといえるし、この先でますますこの危機が進行していかないという保証はありません。50年経った今も現在のテーマとして感じられる作品です。

なにせ映画が撮られたのが60年代ですので、近未来の風景は今ではいささかチャチに見えます。昔、少年ドラマシリーズで見たようなテイストに近い風景です。ただトリュフォー監督の美学なのか、端正できれいな映像が印象に残ります。中でも森の中のシーン、特にラストの雪の風景が心に残ります。それをバーナード・ハーマンの弦楽を中心とした新ウィーン楽派を思わせる繊細な曲がしっかりと支えています。

しかし消防士が本を燃やしてまわるなんて皮肉というか、火消しに登板したクローザーが連打されて火だるま劇場になるぐらい腹立たしいことですか（苦笑）。

【華氏451度 (FAHRENHEIT451) 1966年 UK／フランス】

【関光夫】

映画の音楽は、私にとって映画を見る時に俳優や監督以上に気になる存在です。それはただ私が音楽をやっているからだけではなくて、映画音楽自体とても好きなジャンルのひとつなのも大きい理由です。

そして、その映画音楽が好きなきっかけは、1970年代から1980年代に聴いたNHK-FMでの関光夫の映画音楽番組でした。この項目の関光夫のみ、映画音楽作曲家ではありません。でも、私にとっては映画音楽にはまるきっかけを作ってくれた尊敬するラジオのDJです。

当時は今みたいにインターネットの「イ」の字も存在しないし、コンシューマー向けのビデオテープの存在もなければ、レンタル・レコードもない時代です。映画音楽の情報を知るには映画を見に行くか、TVで放映されるのを待つか、映画の雑誌を買うか、レコードを買うかしかありませんでした。そんな中で、数少ないFMでの映画音楽番組は砂漠の中の一滴水同然で、文字通りむさぼるように聴いたものです。

番組で関光夫は静かに深い声で映画の解説と曲の解説をさらっと話してくれました。決して喋りすぎることがなく、それでいて印象に残る言葉を選んでいたように思います。そしてその分、曲をたっぷり聞かせてくれました。話題の映画あり、テーマに沿った特集あり、リクエスト特集ありと、毎週毎週番組の時間を楽しみにしていました。後にラジオ・カセット・テープレコーダーを買ってもらった時は安いテープしか変えなかったのですが、番組ごと録音して何度も何度も繰り返し聴いたものです。

一時期は平日の夕方に放送していた「軽音楽をあなたに」でも、月に一回映画音楽特集があった時期があるように思います。そういった番組もいつしか時代の流れの中でだんだん無くなってしまいました。関光夫自身は1998年10月3日に76歳でお亡くなりになっています。

記憶違いでなければ、番組のテーマ曲が一時期ヘンリー・マンシーニの「いくたびか美しく燃え」の頃があったような気がするんです。家にあるマンシーニの曲集を開いてこの曲のコードを押さえると、今でも時々関光夫の番組を思い出します。

お気に入りの音楽映画 1 2

サルサ！

サルサ(salsa)とはスペイン語でソースのこと。言葉のニュアンスとしてはクロスオーバー、フュージョンに近いでしょうか。キューバのソングから発展したラテン音楽の一ジャンルとして多くの人に愛されています。

フランスのパリで行われているクラシック・ピアノの音楽コンクール。参加者の一人レミ(ヴァンサン・ルクール)は奨学金がかかったコンクールであるにもかかわらず、課題曲の演奏を途中でやめてモントゥーノを弾き始めてしまいます。クラシックと訣別したレミは大好きでたまらないサルサにどっぷりとつかろうとしますが、ムラータと違い肌の色が白いために逆に偏見の目でみられることに。やがてレミはキューバ人の友人からキューバ訛りを教わり、肌の色を褐色にして「モンゴ」と名乗りサルサダンスのレッスンを始めます。そして祖母の薦めでそこへやってきたナタリー(クリスティアンヌ・グウ)と恋に落ちます……。

もう涙腺がゆるいもんで、映画館で見たキューバでのラスト・シーンでは分かっているのに思わず心の中で「わー！」と叫んで不覚にも涙がこぼれてしまいました。なんてことがないありがちなラストなんですけど、「サルサこそ最高！」と歌うシエラ・マエストラの音楽がこの上なく素晴らしい！自分の中では、ステージと観客がサルサで一体となった背景をバックにして恋の1ページを刻んだ名シーンだと思います。監督が一番見せたかったのも、きっとこの最後のシーンではないでしょうか。

私がサルサを知ったのは、NHK-FMで日曜日の午前中にやっていた世界の音楽の第一部で、竹村淳の放送を聴いていたのがきっかけです。サルサ特集でファニア・オールスターズの曲なんかがかかっているのをエア・チェックして、その後、日本のオルケスタ・デル・ソルのレコード「ハラジユク・ライブ」なんかを聴いてはまっていました。オルケスタ・ア・ラ・ヘンテというサルサのオルケスタに5年ほど在籍して、ツク・バンバンというグループの結成に立ち会ったこともあって、サルサには多くのいろんな思い出があります。それだけにサルサが好きで好きでたまらないというレミの気持ちはすごく分かるものがありました。

この映画ではサルサに対する感情の描き方がうまいですね。いくらピアノがうまいと言っても、ピアノのモントゥーノ（サルサ特有のピアノのシーケンス・フレーズ）のフレーズだけを弾くにしてもかなりの努力が必要ですし、その上リズムが出せるようになるにはよっぽど好きでないとできないことです。また、キューバ人になりたいという憧憬は、音楽にどっぷりハマった人間には痛いほどわかる感情ではないでしょうか。ミンストレル・ショーしかり、ブルースにはまって黒人になりたいと思う人しかり。ナット・ヘンホフの「ジャズ・カントリー」という素晴らしい小説がありますが、そこでも主人公はジャズにハマって黒人になりたいと思う場面もありますし、久石譲は自分の大好きなクインシー・ジョーンズについて「ブラック・コンテンポラリーの原点を持っていていつでもそこに帰れるのがうらやましい」と語っていたりします。その一方でド

イツや日本からも世界に通用するサルサのオルケスタが出てきたりしています。

「なぜいつもハッピーでいられる？」

「幸せだと思うのか？いいか、レミ。キューバ人になりたいのなら苦しみは笑いで隠せ」という会話がすごく印象に残っています。

また、ナタリーの祖母の恋の話もじーんと来ましたね。娘に踊りを教えるシーンとか、とても魅力的なおばあちゃんに描かれていきます。昔の恋人と再会するのに部屋の入り口にあった鏡をじっと見つめてしまう場面が切ないです。

レミがバンドにピアノで加入するのが決まってチューチョの家で祝杯をあげるシーンが好きです。みんなで意気投合して歌う場面。集まった時にみなで一緒に歌える歌が「六甲嵐」（しかも阪神ファン限定）しかない人間にとって、こういう共有の宝があるというのはすごくうらやましいです。

傑作なのが、イビキとハンモックのきしみと隣の部屋でのニャンニャンを聴きながら、新曲を思いつくところ。いかにもありそうです（笑）。またピアノで曲を作りながらリハーサルのシーンになって、クラブでの演奏シーンに流れていくところがスムーズで、「わかっているなあ」と感心させられることしきり。

ちなみに、『サルサ／灼熱のふたり』というのは1988年のまた別の映画で、またの機会に。

【サルサ！（salsa）1999年 フランス・スペイン】

マンボ・キングス わが心のマリア

1950年代は世界的にマンボが流行っていたことがあります。俗に言う、マンボ・ブームでキューバに端を発したこのダンス音楽は文字通り当時は世界を席卷しました。

1953年のこと、歌手の兄セサル・カスティージョ(アーマンド・アサンテ)とトランペット吹きで作曲をこなす弟ネスター・カスティージョ(アントニオ・バンデラス)の兄弟は、キューバからニューヨークへと移住します。彼らは肉屋で働きながら職場の仲間とマンボ・キングスというラテン・バンドを結成して、小さなクラブから演奏活動を始めます。次第に評判が評判を呼んで大きなクラブでも成功を収めるようになるマンボ・キングスですが、ニューヨークのナイトクラブ界のボスの誘いを断ったために、仕事を干され一転して小さなパーティや結婚式などでの活動しかできなくなります。そんなある日、場末のクラブ・ババラーに出演中にラテン界の大スターであるデジ・アーナス(デシ・アルナズ)に認められて、彼の人気テレビ番組『ルーシー・ショー』に出演。一気にスター街道を歩み始めます。順風満帆の状況の中、セサルは楽園のように思うUSAでの派手な生活を楽しんで、ネスターはキューバのことを忘れるようにドロレス(マルーシユカ・デートメルス)と結婚しますが、次第に兄弟は対立していくようになります……。

ラテン好きにはたまらない映画でした。封切り当時は上映館数も少なくすぐに打ち切りになったのですが、仲間うちで誘い合わせて見に行きました。まずは、ティト・プエンテとセリア・クルスというラテン音楽の巨星2人が出演しているのが嬉しかったですね。どちらも素のままといった感じで出ていましたし、「ラン・カン・カン」でティト・プエンテのいかにもといったティンバレス・ソロが映画の始めの方で炸裂します。これだけでも当時見に行った甲斐があったというか(笑)。

主題歌の「わが心のマリア (Beautiful Maria of My Soul)」はしっとりとしたボレー口で、確かアカデミー作曲賞のノミネートまで行ったと思います。いかにもといったボレー口ではありますが、この曲がラストへ続く映画のキーになっています。

全体にラテンの熱気、ラテン・ファミリアの移住による想いと絆などが色濃く出てた作品でした。そういえば、この時ハリウッド・デビューだったアントニオ・バンデラスは今や大スターですね。

【マンボ・キングス わが心のマリア(The Mambo Kings) 1992年 USA】

ブルース・ブラザーズ

ダン・エイクロイドと今は亡きジョン・ベルーシの凸凹コンビ、ブルース・ブラザーズを世界に知らしめた映画です。

刑期を終えて刑務所の門を出たジェイク(ジョン・ベルーシ)を、孤児院で一緒に過ごした弟分のエルウッド(ダン・エイクロイド)が迎えに来ていました。孤児院でシスターに会った二人は税金を払うのに5000ドルが必要なのにお金が無くて払えないことを聞きつけます。お世話になった孤児院のためにどうすればいいか迷う二人は教会で神の啓示を受けて、昔のバンドを再結成してお金を稼ぐことを思いつきます。早速昔のメンバーに会い、説得してなだめすかしてバンドを組みますが警察やネオ・ナチとトラブルを起こしてマークされたり、カントリー・バンドの恨みを買ったり、謎の女(キャリー・フィッシャー)につけ狙われたりします。そうこうしている間にホールでのコンサートの日が来ました……。

USAの人気テレビ番組『サタデー・ナイト・ライブ』に出て歌と踊りとギャグで大人気をはくし、アルバムも売れに売れたブルース・ブラザーズが主演の映画です。出演者も豪華でジェームズ・ブラウン、キャブ・キャロウェイ、レイ・チャールズ、アレサ・フランクリンと名だたる黒人ミュージシャンが神父や楽器屋の店長などのいろいろな役で参加しています。オールド・ファン向けにはにはツイギーのカメオ出演もあつたりします。演奏は当時のブルース・ブラザーズのメンバーがそのまま出ている、ブッカー・T & The MG'sのスティーヴ・クロッパーやドナルド・ダック・ダンを拝むことができます。

音楽はもちろん悪くあろうはずもなく、ライブのシーンのみならず、教会で、楽器屋でこれぞエンターテインメントといった感じで繰りひろげられます。酒場で演奏する「ローハイド」のスティーヴ・クロッパーのチョーキング・ソロなんかは心臓の裏側をくすぐられているようで心地よい響きです。

また、私はこの映画の教会シーンで初めてゴスペルというものを知りました。一応幼い頃はカソリック系の幼稚園に通っていたりしたので、教会と言うのは静かに賛美歌を歌うような場所だと思っていたのですが、パワフルな音楽シーンを目の当たりにして大変衝撃的でした。

ストーリーも、いろいろな関係に追われっぱなしのアクションが息をつかせませんでした。中でも謎の女、キャリー・レイア姫・フィッシャーがどんなめちゃくちゃな攻撃をかけてきても、マンシーニの「ピーターガン」のテーマと共に瓦礫の中から出てくるオヤクソクは楽しかったです(ちなみにTVシリーズの方の「ピーター・ガン」は若きデイビ・グルーシンがキーボードを弾いていたように記憶しています)。

裏テーマとしては『サルサ!』では大きく取り上げられていた、白人としてのブルースに対する

限りない敬愛があるようにも思えます。それにしても、ブルースが日本に入ってああいう音楽の呼称になるとは、昔の人は想像してなかったんじゃないのかなあ（苦笑）。

「どういう音楽が好きなんですか？」

「ブルースです」

「あ、いいですね。ぼくも好きなんですよ」

「そうなんですか。それはそれは。どういう曲が好きなんですか？」

「そうですね。淡谷のり子の「ベイブリッジ・ブルース」とか」

「??？」

と会話がかみ合わないことも起こります。私は『魅惑のムード秘宝館』とか好きなんで、日本のブルースも結構聴いたりはするんですけど。ルンバなんかもキューバから出て変わってきたりしてますしね。

この映画を見て、ブルース・バンドを始めた人も少なくないと思います。そのくらい影響力もありました。監獄に始まり監獄に終わるのに、すこぶるハッピーな映画です。

【ブルース・ブラザーズ（The Blues Brothers） 1980年 USA】

ブルース・ブラザーズ2000

前作から18年、まさかの続編『ブルース・ブラザーズ2000』がスクリーンを彩りました。

エルウッド(ダン・エイクロイド)は18年の刑期を終えて出所。彼の手元に届いたのは相棒のジェイクが既に世を去ったという知らせでした。エルウッドは再びバンドを結成するためにメンバーを集め始めます。恩師であるマザー・メアリー(キャサリン・フリーマン)からあずかった孤児のバスター(ジョイ・エヴァン・ボニファント)、歌手志望のバーテンであるマイティ・マック(ジョン・グッドマン)を新しくメンバーに加えて、かつてのバンドのメンバーも集まり新たにブルース・ブラザーズ・バンドを結成。ルイジアナの魔女クィーン・ムセット(エリカ・バドゥ)が開催する勝ち抜きバンド合戦に出演するために出発します……。

1982年に相棒であるジェイクことジョン・ベルーシが亡くなっていますから、よもや続編が作られるとは思いませんでした。それだけに冒頭のジェイクをじっと待ち続けるエルウッドのシーンはぐっときますね。前作リスペクトの小ネタもちらほら見られます。しかし前作みたいなものを期待しても、ジョン・ベルーシどうしてもはいないのでから、ダン・エイクロイドの出るまったく別物の音楽煙画として見ればそれなりに楽しめました。

今回もミュージシャンの出演者が豪華絢爛です。まず、ライバルのルイジアナ・ゲーター・ボーイズのメンバーがこれまたすごすぎです。ジャック・ディジョネット（もちろんピアノじゃなくてドラムを叩いてました（笑））やら、グローバー・ワシントンJr.やら、スティーブ・ウィンウッドやら、ジェフ・バクスターにエリック・クラプトンなど。あれはちょっと反則ではないでしょうか？（笑）

USAの丹波哲郎、ジェームス・ブラウンも元気に登場。アレサ・フランクリン、B・B・キングも出演ととどまるところを知りません。

ここでも警官隊やロシアンマフィア、右翼の民兵などに全編追われまくってますが、やはり追われると言うのは映画の1ジャンルですね。

【ブルース・ブラザーズ2000 (Blues Brothers 2000) 1998年 USA】

五つの銅貨

人生の中でとても大切なもの。

希望 夢 踊り 笑い 愛

それを忘れずに生きて行こうと思えたのは、この映画との出会いがあるからです。

1920年代のUSA、コルネットが得意な田舎の青年、レッド・ニコルズ(ダニー・ケイ)はニューヨークに出てきて、ウィル・パラダイスの楽団に入ります。そこでレッドは後にマネージャーになるギターのトニー（ハリー・ガーディノ）や歌手のボビー(バーバラ・ベル・ゲデス)と知り合いになります。またハーレムの酒場でルイ・アームストロング（ルイ・アームストロング）と即興でかけあい演奏をやったことから彼と仲よくなり意気投合、そしてボビーと恋仲になったレッドは彼女と結婚をします。

やがてバンド・リーダーとの音楽的な見地の違いでウィル・パラダイス楽団を脱退、新たに自分でファイブ・ペニーズ楽団を結成して地方巡業をはじめます。そんな時に娘のドロシー（スーザン・ゴードン）が生まれます。レッド・ニコルズの人気は絶頂期にあって、育っていくにつれて巡業生活の悪影響を憂えた親はドロシーを寄宿舎に預けます。ところがクリスマスの夜、両親と会える約束に寄宿舎から抜け出して外で雨にあたり続けたドロシーは、高熱で倒れて小児麻痺にかかり足が不自由になってしまいます。レッドは音楽に熱中するあまりに娘にかまうことができなかったことを後悔して、バンドを解散し、金門橋から愛用のコルネットを投げ捨てて残りの人生を娘のために生きることにします。

第2次世界大戦が始まった頃、レッドは造船所の職工をやっていて娘のドロシーは13歳になってました。娘は父が昔、非常に有名なプレイヤーだったことを知り、ボビーの協力もあってレッドは再び舞台に立とうとしますが……。

ジャズ黎明期のコルネット奏者、バンド・リーダーとして活躍をしたレッド・ニコルズを主人公に据えた映画です。私生まれる前の映画ですが、鼻水を袖ですすった頃のガキンチョ時代に見てすこぶる感動した映画です。元々涙腺がゆるい方なんですけど、多分映画を見て涙を流したのはこの映画が生まれた初めてだったと思います。本当に単純な映画なのですが、その後何度も見直しては感激を新たにしている私にとってのエバー・グリーンな映画です。

主役のレッド・ニコルズに扮するダニー・ケイが実に魅力的な主人公を演じています。またルイ・アームストロング本人が出ていることを後にジャズを知ってから知りましたが、元々味のあるおっさんだけにこれがまたとてもいい感じです。

映画の中で演奏させる曲の数々も魅力的で、ディキシーなんかはこの映画で好きになったというのもあると思います。また、賛美歌でもある「リパブリック賛歌」は日本でも「われら主の輝くみ栄え見ぬ」とか、「おたまじゃくしはカエルの子」とか、「ゴンベさんの子供はカゼひいた」とか、「丸い緑の山手線」とか歌われたりしているみたいです。

そして、ダニー・ケイの妻のシルビア・ファインが作詞作曲した、「五つの銅貨」や「ラグタイムの子守唄」がまたいい曲なんです。希望、夢、踊り、笑い、愛をそれぞれ1枚ずつの銅貨になぞらえた「五つの銅貨」は子供の頃からずっと心の底で光り続けています。

残念ながら本国も未だDVDは発売されていないみたいです。『グレン・ミラー物語』や『ベニー・グッドマン物語』が出ているだけに、早くDVD化を望みたいです。Amazon.comのビデオのレビューを読みながら、この映画を愛している人がまだまだ多くいるのを知って嬉しくなりました。

【五つの銅貨 (The Five Pennies) 1959年 USA】

あの頃ペニー・レイント

心の扉の奥にしまったままのものをふとしたはずみに垣間見ると、それは急にふくれあがって一気にその頃に戻されることがあります。

大学教授のエレイン・ミラー(フランシス・マクドーマンド)は厳格で頭の固い母親で、年頃の長女アニタ(ズーイー・デシャネル)と衝突してばかり。とうとうアニタは家を出ることを決め、たったひとりの11歳の弟ウィリアム(パトリック・フジット)に親に禁じられたレッチ・ツェッペリンやクリームなどのロックのLPレコードを託します。それがきっかけでウィリアムはロックの虜に。4年後の1973年、15歳になったウィリアムは幼い頃から成績優秀で、飛び級をしながら卒業を目指し、母エレインは弁護士になることを期待していました。当のウィリアムは学校新聞などにロック記事を書いたりしていましたが、伝説のロック・ライターでクリーム誌の編集長のレスター・バングス(フィリップ・シーモア・ホフマン)と出会い、その筆を認められます。さらにローリングストーン誌からも声がかかって、ウィリアムが大好きな売り出し中のロック・バンド、スティルウォーターの取材をすることに。ところが伝も無く楽屋に入ることが出来ない彼の前に、バンドの取り巻きである女の子たちが。そしてそれがその中のひとり、ペニー・レイン(ケイト・ハドソン)とウィリアムとの出会いでした……。

1973年といえばハード・ロックの台頭でロック・シーンが賑やかしくなっていた頃です。若者の音楽としては絶大な人気を得てきていましたが、一方親の世代からは煙たがれることも多かった音楽。ましてや酒、タバコ、クスリ、セックスと「不健康」な付帯イメージがついているのがロック・バンドでした。そんな時代の話です。

主役のパトリック・フジットが扮するウィリアムは、厳格な母に育てられた真面目な少年で、まだ15歳の若さでロック・バンドを取り巻く世界を垣間見ることになります。彼の生来の明るさと真面目さがその中で浮いていながらも好意的に受け入れられ、彼らのマスコットの仲間として一緒に行動していくさまは少年に戻ったようにわくわくします。製作・監督・脚本を担当したキャメロン・クロウの自身の体験が元になってるらしく、ステージに上がる前の儀式や、お互いの喧嘩等々、細部がいかにもありそうな感じですね。スティルウォーターのバンド・メンバーが、誰もが大なり小なり音楽好きの音楽バカなのが嬉しいです。特に印象的なのは、ツアー・バスの中で、だんだん歌声が広がっていくシーンですね。『スティル・クレイジー』もそうでしたが、いい歳こいたバンドの連中が巻き起こす珍騒動もコメディ・タッチに描かれています。

母エレインの気持ちがわかる歳になりましたが、親離れ、子離れしていく描写がしっとりと染みてきました。なんでか怒られて素直に従うラッセル(ビリー・クラダップ)がかわいそうですが(笑)。そして切なく暖かいものがこみ上げる初恋。日本語タイトルにも惹かれて少しセンチメンタルな気分させられました。

いつかあの頃のペニー・レインと会うことがあれば、きつと言える言葉があると思います。

【あの頃ペニー・レインと (ALMOST FAMOUS) 2000年 USA】

スティル・クレイジー

『Still Crazy』、実にいいタイトルです。

1977年に行われた伝説のウィズベック・コンサートを最後に当時人気のロックバンド、ストレンジ・フルーツは解散してしまいます。それから20年の月日が経った頃、キーボードだったトニー(スティーヴン・レイ)はしががないセールスマンをやっていたが、再結成を持ちかけられます。トニーは昔の仲間を集めようと、マネージャーだったカレン(ジュリエット・オーブリー)に連絡をとり、ベースのレス(ジミー・ネイル)、ドラマーのビーニー(ティモシー・スポール)、ボーカルのレイ(ビル・ナイ)を探して説得をします。ただ、ギタリストのブライアンは死んでしまったという噂で消息が不明。なんとか若いギタリストを加入させて再結成にこぎつけ、復活ストレンジ・フルーツはどさまわりのツアーを始めます……。

おっさんロッカーがしぶしぶと集まりながら、過去の栄光を思いだしながら奮闘するコメディです。人気絶頂当時に比べてくたびれた姿での再結成というのがまずうまい作り方で、バンドとして機能していくにつれてだんだんカッコよく見えてくるところがうれしい映画です。年取っても軽率な部分や子供っぽい部分が直らないのも愛嬌だし、もちろん伊達に歳は取っていないという部分も若者に見せてくれます。音楽を人前で演奏するという気持ちよさとバンド独特の連帯感というものは他からは絶対に得られないもので、それが染みついた人間にとってはそこにまた戻りたいものなんですよ。

曲自体もミック・ジョーンズやジェフ・リンが提供していて、とっってもごきげんな演奏を聴かせてくれます。

出演メンバーがそれぞれいかにも70年代ロッカーだなあと思わせる感じが、すごくいいですね。違和感ないです。それぞれの個性の強さもいいし、またとっってもありそうな感じです。ストレンジ・フルーツなんてバンド名も、いかにも当時ならありそうです。会話の中に実在のバンド名をうまく入れ込んでいるところも非常にうまいですね。世界的にも長く活動しているおっさんバンドも多いし、青春は年齢に限らないものですよ。

【スティル・クレイジー (Still Crazy) 1998年 UK】

ハイ！ロンドン

楽しいロンドン、ゆかいなロンドン、ロンドン、ロンドン（←内容とは一切関係ありません）。1960年代後半に日本の歌謡史にキラ星のごとく輝いたグループサウンズの代表的なバンドのひとつ、沢田研二、瞳みのる、森本太郎、岸部おさみ、岸部シローによるザ・タイガース主演のアイドル映画の第3弾です。

今や（1960年代後半当時）グループサウンズの中でも人気抜群のザ・タイガースはあちらこちらに引っ張りだこで、スケジュールがびっしり。メンバーのジュリー（沢田研二）、ピー（瞳みのる）、タロー（森本太郎）、サリー（岸部おさみ）、シロー（岸部シロー）の5人はあまりの過密スケジュールに誰もが自由な時間を望んでいました。そんなザ・タイガースのメンバーの前に出門鬼太郎（藤田まこと）という悪魔の化身が現れます。出門鬼太郎は、「魂を担保にすれば皆の希望をかなえることができる、そして約束の時間までに帰ってくれば魂は取らない」と言葉巧みに契約を持ちかけます。最初は半信半疑だった5人のメンバーも時間を止めた出門鬼太郎の魔力に驚き契約に乗ります。自由な時間を堪能する5人ですが、そこに出門鬼太郎の仲間の魔女・マジョリー（杉本エマ）が現れて海岸で5人を罠にかけて足止め。危うく約束の時間に遅れそうになった時、たまたまサンドバギーに乗った新倉めぐみ（久美かおり）という娘が通りかかり、すんでのところ助かります。5人と再び会っためぐみは、自分が歌手志望で、作曲家の父親がロンドンで客死して、そこに残した楽譜を探していることを話します。ザ・タイガースの面々は出門鬼太郎と契約を結ぶと、ロンドンへと飛びます……。

かつて日本を席卷したグループサウンズのムーブメントの最中に作られた映画で、ザ・タイガースを主演にした映画は当時3本作られてこれはその3本目。5人のメンバーが本人役で出演しています。源氏名のつけ方のセンスは時代が変ってもあまり変わらないものですな。もちろん、アイドルですので演技はあまりほめられたものではありませんが（「じゃあ音楽は？」と訊かないように（苦笑））、もうそういう邦画には慣れました（苦笑）。ヒロイン役の久美かおりも似たような演技力で、しかも敵役が芸達者な藤田まことなだけに却って藤田まことが浮いてしまうという（苦笑）。映画の中ではザ・タイガースのヒット曲も満載で、後半はロンドンの名所めぐりになっていることといい、コテコテの正統派アイドル映画とも言えるでしょう。ストーリーもなかなかご都合主義です（苦笑）。明治のカルミンなど、当時のCMらしいものも堂々と出ています（笑）。映画の中で久美かおりの歌謡ボサが流れますが、これはなかなかいい感じでお気に入りです。

そしてかつてのあんかけの時次郎、藤田まことの存在感は抜群です。まず名前が出門鬼太郎（笑）。出門はデーモンからでしょうか（笑）。しかもそのいでたちたるや、薄紫の山高帽に変なチェック柄の背広に赤い手袋とリボンタイと胸ポケットにハンカチーフ。見るからにあやしいです（笑）。多分今だからじゃなくて、当時でも通報されそうです（笑）。そして、当時売れっ子モデルの杉本エマは出番はちょこっとしかありませんでした（笑）。

途中の、

「ボクもロンドンは行ってみたいよなあ」

「やっぱりグループサウンズの本場だもんなあ」

というメンバーの会話が心に残ります。当時はバンド＝グループサウンズとも呼ばれていたようで、ビートルズもグループサウンズだったみたいですね。

【ハイ！ロンドン 1969年 日本】

青春デンデケデケデケ

シンセサイザーがピコピコと言われるよりもずっと昔、エレキギターはテケテケと言われていました。それは香川県観音寺市ならずも全国的にそうだったそうです。

時は1965年の春。香川県観音寺市で高校入学を目前に藤原竹良(林泰文)は、昼寝の最中にラジオから流れてきたベンチャーズの「パイプライン」に電撃的な衝撃を受けて、高校に入ったらロックバンドを結成しようと決心します。ギターの得意な白井清一(浅野忠信)を出会い、浄泉寺の住職の息子である合田富士男(大森嘉之)を説得してベースをやらせ、ブラスバンド部の岡下巧(永堀剛敏)にドラムを頼んで仲間が集まります。そうなる次は楽器の調達。夏休みにアルバイトでお金を稼いで念願の楽器を購入。初練習でバンド名も「ロッキング・ホースメン」に決定してバンドの練習が始まります。そうするうちにスナックの開店記念パーティで念願のデビュー・ライブ、そして高校3年生になり最後の文化祭での演奏に臨みます……。

現在50歳半ばになっている人が同時代で体験していたことだろうと思う青春映画です。とはいえ時代や事情や憧れの対象は違うとはいえ、共感できる部分も多い人がいると思います。

なぜか最後の部分以外は自主制作っぽい映像と雰囲気と音声だったのが、私的にはちょっと残念。でも青春しているなあというところはよく伝わってきました。楽器を買おうとするところなんかよくわかります。毎日毎日ショーウィンドウに顔をベッタリとくっつけて、家でカタログを何度も何度も飽きずに眺めてやっとの思いで買った楽器の輝きはずっと忘れられませんね。初練習から「ロッキング・ホースメン」の演奏がリズムが合いすぎるのは全然リアリティありませんけど(笑)。

この映画、音楽は久石譲だったんですね。最後の部分で久石譲らしい繊細な曲がバックに流れます。

私は高校時代は天文をやっていて、親しい友人(1人は現在お坊さんになっています)と学生科学賞にむけての研究をしている少年だったので、音楽とは縁がありませんでした。大学に入って富田勲にあこがれてシンセサイザーを購入して、同時に当時在籍大学になかったSF研究会を設立して、取らなければならない単位がべらぼうにあったので勉学の傍らクラブ活動をしていました。留年が決まり大学4年になった時に友人Tから、地方でシンセサイザーを持っている人が少ないので「一緒にバンドをやらないか」と誘われて悪の道(笑)に入ります。なにせピアノも習ったことないしキーボードなんてまっとうに弾けない私を盛り立ててくれて、1年間卒業まで一緒にバンドをやってくれたことに感謝しています。

その後、大学5年の時にやはり友人が当時地元では有名だったカリスマックスというバンドにいて、キーボードに誘ってくれました。「下手だから無理だよ」といいながら、そいつの下宿で

F Mを流しつつ朝まで飲んでジンを1本空けた時には一緒にやろうと決めてました（笑）。卒業前に300人弱を集めて単独ライブをやって打ち上げの時には、2年間のいろんなことを思い出して、声だしてぼろぼろ泣いちゃいましたね、恥ずかしいけど。もう卒業したら音楽はやらないつもりでしたし。今もこんな感じでバンドやってるとは想像もつかなかったです（爆笑）。今もドラムのヤツとは近くに住んでいていい友人です。

音楽と青春といえば佐藤宏之のマンガ「気分はグルービー」（秋田書店）が大のおすすめです。こういうバンドが組みたくて卒業後2年して自分のバンドを組むのですが、それはまた別のお話。

【青春デンドケデケデケ 1992年 日本】

秋の日のビオロンのためいきの身にしみてひたぶるにうら悲し

上田敏の名訳で知られるベルレーヌの「落葉」の冒頭ですが、ヴァイオリンの音色にはそれ自体に人の心を掻き立てるなにかを持っています。おそらくそれは文字で表すならば、ピアノよりも音程間に自由度があるためにビブラートやグリスなどの奏法が使えて、またその音域から人の声に近い音色を出すと言われている表現力豊かな部分があるからでしょう。そして、きっとそれだけではないでしょう。

中国の田舎町に住む13歳のリウ・チュン（唐韻／タン・ユン）は父（劉佩奇／リウ・ペイチー）と2人暮らしをしていました。チュンは幼い頃から母の形見であるヴァイオリンを弾き、その上手さで地元では結構名が知れてました。父親はそんな息子のために、必死に働きながら、また一流のヴァイオリニストにしてやろうと考えていました。親子で首都・北京へ行って、ヴァイオリンのコンクールに出場するチュン。結果は5位の成績でした。コンクールの直後、ふとした偶然からチュンの実力は1位であると評価してる先生がいることを知った父親は、さらに高い教育を受けさせるために北京に移り住むことにします。コンクールを見たチアン先生（王志文／ワン・チーウエン）に習おうと必死で取り入る父親ですが……。

陳凱歌（チェン・カイコー）監督による直球に近い親子の愛情物語がメイン・テーマです。「大人の世界」に浸りきった私なぞには見るまでにはどう映るかが判りませんでした。思いの外心に染みてくる映画でした。『あの頃ペニー・レインと』とはまったく違う映画なのですが、親離れ子離れのことや、思春期に入っていく頃の年上の女性に対する憧れの気持ちなど、共通するテーマもありました。

また、この映画の中で最初から最後までいろんな形に変わって出てくるのがお金とそれにまつわる話です。ヴァイオリンを弾いてお金をもらうこと、コンクールでの裏金の横行、先生への月謝、帽子の虎の子を掏られたこと、大事なものを手放してまで贈りたい気持ちなどなど。本当に最初から最後までです。そしてその中で、「お金はとても大切。だけど、時にはそれよりももっと大切なものがあるのだよ」と語りかけてくれるようでした。

練炭がなつかしかったです。日本では最近でも使っているところはあまりないんでしょうね。手だけではなくて服も黒くしながら練炭を運んだり（ついでにその手で顔を触るものだから顔も黒くなるのですが（笑））、石炭のカケラで舗装された道路（私道はほとんどが砂利か土の道）の端にラクガキをしていたガキンチョの頃が思い出されました。

そしてもうひとつ、音楽について先生たちの言葉が当たり前でありながらきちんと重要なことを

伝えてくれるのがいいですね。チアン先生は「第一に一生懸命弾くこと、第二に弾く以上は楽しんで弾くこと」、そして「楽器を大事にしろ」と。ユイ先生は「技術を教えることは出来るが、正確なだけではなく音楽に感情を込めること」が大事だとチュンに伝えます。言葉だけ見ると実に当たり前のことのようにですが、実際にどれだけの人がそれを実行できていることだか。ヴァイオリンを弓でこすれば誰でも音は出すことが出来ます。その音が音楽になっていくのかは、演奏者と聴き手にゆだねられていきます。そして、音楽を何のために誰のために弾くのか、その解答のひとつをチュンは見つけるのだと思います。

父親役のリウ・ペイチーの、ちょっと気が弱いけど息子のためにはがむしゃらになるステージ・パパぶりがよい演技でしたね。チアン先生を演じるワン・チーウェンもなかなか味がありました。その中で主人公を演じたタン・ユンは最初あまり演技が見られなかったのですが、要所要所では光るものを見せてくれました。

話は全然違いますけど、小さい頃は天才少女の名をほしいままにしたアンネ・ゾフィー・ムターもいつのまにかむっちりした熟女になられているんですね。しかもアンドレ・プレヴィン（かつてミア・ファローの夫で『ハリケーン』が元で離婚したとか）と結婚していると知ってビックリです。

【北京ヴァイオリン（和[イル]在一起／TOGETHER） 2002年 中国】

オーケストラの少女

1900年1月16日に初めての演奏会を開いたフィラデルフィア管弦楽団は、今年で創立105年。USAのメジャー・オーケストラの中では比較的遅いスタートでしたが、20世紀前半のレオポルド・ストコフスキーの指揮の元に、積極的な活動でUSAの五大オーケストラに数えられるまでになりました。

マンハッタン・コンサート・ホールではレオポルド・ストコフスキー（レオポルド・ストコフスキー）の指揮するオーケストラがチャイコフスキーの交響曲第5番を演奏し終わるところ。楽屋口に殺到するファンに混じって、失業中のトロンボーン奏者ジョン・カードウェル（アドルフ・マンジュー）はなんとかストコフスキーと直談判してオーケストラのメンバーに加えてもらおうとしますが、あっさりと楽屋番に追い払われます。淋しく帰ろうとする足元に大金の入ったサイフが目に入り、拾うジョン。持ち主を探そうとしたものの周りに取り合ってもらえず、仕方なく持ち帰ったところを家主に滞納した家賃を請求されて、悪いとは知りながら思わずそのサイフの中から家賃を支払ってしまいます。それをジョンの娘のパッツィ（ディアナ・ダービン）を始めとしてアパートの人たちは、ジョンがストコフスキーのオーケストラで働くことになったことによる前金だと誤解してお祝いの会を開きます。

娘の喜ぶ姿にどうしても本当のことが言えなかったジョンは、隣室の同じく失業中のフルート奏者マイケル（ミッシェル・オウア）にだけ事実をこっそりと話すと、翌日は練習に行くふりをして家を出ます。パッツィは嬉しさの余りに父の初練習を聴こうとホールへ出かけますが、そこで父が嘘をついている事実を知ってしまいます。家に帰って泣きながら詰問するパッツィに事実を告げるジョン。パッツィはとるものとりあえず、サイフの中にあつた住所を元に持ち主のフロスト夫人（アリス・ブラディ）にサイフを返しに行きました。お金持ちのフロスト夫人はとっくに落としたサイフのことなんか忘れてホーム・パーティでとても上機嫌。お金を使ってしまったと言いくさそうに告げるパッツィをパーティに引き入れます。そこでパッツィの歌のうまさに驚いたフロスト夫人は、失業している父を救うためオーケストラを作りたいというパッツィの提案を上機嫌で受け入れて、後援を約束します。半信半疑だったジョンもフロスト夫人との電話で信用して、友人など100人の失業楽士を集めて失業者オーケストラを結成。古ガレージでのリハーサルが始まり、後援資金をもらいにパッツィはフロスト夫人の家を訪ねますが、気まぐれな夫人はなんとヨーロッパ旅行に出発してしまい、しかもお金を握っている夫のジョン・フロスト（ユージン・ポーレット）は妻からは何も聞いてないと憤慨します……。

名画のひとつに数えられる1937年のモノクロの映画。極めて個性的な名指揮者のひとりとして有名なレオポルド・ストコフスキーが本人役で出ていることも話題の作品です。名画と言われると結構カタイ感じがしますが、ストーリーはよく見ると、今で言えば人情喜劇で吉本あたりの舞台でもやりそうな誤解や偶然で話が進んでいくコテコテの人情モノ。真面目っぽいのですが、クスクスとほほえましい場面も多くあります。主人公のパトリシアは猪突猛進型でああいえばこう

といった感じのチャキチャキ娘で、実際こういう人が身近にいたらうるさくてかなわんなあと思うようなタイプですが、その希望に満ちた楽天性がこの話を支えています。時代性もあるのでしょうけど、かなり直球勝負のファンタジーですが、夢があってとても好きな映画です。

この当時は世界大恐慌の後の映画だけに楽団員の失業などは、かなりのリアリティをもっていたのでしょね。演奏はストコフスキーの手兵フィラデルフィア管弦楽団によるもので、まさに息が合った演奏。ラストの「乾杯の歌」では心が温かくなります。珍しいところでは、自室でストコフスキーがピアノを弾く場面を見ることが出来ますね。

登場人物の中ではフランク・ジェンクスが演じていた、歌好きのタクシーの運転手がとってもいい味をだしてしましね。ほんわか人情喜劇には欠かせないタイプです。

【オーケストラの少女 (100 Men and a Girl) 1937年 USA】

ブラス！

ブラスとは真鍮のこと。転じて主に真鍮などで作られていた金管楽器のことを指します。吹奏楽は木管楽器も含めた管楽器を主に使いますが、ブラス・バンドというのは金管楽器が中心となっています。

1992年、イングランド北部ヨークシャー地方にある炭坑の町グリムリーは、町の主産業でもあった伝統ある炭坑の閉鎖問題で揺れていました。1881年に結成されて2度の大戦を乗り切った100年以上の歴史を持つ土地の名門ブラスバンドのグリムリー・コリアリー・バンドでは、バンドに人生の全情熱を傾けるリーダー兼指揮者のダニー(ピート・ポスルスウェイト)が、練習でメンバーに激しく活を入れています。今のメンバーはバンドの歴史上、初めて全英選手権に出場して決勝でのロイヤル・アルバート・ホールで演奏、しいては優勝を狙えると思っているだけに力も入ります。ところがメンバーのほとんどは炭坑で働いていて、先行きの不安に演奏に身が入らずに気もそぞろです。そんな時、ダニーの親友の孫娘のグロリア(タラ・フィッツジェラルド)が生まれ故郷のグリムリーに帰ってきます。男性ばかりのグリムリー・コリアリー・バンドに入った彼女にメンバーは色めきたち、特に子供の頃にグロリアが好きだったアンディ(ユアン・マクレガー)は気が気でありません。ところが、グロリアは炭坑会社側が炭坑の調査のためにグリムリーに呼んだ人だったのです……。

とても地味でありながら、だんだんじわじわ、そして深くじんとくる映画でした。1917年に炭坑夫の余暇活動として結成されたバンである、グライムソープ・コリアリー・バンドの実話が元になっているそうですね。炭坑が舞台というと、『遠い空の向こうに』などを思い出しますが、こちらは大変印象的な映画です。特に私の場合は幼少のエネルギー革命の頃に筑豊炭田の変革の様子を肌で知っているだけに、人一倍思うものがありました。

やはり音楽を愛して、仲間と音楽を演奏していこうという映画はいいですね。音楽をやっていると他では得られない心の充実感を得ることが出来るのが不思議です。だからこそ、なかなかやめられるものではないのでしょうか。

切々と現状を訴えるシーンやテリップと共に「威風堂々」を演奏するシーン、教会でのピエロのシーンなど、印象的なシーンはいろいろとありました。ちょっと演奏の演技は疑問の残るような部分もなくはなかったのですが、ダニーのために炭坑のヘッドライトをつけた姿で「ダニー・ボーイ」を演奏するシーンは、アレンジも含めて特に印象に残りました。もっとも映画だからいいものの、実際にやると結構周りに迷惑だとは思います(苦笑)。

おじいちゃんの形見の楽器を使ったり、自分の持っている楽器に悩んだり、自分の楽器の名前に誇りとこだわりをもつところとかも、細かい描写で好きです。特にユーフォoniumは名前を知らない人も多いし(笑)。

【ブラス！（BRASSED OFF） 1996年 UK】

お気に入りのミュージカル 12

テキサス1の赤いバラ

ホイットニー・ヒューストンが映画に初出演した『ボディガード』で歌った「I Will Always Love You」は、1992年当時大ヒットしました。この曲は1974年に作詞作曲者であるドリー・パートンが歌ってビルボード・カントリー・チャートで1位を記録した名曲です。そして、1982年にもまたドリー・パートンの歌によってビルボード・カントリー・チャートで1位を記録しました。この年に公開されたミュージカル映画『テキサス1の赤いバラ』のヒットに伴うもので、映画もその年の興行収入6位となっています。主演はもちろんドリー・パートンで、共演はバート・レイノルズ。監督は『ファール・プレイ』、『9時から5時まで』のコリン・ヒギンズで、監督第3作目のこの映画が最後の監督作品となってしまいました。

1910年に移転してからずっと、テキサスの田舎町・ギルバート町では親子3代親しまれていた娼館「ニワトリ牧場」。現在はその娼館の元売れっ子のミス・モナ（ドリー・パートン）が取り仕切っています。この町の保安官のエド（バート・レイノルズ）は娼館を取り潰すこともできる立場でしたが、モナに恋していたエドはそんな存在をおとなしく見守っています。そんな時、ヒューストンのテレビで人気を誇る消費者運動家メルビン・P・ソープ（ドム・デルイス）が娼館に目をつけてつぶそうと企みます……。

1978年にブロードウェイでもヒットしたカントリー&ウェスタンのミュージカル、「THE BEST LITTLE WHOREHOUSE IN TEXAS」の映画化です。あらすじと英題の通り、娼館がテーマになっているのであまりお上品な映画とは言えませんが（実際一部にボカシもあり（苦笑））、不器用な大人の男と女の恋物語がきゅんとくるミュージカルです。

ドリー・パートンというと、どうもその大きな部分に目が行ってしまいますが（苦笑）、この映画ではその演技、声、顔が最大限に魅力的です。バート・レイノルズ扮する保安官のエドとの口論が感情的になって、ついエドが言ってはならない言葉を言ってしまった時のドリー・パートンの一筋の涙には本当にドキッとさせられます。元々涙腺弱いんで、思わず泣いちゃいそうになっちゃいましたよ。また、ラストで別れを決意して「I Will Always Love You」を歌う場面は、決して朗々と歌い上げるのではなく静かに切々と歌うのですが、その感情と表情が心に染み込んでいくようで、隠れた名場面です。そういう意味でもホイットニー・ヒューストンのバージョンも嫌いではないのですが、このドリー・パートンの歌う「I Will Always Love You」が好きです。

ヒット・ミュージカルだけあって曲もメロディがよく楽しい曲が多く、カントリーを初めて聴いてみようという人にもおすすめです。先の「I Will Always Love You」以外にも「Hard Candy Christmas」なんかは特に美しくて好きな曲ですね。忘れちゃいけないのが、テキサス知事役のチャールズ・ダーニングがおかしな振り付けとともに歌う「Sidestep」。この映画では必見の部分です（笑）。この映画でアカデミー助演男優賞にノミネートされたのも判る気がします。

【テキサス1の赤いバラ (THE BEST LITTLE WHOREHOUSE IN TEXAS) 1982年 USA】

努力しないで出世する方法

世の中には、所謂「HOW TOもの」という指南書が多く出ていますが、映画でも目を引くように「HOW TOもの」みたいな題名がついていたりすることがあります。古くはマリリン・モンローの『百万長者と結婚する方法』、最近だと『10日間で男を上手にフル方法』などがその例でしょうか。

ビルの窓掃除をやっている青年フィンチ（ロバート・モース）は、ある日「努力しないで出世する方法」というペーパーバックを手に入れます。フィンチはその本の指示に従ってワールドワイド・ウィケット・カンパニーという大企業を訪れて、秘書をやっているローズマリー（ミシェル・リー）との出会いもあり、運良く就職することに成功します。配属されたのは社内のメール室。一所懸命仕事に打ち込むフィンチに、メール室のリーダーを25年務めて栄転が決まったトインブル（サミー・スミス）は、自分の後任に就職間もないフィンチを推薦します。ところがフィンチは本の指示に従って、この役をビグリー社長（ルディ・バレー）の甥でなにかとその事を誇示するバド・フランプ（アンソニー・ティエグ）に譲ります。「会社全体の為を思ってバドに譲りました」と言うフィンチの言葉に好印象を持った人事部長のブラッド（ジョン・マイヤーズ）は、フィンチをちょうど空席であった企画推進部の課長に推します。さらにフィンチはビグリー社長の出身校や趣味を調べて、社長にに取り入りますが……。

1961年にブロードウェイで公開されて以来、大ヒットして数々の賞も取ったミュージカルの映画化です。1995年には宝塚でも「ハウ・トゥー・サクシード」というタイトルで公演されています。脚本はエイブ・バローズ、作詞・作曲はフランク・レッサーで映画ではネルソン・リドルが音楽監督をしています。親しみやすいメロディにしゃれたビッグバンド・アレンジの伴奏でゴージャスな音楽になっていますね。歌以外にも、9時になって一斉に女性社員が席についてお化粧を始める場面など、映像のリズムも小気味良い感じです。

お話はお調子者のC調出世コメディで、後の『摩天楼（ニューヨーク）はバラ色に』にもあるようなテイストの映画ですね。本に従って策を弄して出世を狙う分、多分にこすっからい感は否めませんが、コメディとしてはもちろんそういう方が話が面白いもんです。運と下半身だけで出世して内容が無い、どこかのビジネスマン漫画もどきとは違います（笑）。小さい背丈で回りに負けないように対抗しながら、紹介されると必ず「F・I・N・C・H」と名前の綴りを言うロバート・モース演じるフィンチは、方向性は違うとはいえ一応はそれなりの努力はしていますしね（笑）。

しかもそれに輪をかけてこの映画では、モーリン・アーサー演じるミス・ララーの怪演が面白すぎます。所謂、悩殺ボディが自慢で頭の中がソフトクリームでできているという典型的なタイプを演じるのですが、頭のとっぺんから出す声といい、『マーズ・アタック』のリサ・マリー演じる変装火星女性に対抗できる「すそそそっ」といった感じの歩き方といい、彼女の怪演がこの映

画のコメディに寄与した功績は大きいと思います。「仕事がダメなほど、後ろ盾は大きい」だけあって、手を出すとベネズエラに飛ばされたりするんですけど（笑）。

古きよき時代の肩のこらないハッピーなミュージカルです。これもあちらではDVDが出ているだけに、ぜひ日本でも廉価版のDVDを望んでいるんですけどねえ。

【努力しないで出世する方法 (HOW TO SUCCEED IN BUSINESS WITHOUT REALLY TRYING)
1967年 USA】

ウエスト・サイド物語

「豊かな(Rich)港(port)」をスペイン語では「プエルト・リコ」(Puerto Rico)と言います。1493年にコロンブスに「発見」された頃は住んでいたタイノ族によってボリンケン(Borinquen)と呼ばれていたこの島はスペインの領土にされた後、USAの領土になり現在はUSAの自由連合州という特殊な位置にあります。国旗はキューバの国旗と色違いのデザインです。

さて、『ウエスト・サイド物語』の舞台は1960年代のニューヨーク。そこでは不良少年達がグループを組んでいて、昔からの地元のジェット団とプエルト・リコ系移民のシャーク団はニューヨークのウエストサイドで激しく対立していました。そんなある日、シャーク団の首領の妹であるマリア(ナタリー・ウッド)とジェット団の首領の親友であったトニー(リチャード・ベイマー)はダンス・パーティーで出会って恋に落ちます。そんな中、ジェット団とシャーク団の抗争が悪化して険悪な雰囲気になってきます……。

指揮者として世界的に有名であったレナード・バーンスタインが音楽を担当したミュージカルです。作曲家としても活躍した彼の曲の中で、間違いなく世界で一番知られている作品です。

「Somewhere」、「Maria」、「Tonight」、「America」、「Cool」(特にすきなのはテーマが交錯する「Quintet」)など、どれを挙げても印象的な曲の数々で、いろんなアーティストによって単独で歌われていたりもします。作曲者自身の指揮でオペラ歌手であるキリ・テ・カナワやホセ・カレーラスなどで録音したアルバムもあるほどです(LDのレコーディング風景がなかなか面白いものがありました)。

40年以上の作品ですからいろいろと古く感じられるところもあります。ジェット団とシャーク団とか(笑)。当時のミュージカルとしては、斬新な演出とストーリーで公開当時はロング・ランを続けたそうですが、音楽や骨子の部分は決して古くなっているとは思いません。ぜひ機会があれば音響が良くて大画面の映画館で見て欲しい映画のひとつです。

【ウエスト・サイド物語 (West Side Story) 1961年 USA】

メリー・ポピンズ

子供の頃は、カサを広げて崖から飛んだりとかむちゃをしたものです。カサは飛べるアイテムだと思っていた頃もありました。

20世紀始めのロンドン、銀行の役員であるバンクス氏(デイヴィッド・トムリンソン)は妻(グリンズ・ジョーンズ)が婦人参政権運動にかかりっきりで、姉弟の2人の子供たちにかまっている暇がありません。仕方なく乳母を雇っていますが、いたずらざかりの2人に翻弄されて誰もが出て行きます。また新しい乳母を雇うためにタイムズ紙に広告をだそうとするバンクス氏に先回りして、姉弟は自分たちの希望を紙に書いて見せますがストーブにくべられてしまいます。その紙は煙突から空高く向こうへ。乳母の面接当日、1人の若い女性がパラソルを開いて空からバンクス家にやってきます。子供たちの書いた紙を持っていたその女性、メリー・ポピンズ(ジュリー・アンドリュース)をバンクス氏は乳母に雇うのでした……。

ウォルト・ディズニー製作の40年前のミュージカル映画です。一部ではアニメーションとの融合もしているカラフルな映画でした。いろんな魔法を見せてくれて夢の多い映画です。

ブロードウェイで『マイ・フェア・レディ』で大ヒットを飛ばしたジュリー・アンドリュースですが、映画化に際して製作会社の指名で主演がオードリー・ヘップバーンになったため、同時期のこの映画に出てアカデミー主演女優賞をとったといういきさつがあるそうです。実際ジュリー・アンドリュースはこの映画でのメリー・ポピンズのイメージにぴったりですね。

メリー・ポピンズの旧友で大道芸人で絵描きで煙筒掃除のバートをディック・バン・ダイクが好演していますが、銀行の老頭取と一人二役をやっているのがまたにこいです。

今回見直して思いましたが、子供には素敵な夢を与えてくれて、その実お話は大人にもう一度ゆっくりと見てもらいたい大切なメッセージが入った大人のための寓話でもある作品ではないかなあと思っています。

そういえば平成ガメラでは藤谷文子扮する草薙浅黄の部屋にこの『メリー・ポピンズ』のポスターが貼ってありましたね。DVDのコメンタリーにもありましたが金子監督が好きなのだそうです。

映画の中で流れるナンバーは、有名な「チム・チム・チェリー」をはじめとしていずれも耳になじんだ名曲揃いです。音楽担当はこの当時のディズニー映画には欠かせないシャーマン兄弟。

「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス」や「お砂糖ひとさじで」、そして「2ペンスを鳩に」などが印象に残っています。

ところでうちの部屋、ひどく散らかっているんですけど、メリー・ポピンズ来てくれないかな

あ（苦笑）。

【メリー・ポピンズ（Mary Poppins） 1964年 USA】

マイ・フェア・レディ

この映画、間違いなくオードリー・ヘップバーンの魅力たっぷりの映画といえるでしょう。

ロンドンの下町コックニーで花を売るイライザ・ドゥーリトル(オードリー・ヘップバーン)はある夜、言語学者のヘンリー・ヒギンス博士(レックス・ハリソン)と出会います。その時に言葉の訛りをなくせば別の人生が開けると聞いたイライザは、意を決してメイフェアのヒギンス博士の家を訪ねます。訪ねてきたイライザに興味を持ったヒギンス博士とピカリング大佐(ウィルフリッド・ハイド=ホワイト)は、半年でイライザの訛りを矯正して洗練されたレディとして社交界にデビューさせることをできるかどうかということで賭けをします。その日からイライザはヒギンス博士の家に住み込んで、何度も何度も同じ言葉を発音するように言われながら特訓を重ねます。そしてまずはアスコット競馬場に行くことに……。

ロンドン的高级住宅街「mayfair」を下町のコックニー訛りで読むと「my fair」と同じ発音になるそうですね。また、イライザの苗字Dolittleはドリトル先生と同じ苗字で英語の単語としては「怠け者」という意味だそうです。そういえばミュージカル映画『ドリトル先生不思議な旅』でドリトル先生に扮していたのは、この映画でヒギンス博士を演じたレックス・ハリソンでした。

ブロードウェイでの『マイ・フェア・レディ』の舞台ではジュリー・アンドリュースがイライザ役を務めていたのですが、映画化に際して製作会社の指名で映画の主演がオードリー・ヘップバーンになったのは有名なお話。そしてジュリー・アンドリュースは同年に公開された『メリー・ポピンズ』に出演し、その年のアカデミー主演女優賞をとったといういきさつがあります。

またオードリー・ヘップバーンは歌は得意ではなく、この映画での歌だけは『王様と私』や『ウエスト・サイド物語』でも他の人の吹替えを担当したマーニ・ニクソンでした。実際、今のDVDには特典でオードリー・ヘップバーン自身の歌が参考に入っていますが、音程はひどくはないものの声の出し方やリズムの取り方が素人丸出しの歌い方。どこぞの国のヒット・チャートならともかく、まっとうな耳を持っている人にお金を取って聞かせるレベルではありません。

そこまでして起用したこの映画のオードリー・ヘップバーンですが、とにかくその美しさは一見の価値があります。最初、下町の薄汚れた花売り娘を演じているのですが、その時さえも美しく困ってしまいます(笑)。またこの頃は御年30代半ばのはずなのですが、くるくると変る表情がもうとてもかわいらしくてたまりません。チョコレートに曳かれたり、お茶請けに目が行ったり、ビーダマを飲み込んでしまうところの表情などの愛くるしさは、なかなか出せるものではないでしょう。そして、社交界にデビューする時の華やかさですね。まさにオードリー・ヘップバーンの魅力を余すことなく伝えることができた映画ではないでしょうか。こういう映画を見ると舞踏会に行ってみたくになりますが、着て行く服がないの(笑)。それに間違えて李連杰とかが出る武道会に行っちゃったらコトですし(笑)。

映画のもうひとりの主要人物ヘンリー・ヒギンス博士は、中流階級のいやらしさをたっぷりと持ったマザー・コンプレックスで独善的な人物として描かれています。彼が何か言い出すと、観客の代わりにメイドやピカリング大佐や母親がツッコミを入れてくれるのでちょっと安心ですが（笑）。そのヘンリー・ヒギンスを演じたレックス・ハリソンの、最後の自宅のドアの前での表情は名演です。

音楽は言わずと知れた名曲揃い。「踊り明かそう」や「君住む街で」はもう何度も何度も耳にしている曲ですし、「ステキじゃない？」や「時間通りに教会へ!」も耳に残る名曲です。コーラスがきれいな「召使たちの合唱」や舞踏会での「大使館のワルツ」などの小技も効いています。ちなみにこの映画では音楽の監修をアンドレ・プレヴィンがやっています。

皮肉屋のバーナード・ショー原作の「ピグマリオン」とはまったく逆だと言われるラストは、「あれでいいのか」という疑問もあるのですが、まずはハッピーなミュージカルとしての落しどころとしてはアリなのではないかとも思います。私の場合、「なんであげな性格の2人が一緒になっとっとかねえ？」と思うケースを現実に数多く見ているせいもありますけど（苦笑）。

【マイ・フェア・レディ (MY FAIR LADY) 1964年 USA】

サウスパーク 無修正映画版

下品、無軌道、無修正(?)のテレビ・アニメ、『サウスパーク』の映画版。この映画は「R-15指定」というのがウリ(笑)。

サウスパークのおなじみの小学生4人組、スタン、カイル、カートマン、ケニーは、カナダのコメディアン、テレンス&フィリップ主演のR指定のおバカ映画をこっそり見てからすっかる夢中。それに続けとばかりにクラスメートも次々に見に行っただので、小学校のクラスでは下品な言葉と遊びが大流行。あげくの果てに映画のマネをしてオナラに火を点けようとしたケニーが、大ヤケドを追った上に手術ミスで死んでしまいます(『サウスパーク』のオヤクソク)。この状況に怒ったPTAは、子供たちの脳に下品な放送禁止用語を抑制する新兵器Vチップを埋め込みます。また、テレンス&フィリップのカナダを糾弾したために事態はエスカレートして、ついにUSAとカナダは全面戦争に突入。それに乗じて地獄のサタンとオカマ関係にあるフセインが、世界征服をたくらみます……。

全編に下品な言葉がこれでもかと言うほどに飛び交い回るので、確かに「R-15指定」でしょうね。内容のおバカさで下品で毒があってハチャメチャなところも子供向きとは言えないし、見るだけで眉をひそめる人も少なくないでしょう。決して万人にはお薦めできませんが、根底には社会に対するシニカルな目があるし、この映画が合う人にはかなり面白い映画です。

なんと全編ミュージカル仕立ての作品で、しかも『サウスパーク』スタッフの中心人物トレイ・パーカーが音楽を担当しています。これが曲だけ聞いたら、昔懐かしいミュージカルそのままのような曲とアレンジなのはさすが。ロックありカントリーありといった部分もあり、なまじ言葉が分からない私なんかにとっては、BGMに流すだけでもすごく楽しめる音楽ですね。最後に感動を盛り上げるようなストーリー仕立てですが、音楽がさらにその効果を上げています。

あと、ブルック・シールズやウィノナ・ライダーも出ています(笑)。しかしDVDの日本語音声、ミュージカルってことをちょっと考えてほしかったような……。

【サウスパーク 無修正映画版 (South Park: Bigger Longer and Uncut) 1999年 USA】

ダウントウン物語

置いて他にはないでしょう。

1920年代の禁酒法時代のニューヨーク、ダウントウン。そこでは2組のギャング団、肥っちょサム(ジョン・カッシージ)一派と新興ボスでおしゃれのダン(マーティン・レブ)一派がシマを争っていました。ダン一味は新式の銃を装備して次々にサムの仲間を倒して行きます。ダン一味がサムの秘密の酒場を襲った夜に、伊達男のバグジー・マローン(スコット・バイオ)は売り込みに来た歌手の卵のブラウジー・ブラウン(フロリー・ダガー)と出会って好きになります。が、サムの情婦で歌手のタルーラ(ジョディ・フォスター)もバグジーに気がある様子。サムとダンは森の中で会談を持つとしますが、双方の裏切りであわや命を落としそうになるサムをバグジーが救います。サムはその礼にとバグジーに200ドルを渡して、バグジーはその金でブラウジーに、憧れのハリウッドへ二人で行こうと誘います。ところが帰り道にバグジーは暴漢に襲われてからっけつに……。

ここしばらく、映画の心理プロフィールさまのblogで子役特集をしていましたが、この映画は平均年齢12歳の子供ばかりが出演しているという唯一無二のギャング映画ミュージカルです。原題は主人公の名前で『Bugsy Malone』。これでは判りにくいと邦題は『ダウントウン物語』になったのでしょうか。監督・脚本はこれが初監督作品になるアラン・パーカー。これ以前には『小さな恋のメロディ』の脚本を書いています。音楽と作詞はポール・ウィリアムスが担当しています。

子供ばかりと言っても学芸会レベルと思ったら大間違い。監督は妥協を許さなかったそうで、演技はなかなかのもの。声の高さやヒゲが似合わないのはご愛嬌、というか、おそらくそういうアンバランスさを狙っているのでしょう。ませたチビッコ・ギャングたちがスクリーン狭しと暴れまわります。

ストーリーだけ見ると血で血を洗うギャングものみたいですが、漆喰銃と名づけられたマシンガンは生クリームが飛び出す特殊製で、それまでの武器であるパイ投げなど目じゃないスグレモノ。当たると一応死んだことになるそうで二度と出てきません。走り回るクラシック・カーは足こぎです。なのに、「運転できるか?」「できない」という部下には笑っちゃいましたが(笑)。そして、マシンガンも車も効果音は本物の音が当てられています。「ごっこ」でありながら真剣な「ごっこ」です。脚本も芸が細かいし、セットや美術が細部まで凝った丁寧な作りになっていて、決して子供だましの映画になっていません。

この中で一番のビッグ・ネームになったジョディ・フォスターは、当時14歳で『タクシー・ドライバー』と同時期の作品です。化粧嫌いの私は妖艶と言うよりは「ケバい!」と思ってしまいましたけど(苦笑)、年齢に似合わない大人びた雰囲気は確かです。

タイトルバックの「Bugsy Malone」からしてしゃれた感じの曲で、時代設定にマッチした感じの音楽がなかなか心地よいです。秘密酒場での子供ばかりのビッグ・バンドのシーン、サムの子供4人が踊りながら歌うシーンや、配給を受ける集団のスプーンを持って歌うシーンなど、ミュージカルならではの見所もあります。フロリー・ダガーが部屋でしっとりと歌う「Only A Fool」は一番の名曲だと思います。

【ダウンタウン物語 (Bugsy Malone) 1976年 UK】

ウィズ

『オズの魔法使い』のドロシーをダイアナ・ロスがやったら？
カカシをマイケル・ジャクソンが演じたら？
ライオンにテッド・ロス、ブリキ男にニプシー・ラッセルだったら？

そういう映画が、この『ウィズ』です。『ウィズ』(The Wiz)とは『The Wizard of OZ』、『オズの魔法使』のことです。

小説『オズの魔法使』をベースに、オール黒人キャストで1974年にブロードウェイで上演された『ウィズ』は瞬く間に大評判となり、7つのトニー賞を獲得しました。そのミュージカルを映画化したものがこの映画『ウィズ』です。映画化する上で周りのいろんな思惑もあり、キャストイングや脚本が難航したとか。

ストーリーはもう説明するまでもないと思いますが、オール黒人キャストということもあってか若干メッセージ色の強い内容になっています。セットがすごくチャチだという風評もありますが、キッチュな感じとして見ればはそう悪くは思えませんでした。

この映画の音楽監督を務めているのが、クインシー・ジョーンズ。大名作アルバムである『スタッフ・ライク・ザット』(Staff Like That)を出した頃ですので、一番脂の乗り切った時期です。全編にドライブ感あふれる豊穡なサウンドが満載です。タイトル・バックのトゥーツ・シールマンスのハーモニカや、何度か形を変えて歌われる"Ease on Down the Road"、そして全員が解放され時に踊り狂いながら歌われる躍動感あふれる"Brand New Day"と聴き所がたくさんありました。中でも気に入ったのがエメラルド・シティに来た時に流れる"Emerald City Sequence"。メドレー形式でかっこいいアレンジのお手本みたいな曲です。ここでクインシー本人もピアノを弾いているところで出演してます。

この映画がきっかけで、翌年クインシー・ジョーンズがマイケル・ジャクソンの『オフ・ザ・ウォール』を手がけることになったそうですね。そして、82年の『スリラー』へと繋がっていきます。

【ウィズ (THE WIZ) 1978年 USA】

なんだかタイトルだけ見ると、キダタロー大先生のテーマ曲に乗せて横山やすし・西川きよし&桂きん枝が出てきそうです（笑）。『恋するブラジャー大作戦（仮）』に比べればマシというか、どっこいどっこいと言うか（笑）。初公開時のタイトルが『花嫁は僕の胸に』、原題が『Dilwale Dulhania Le Jayenge（勇者が花嫁を連れていく）』というこの映画、興行収入150億円、観客動員数1億人以上、4年以上に渡るロングランを達成した超大ヒット映画だそうで、それこそ「全印が泣いて笑った」映画に入る作品になるのでしょうか。またそれだけの内容のある映画ですぞ。

イギリスはロンドンに住んでいる、恋に恋する年頃の娘シムラン（カージョル）は、インド伝統を重んじる厳格な父チョウドリー（アムリーシュ・プリ）の下、妹を含んだ一家4人で暮らしていました。ある日、インドから父親の元に手紙が来ます。それは娘のシムランを親友の息子に嫁がせるという約束を20年前からしていたことで、近々結婚式を行おうという内容でした。大喜びする父とまだ見ぬ許婚に不安を持つシムラン。彼女は女友達との一ヶ月のヨーロッパ旅行を、最初で最後のわがままとして父親に懇願します。一方、同じロンドンに住むラージュ（シャー・ルク・カーン）は口の達者なお調子者で大学を留年しながらもヨーロッパ旅行に出発。偶然出会った2人は最初はなにかと反発しあいますが、次第に惹かれていきます。旅行から帰った2人は駅で別れ、自宅に帰ったシムランは自分の思いの丈をこっそりと母親（ファリーダ・ジャラル）に打ち明けます。ところがそれを耳にした父親は激怒。結婚식을強行しようと、すぐさま一家でインドに帰ります。シムランのことが忘れられないラージュは彼女を家を訪ねますが、既にインドに引き揚げた後で家はもぬけの空。ラージュはシムランを娶るためにインドに飛ぶことにします……。

コメディの場面も多い映画ですが、歳にとって涙もろくなったせいかな所々でホロリと泣けました。ストーリーとしては立ち足かかる障壁を乗り越えていく略奪愛ものなのですが、『卒業』みたいに実力行使で奪ってしまえばいいものを、シャー・ルク・カーン扮するラージュはあくまでも相手の父親の承諾を得るということを前提にあの手この手で策を弄します。正攻法で行こうとする割には結構インチキをやったりするのですが（苦笑）、そこはシャー・ルク・カーンのキャラクターとシムランを愛する熱意で許しちゃいますね。一見、口先のうまい、いいかげんなお調子者に見えて、誠意とやさしい気持ちをもった好青年であるのがポイントが高いところでしょう。キリスト教の教会で、祈り方は知らないのにシムランの願いをかなえてくれるように神様に頼む場面などは、思わず微笑んでしまいますなあ。

そして最大の障壁であるアムリーシュ・プリ演じるシムランの父親、これがもうガチガチに厳格な上に見た目にむちゃくちゃ怖い！！（爆笑）顔も怖ければ目がすごく怖いです。道で会って睨まれたらリアルで泣いちゃいそうです。普段は睨みを効かせた仏頂面ですが、ハトにえさをやるのが趣味だったり、長年連れ添った妻に愛を歌うと言った一面がまたいい味をだしています。こ

の最大の障壁が途方も無く高いために、話は否が応でも盛り上がります。

シムランを演じるカージョルの健康的なセクシーさは言わずもがな。バスタオル一枚で踊ったり、雨の中踊ったりしています。アルプスの山小屋で寒さをしのぐためにコニャックを飲んで、1日中酔っ払って踊るシーンには爆笑。またインド特有の衣装、特に結婚式のあたりなどは非常にあでやかです。

それに加えて周りの脇役のキャラクターがまたとてもいい映画です。娘シムランのよき相談役で愛する夫との狭間で悩む母親は、娘の幸せを願ってやまない様子が心にきます。シムランの妹がいい雰囲気を持っていて、またちょっとかわいい感じです。そしてラージュの父親は、父親でありながらかなりさばけていて、息子とはほとんど友達のような付き合い。それでいて、いざとなれば息子のために一肌脱ぎ、息子を誇りに思う芯の強いおとっつぁんです。こういうべたつかない間柄でありながら暖かい家族愛と絆を感じられるところが、この映画に惹きつけられるひとつの理由に違いありません。

もちろんインド映画ではおなじみのミュージカル・シーンも盛りだくさん。印象的で頭に残るきれいなメロディを書いたのは、『ラジュウ出世する』の音楽担当もやっているジャティン・ラリトです。ラージュがつま弾くメロディが、映画の中で重要なモチーフとして使われているところもいいですね。

ちなみに日本での劇場公開が失敗に終わった（タイトルのせいもあるような（苦笑））からか、日本語版DVDが出ていないのが残念です。国家的損失かもしれません（笑）。USA版の日本語字幕で見ましたが、これが機械翻訳そのまま、本編とは関係なく笑ったり首をひねりたくなるものです（苦笑）。日本語監修が出来る人がいない環境で作られたようで、機械翻訳調の文章はまだしも、へんてこりんな訳や、文字化けまであったり、時々なぜかタイム・コードが出てきたり（苦笑）。映画自体はイチオシなんですが、ぜひとも日本語版DVDを出してちゃんとした日本語で見られる環境がほしいものです。

【シャー・ルク・カーンのDDLJ／ラブゲット大作戦（Dilwale Dulhania Le Jayenge (DDLJ)）
1995年 インド】

ドリトル先生不思議な旅

昔、犬を飼っていた頃、言葉がわかればいいなあとどんなに思ったことか知りません。犬語は習得できなかったので犬に言葉を教えようと思いました、それも挫折（笑）。そうして今に至ります。

1845年、イングランドの沼のほとりのパドルビーに動物の言葉が判る不思議な獣医ドリトル先生(レックス・ハリソン)が住んでいました。ネコの餌売りを生業としているマシュー(アンソニー・ニューリー)は、怪我した雄ガモを見つけたのをきっかけに、トム・スタビンス少年(ウィリアム・ディックス)を連れてドリトル先生の所に連れて行き、そこからドリトル先生との交流が始まります。翌日、ベロウズ将軍(ピーター・ブル)の老馬トグルがひとりでドリトル先生を訪問して、馬語で目が霞むと言い、ドリトル先生は即座に老眼と判断、老眼鏡をかけさせます。ところがそこに、ベロウズ将軍が姪のエマ・フェアファックス(サマンサ・エッガー)を連れて怒鳴り込んできます。ベロウズ将軍はドリトル先生を馬泥棒と誤解したのです。ベロウズ将軍は動物たちに追い払われて、エマはドリトル先生との口論で腹を立てて帰ってしまいます。そんな時、友人でアメリカン・ネイティブの友人で博物学者のロング・アローから双頭の珍獣オシツオサレツが贈られてきます。ドリトル先生は海の大カタツムリを探すためにオシツオサレツの協力で、サーカスで旅費を作ることに。その頃、サーカスの中で夫アザラシ恋しさのあまりノイローゼになった雌アザラシを診察したドリトル先生は、そのアザラシを海まで運んで逃がすのにショールで人間に変装させて、海に放してあげました。ところがそれを目撃した人が人を海に投げ落としたと誤解、ドリトル先生は殺人犯として逮捕され、法廷に立つことに。なんとか無罪になったドリトル先生はカレイ号という船を買って、マシュー、トム、エマ、そしてなじみの動物たちと大カタツムリ探しの航海に出ます。ところが船は大嵐にあって大破、難破したドリトル先生一行は……。

ヒュー・ロフティングの童話『ドリトル先生』のシリーズから、いろんなエピソードをかいつまんでミックスして作られたミュージカルです。なんか数年前に『ドクター・ドリトル』なる映画もありましたが、あれは私の中ではなかったことに（苦笑）。原作のヒュー・ロフティング自身による挿絵とはちょっとイメージが違いますが、レックス・ハリソンが人のよいイギリス紳士を演じていて、これはこれでイメージが合いました。アンソニー・ニューリーも地味ながらいい演技で脇を固めていました。

また動物たちも名演。原作でのレギュラー・メンバーをはじめ、とにかく動物が次から次にいろいろ。しかもたくさん出てきて、動物好きにはたまりません。しかも、双頭の珍獣オシツオサレツや大カタツムリ、巨大なルナ蛾など、原作オリジナルの想像上の生き物もふんだんに出てきます。まさかそういうものまで出すとは思っていなかったの、子供の頃はウケてしまいましたね。特筆するような特殊効果はありませんが、それでもこの年(1967年)のアカデミー賞特殊視覚効果賞を取っています。クジラが島を押して行くシーンなんかは好きでしたね。また地味な

がらいい曲も多く、「Talk to the Animals」はやはりこの年のアカデミー賞歌曲賞を受賞しています。

子供の頃原作の『ドリトル先生』シリーズが大好きで、むさぼるように読んだものです。何度も何度も読んだのでいろんなシーンを憶えていますし、自分の中では心の宝物のひとつです。日本では井伏鱒二が翻訳をしていました。近年、この『ドリトル先生』シリーズの中での表現に現代の目で見れば差別的表現があるとして攻撃をうけていたりしています。UKやUSAでも出版される巻が限定されていたり、図書館では扱われていなかったりもしています。差別的表現というのはそれはそれで的を射たものがあるのかもしれませんが、それによって傷つく人がいれば、それはなくしていくべきことだとは思いますが。ただかつては文学として評価されていたものに、そういう言葉があればやみくもにすぐに見えないところに隠すのではなくて、それはそれとしてきちんと語り合い、また何がどういけないかを教えていく場を作らなければいけないのではないかと思うのです。私はまだ読んでいないので未確認ですけど、人づてに聞いた話だと現在の『ドリトル先生』シリーズには巻末にそういう件について長い解説がついているそうです。

【ドリトル先生不思議な旅 (Doctor Dolittle) 1967年 USA】

リトル・ショップ・オブ・ホラーズ (1986)

1960年にロジャー・コーマンが製作・監督したホラー・コメディ『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』は、その後オフ・ブロードウェイでミュージカル化されてヒットしたのですが、それを受けてリメイク映画化されたのがこの1986年の『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』。オリジナル版とはまた違った感じでこちらの方も楽しめる映画です。

どや街の小さな花屋ムシュニクで働く青年シーモア・クレルボーン（リック・モラニス）は、何をやってもトロくてドジばかり。ある皆既日食の日に中国人の花屋にある百日草のところで見つけた不思議な植物を1ドル95セントで買ったシーモアは同僚で憧れの女性・オードリー（エレン・グリーン）の名前からオードリー2と名づけて地下室で育て始めますが、オードリーの提案でオードリー2を花屋に飾ることに。しかしオードリー2はしおれて元気がありません。ところが偶然、シーモアがバラのトゲで指を傷つけたことからオードリー2が血を飲んで元気になるばかりか、その瞬間大きく育っていきます。そればかりか、なんとそのオードリー2は「食わせる」と英語で喋りだします……。

オリジナル版から26年＝ほぼ四半世紀経っていますので、骨子を別にすれば作り方も内容もずいぶんと変わっています。一番はなんと言ってもミュージカルになったこと。ポップでメロディが魅力的なナンバーが多く披露されてます。音楽の担当はアラン・メンケン。これまではCMの仕事などをやっていたそうですが、オフ・ブロードウェイでの舞台化に作ったこの音楽が映画化されたことにより名前が知られていきます。その後、1989年の『リトル・マーメイド』を皮切りに『美女と野獣』、『アラジン』、『ポカポントラス』、『ノートルダムの鐘』などと、ディズニーのアニメーションのミュージカル・ナンバーでヒットを飛ばしていることはご存知の通り。

画面も明るくポップな極彩色で、何よりもオードリーJr.からオードリー2になったからか（笑）、オードリー2の造型と動きがなかなか素晴らしく、コミカルでかつ心惹かれるものがあります。歌声もファンキーだし、饒舌すぎるし（笑）。オードリーJr.もあの時代なりの味はあるんですけど（笑）。タカラも著作権としてオードリー2のフラワー・ロックとか作らなかったんですかね？（笑） 結末も違うのですが、ラストはなかなかの迫力でした。

オードリーが魅力的でないのと、濃すぎる面子が整理されてかなり少なくなっていたのは残念といえば残念。（人を食う）植物を飾る提案をしたのが花を食う人じゃなくてオードリーになっていましたし。娼婦のエピソードもなくなっていましたしね。そして、もうこの時代だと日本人じゃなくて中国人が神秘なんですね（笑）。

ピンク・フロイド ザ・ウォール

1979年にリリースされて全米一位にもなったピンク・フロイドの2枚組コンセプト・アルバム『ザ・ウォール (THE WALL)』を映像化した映画です。

ボブ・ゲルドフ扮するピンクという名前のロック・スターを中心として映画の話は進められていきます。彼の過去と現在、そして悪夢と現実を行きつ戻りつしながら映画の物語は進んでいきます。

もちろん曲は全編ピンク・フロイドの『ザ・ウォール』からのもの。とはいえプロモーション・ビデオとは一線をかくして、アルバム・コンセプトを基軸に一貫した主張のある映画になっています。

英語が分からない私などにとってはこのような映像がついた作品になると、字幕も含めて内容が強く焼きつけられます。元のアルバムに比べて硬派すぎる内容だという話もありますが、映画としてはまとまりがあってよかったのではないのでしょうか？

特に部分部分に挿入されるジェラルド・スカーフのモーフィングの連続のようなアニメーションは、強烈なインパクトがあります。ハトがタカに化け、ユニオンジャックが血塗られた十字架になり、SEXを表しているような花のからみなど、一度見ただけで忘れられない場面でした。実写映像にしてもモブ・シーンや子供の行進の行く先がミンチだったり、強く訴えかけるものがあります。

この当時あったベルリンの壁は崩壊しましたが、まだ見えない壁は確実にあるところに存在しています。「なぜ青い空の下 正義の名の下 戦争するのか」わからない社会が続く限り、この映画も語り継がれていくでしょう。

【ピンク・フロイド ザ・ウォール Pink Floyd The Wall 1982年 UK】

お気に入りの音楽ドキュメント／ライブ 18

サラヴァ

サラヴァ SARAVAH 祝福

ピエール・バルーが初めて監督をした、ブラジル音楽への私的旅行ドキュメント

1969年 ブラジル

私的旅行ドキュメントという言葉が似つかわしいほど、手カメラによる映像とほとんど手を加えていない編集、素材をそのまま放り出したような映画なのです。それがなぜ人を魅了するのかと言えば、出演陣とそれを取り巻いている空気でしょう。バーデン・パウエル、マリア・ベターニャ、パウリーニョ・ダ・ヴィオラ、ピシンギーニャ、ジョアン・ダ・バイアーナ、マルシアなどと言った巨匠たちが歌い弾く姿は、今の時代にあってはかなり貧弱な映像でありながら、貴重な映像でかつ素晴らしい音楽を届けてくれます。サンバ、ボサ・ノヴァ、MPB。それらがサウダーヂのにおいと共に空気を伝えてくれます。

ギターに合わせて皆の歌が重なっていく場面、歌のバックにトロンボーンが艶かしくからんでいく場面、サンバのギターに合わせて打楽器と歌がどんどん高揚していく場面等々。目が釘づけになりながら、時々鳥肌が立つような、心が締めつけられるような気持ちを何度も感じたのはこの映画でした。当時のブラジルは軍事独裁政権時代で、マリア・ベターニャがイギリスに亡命した兄カエターノ・ベローゾに触れて話す表情の影もにもハッとさせられます。

ピエール・バルーとバーデン・パウエルによる「サンバ・サラヴァ」で幕を開け、「サンバ・サラヴァ」で幕を閉じるこの作品は、ブラジル音楽好きには貴重な宝石のような映画です。

【サラヴァ (SARAVAH) 1969年 フランス】

ポプラル！

『ポプラル！』 = 『!POPULAR!』 = 「人気者」。キューバのオルケスタ、チャランガ・アバネーラをUSAのジェニファー・パズが2003年から2004年にかけて撮影したドキュメント・フィルム。

最近『カリエンテ!〜ライブ・イン・ハバナ〜』みたいにイサック・デルガドやチャランガ・フォレベル（チャランガ・アバネーラを脱退したメンバーによるグループ）などのライブをDVDでも見る事が出来るようになりましたが、まだまだ数は少ないのが現状。そんな中、昨年この『ポプラル！』が劇場公開されたのですが、残念ながら見に行き損ねてしまいました（エグゼクティブ・プロデューサーが大きらいだからではないのですけど（苦笑））。ところが、ありがたいことに今回DVDの発売となりました。

現代のキューバの音楽で最も有名な楽団のひとつ、チャランガ・アバネーラですから演奏はもう言うことなし！ひたすら踊れる、ひたすらカッコイイ音楽です。ゴキゲンこの上なし。残念なのは、この手の映画にありがちな音楽をブツ切りにしてインタビューなどを差し挟んでいること。私が一番見たかったのは、芸術的に素晴らしかった音楽映画『Touch the Sound そこにある音』みたいな感じか、『CALLE 54(カジェ54)』のような音楽映画なんですけどねえ。それでも、日本公演の曲なんかはかなり長くは流していましたけど。

キューバの風景と貴重なリハーサルがなかなかうれしい場面でした。いかん。語彙力がないので、カッコイイという言葉しか出てこないです（笑）。

【ポプラル！（!PUPOLAR!） 2005年 USA】

ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ

ヴィム・ヴェンダース監督と親交のあったギタリスト、ライ・クーダーが1997年にキューバに行ったことがきっかけになった、キューバのミュージシャンを中心とする音楽ドキュメンタリー映画です。

コンパイ・セグンド、イブライム・フェレール、オマーラ・ポルトウオンド、ルベーン・ゴンザレス、エリアデス・オチョアなどの、キューバでは名を知らない人はいない有名なミュージシャンにライ・クーダー親子が参加しています。レコーディング、そしてアムステルダムとNYカーネギー・ホールでのコンサートの模様を収録して、間にオフ・ショットやインタビューが挟まります。

キューバ音楽のドキュメントということで、公開当時すぐに見に行きました。私はラテン音楽が大好きですし、ちょうど10年前の1994年の9月に日本のバンド、ハバタンパのボーヤ（荷物持ち）としてキューバに1週間ほど行ったことがあります。ビデオカメラで撮影したという映画の色彩は思いの外美しく、キューバの街並みなどの光景を見て胸が詰まるほど懐かしくなりました。そして、聴くほどに深みを増すキューバ音楽。しばし、夢見心地でスクリーンの中に没頭しました。

残念だったのはハンディ・カメラの特性なのか、カメラ・アングルに落ち着きがなかったように感じられるところです。またドキュメントのためにインタビューが曲の邪魔になっている部分があったりして、もっと曲を中心に聴かせてほしかったように思いました。こういう映画はままだありますが、ちょっと音楽に対する愛を感じられないのが残念です。個人的には、ライ・クーダー親子は曲には参加しなかった方がアレンジとしては好みだったのですが、わがままな注文でしょうか。

そういえば、コンパイ・セグンドは2003年95歳で永眠しました。合掌。

【ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ (Buena Vista Social Club) 1999年 ドイツ=USA=フランス=キューバ】

永遠のモータウン

LM系の世界で裏方的存在であるスタジオ・ミュージシャンにスポットが当たるようになってきたのは、1970年代後半のことではないでしょうか。フュージョンの台頭とスタジオ・ミュージシャンによるバンドの結成など、バンド編成でなくても次第にボーカル以外の部分も一般的な興味もたれるようになってきて、アルバムにも普通にクレジットされるようになってきたのは嬉しい動きでした。

USAはミシガン州デトロイトで生まれたミュージック・レーベルであるモータウンは、1960年代から数多くの名曲を世界に送り出していました。スティービー・ワンダー、マーヴィン・ゲイ、フォー・トップス、テンプレート等々。彼らの歌声をバックで支えるサウンドを作り出していたのがファンク・ブラザーズ。そのファンク・ブラザーズの歴史を辿りながら生の声を集め、現代に再結成したファンク・ブラザーズによるステージを映し出します。

モータウン・サウンドとまで呼ばれるようになった音を支えたファンク・ブラザーズを追った音楽ドキュメンタリーです。あのサウンドが好きな人間にとってはとてもうれしい映画。年をとったメンバーが目を輝かせながら、語り演奏する姿はとても心にぐっときます。本当に本当に本当に、この人たちは音楽が好きなんだなあって思いますよ。今なお、カッコいいじいさんたちです。自分も音楽演奏をする者の端くれですが、身体が許す限りいくつのじいさんになっても音楽はやめられないだろうし、やっていきたいと常々思ってます。一緒にやっていける信頼できる仲間もいることですし、きっと何十年経っても「バカ」やっているでしょう。やっていきたいです。

また、再結成版ファンク・ブラザーズの演奏が随所にさしはさまっていますが、改めてモータウンは名曲をいくつも送り出しているんだなあと再認識しましたよ。気持ちいいメロディ、身体が動くグルーブが嬉しいです。最後の近くでチャカ・カーンが歌う「What's going on」は、私でさえも昔から今まで演奏する機会の多い名曲ですが、そのすばらしい歌詞も含めて泣きそうになるぐらい大きく心が震えました。

惜しむべくは、多くの音楽ドキュメンタリーと同様、音楽がブツ切れになっているところが多い部分ですね。やはり音楽はイントロからエンディングまでで1曲=1つの作品ですから、じっくり聴かせてほしいものです。こういうドキュメンタリーやCMなどで私がとてもきれいな部分はそういうところですよ。

それでもこういう映画は大歓迎ですね。もっとこういう部分にスポットを当てた映画が出てほしいものです。

【永遠のモータウン (STANDING IN THE SHADOWS OF MOTOWN) 2002年 USA】

ジョイフル・ノイズ

東京では3月にレイト・ショーで上映されていたのですが、満を持してDVDのリリースを待っていた作品。あのジャズ界きっての異端児サン・ラーの貴重な映像が収められた『ジョイフル・ノイズ』です。見た目はハナ肇ですが、自称・土星から来た音楽家サン・ラーがふんだんに見れるとあれば、これはもうファンには垂涎もの。

なにせ私自身もサン・ラーの映像となると、1988年にライブ・アンダー・ザ・スカイでサン・ラー&オーケストラでの最初で最後の来日ライブ（新宿ピットインでも演奏したらしいですけど）をした時にテレビ放送した1曲のみ。見に行けなかったことをとても後悔しました。その後、1993年5月30日に「宇宙に帰って」しまったのがつくづく残念です。『moog』や『マザーシップ・コネクション:ラスト・エンジェル・オブ・ヒストリー』にも出ているという噂があって見たのですが、どちらも出たのがほんの一瞬だけ（苦笑）。不遇の扱いです（笑）。

この映画は1980年にボブ・マッジ監督によって撮られ、USAで上映されたドキュメンタリー映画で、サン・ラーとメンバーのインタビュー、そしてライブの様子が収められています。よくぞリリースしてくれたと思う貴重な映像で、ケレン味たっぷりの当時のサン・ラー&オーケストラの演奏も見ることができます。ブルース進行でガシガシしたピアノを弾くサン・ラーの姿や、オルガン、シンセサイザー（クールマーのシンセサイザーというところがまた渋い（笑））を弾くサン・ラーの姿も収録。オルガンをガシガシ弾いてと思ったら、そうは聴こえなかったのですがテーマに戻ったら「Round Midnight」だったり（笑）。とにかく、サウンドはむちゃくちゃカッコいいです（こういうフリー・ジャズ系が好きな人にはという注釈つきです）。

インタビューも一歩間違えば、いや、多分間違えなくても、危ない宗教の人と思われそうな発言ばかりですが、こちらケレン味たっぷりの発言が聴けます。ただ、映画のタイトルの由来にかかわる発言ですが、近所から苦情があって警察がやって来て「音楽は困る」と言われた時に、「音楽ではなく喜びの音（ジョイフル・ノイズ）」だと反論した、って（苦笑）。小学生の言い訳じゃないんですけど（笑）。

これを機会にサン・ラーを知ったり気に入ったりしてくれる人が、少しでもいると嬉しいなとは思っています。ポピュラリティに乏しいかもしれませんが（笑）。

【ジョイフル・ノイズ(SUN LA/A JOYFUL NOISE) 1980年 USA】

炎のジプシー・ブラス 地図にない村から

ルーマニアの金管楽器によるバンド、ファンファーレ・チョカリーアを追ったドキュメント・フィルムです。

ひとりの少年が、凍りついた湖の上を歩いていくと、やがて氷の割れ目から古びて壊れている金管楽器を拾い上げます。少年はそれを馬車に乗せると家に持ってかえることにしました。ここはルーマニアの北東に位置する住民わずか400人たらずの小さな厳寒の村、ゼチェ・プラジーニ。列車は止まっても駅の標識やプラットフォームもないその村には、地元の冠婚葬祭などで演奏するブラスバンド、ファンファーレ・チョカリーアの面々がいました。彼らの村での生活、そして2000年の初来日の模様も入った世界各地での演奏とメンバーの素顔が収録されています。

ファンファーレ・チョカリーアの曲は独特の曲とアレンジで、確かにロマ特有の感じのする早いフレーズの入った異国情緒の豊かな音楽です。基本は曲によってはダンサーが入るように、ダンス・ミュージックなのでテンポよく、ノリのよい曲が多いです。サラサーテの「ツイゴイネルワイゼン」やブラームスの「ハンガリー舞曲」を思い浮かべると近い印象があるのではないのでしょうか。

とにかく画面の端々から、メンバーが本当に音楽が好きでたまらないことや、生活と音楽が密着していることがあふれ出るように判って嬉しくなってきます。時にはメンバー同士で罵りあいながらも、陽気さ150%の演奏がみんなを幸せにしてくれるようです。いやもう、楽しい楽しい！2000年の初来日時に、渋谷のハチ公の交差点でおまわりさんが出動した映像も収められています（笑）。

映画自体は100分弱のドキュメントですが、DVDでは別にベルリン・コンサートの模様が15曲収められていて、ライブビデオも楽しめます。

【炎のジプシー・ブラス 地図にない村から (BRASS ON FIRE) 2002年 ドイツ】

ベルリン・フィルと子供たち

8歳から20歳前半の250人の子供たちが、ほとんどが素人同然状態から6週間でベルリン・フィルをバックに「春の祭典」を踊るまでを描いたドキュメンタリーです。原題は「RHYTHM IS IT!」。

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の芸術監督に就任したサー・サイモン・ラトルは、「子供たちに、もっとクラシックの楽しさを感じてもらいたい」ということで、「教育プロジェクト」を発足します。その一環が「ダンス・プロジェクト」で、6週間の練習の後、2003年1月28日にベルリン・アリーナで250名の若者たちによってストラヴィンスキーの「春の祭典」を踊るといったもの。しかもその25ヶ国にわたる8歳から20歳前半までの若者はほとんどが踊りに関してもクラシックに関しても初心者で、その家庭環境はさまざま。両親の離婚で父親に引き取られた少女や、ナイジェリアの内戦で両親を殺されてドイツに渡ってきた少年、難民としてドイツに移住した人も多いとのこと。最初は戸惑い、自信が持てず、真剣に取り組めない彼らを、振付師のロイストン・マルドゥームは物事に真剣に取り組むことの重要性を説きながら根気よく熱心に指導していきます。その中で次第に変わっていく若者たち。そしてオーケストラとの音合わせを経て、当日の本番を迎えます。

ストラヴィンスキーの「春の祭典」といえば私の大好きな曲のひとつですが、ご存知の方は判りのように拍子も曲構成も変化が大変激しく演奏自体も難しい曲です。これを素人が6週間で舞台上で踊りを披露するように仕上げるのですから並大抵のことではありません。というより不可能ではないかと思うのが普通だと思います。それをできると見極めた上で、「人生では規律が必要なんだ。どんな形にせよ。最初は外部から課せられて、それがじきに自分の身に付いていく。それなしに成長はない」と言いながら厳しく指導をしていくロイストン・マルドゥームの手腕には舌を巻きました。。そこには「メインのダンサーをと合わせた時に彼らが悩むようであれば、それは自分の指導の責任だ」、「観客には努力したという過程は関係ない。本番は1回だけだ」という意味（このあたりのテキストはないのでうろおぼえによる大意）の考えがあつてのことで、甘やかすことが本人のためにはならないことを一番知っているからこそであったのでしょうか。

もちろん250人すべての子供が100%納得して情熱をぶつけることができた訳でもないのですが、映画で見る限り自分に自信と社交性をもち、真剣に物事に取り組むことの大事さや、本当の意味で自分の限界に挑戦すること、ひとつの事を成し遂げることの喜びを得た人の数は多いはず。本番終了後の彼らの笑顔に思わず少し涙腺が緩んでしまいました。

現在のドイツでは難民などの流入と経済の悪化が大きな課題になっていて、その不満からナショナリズムの高揚（特にネオ・ナチや極右政治団体）による外国人排斥運動がおこったりしています。そしてそれが事件に発展することも少なくないのが現状だということです。

また、サイモン・ラトルが現在のドイツの経済破綻に関連して、「芸術は存続のために戦わなく

てはならないだろう」と言う危機感を持っているのは、ある意味切迫している事実でもあるでしょう。ドイツでは1990年からの10年間で20件のオーケストラの合併があり、20件以上の解散があったということです（参考：REPORT ドイツオーケストラ事情）。これはまた日本のオーケストラ事情としても他人事ではない話でしょうし、昨今の日本野球界の状況にも重なるものがあるように思います。

私はオーケストラにせよ野球チームにせよ、その本体だけでの経営が成り立たずスポンサーや補助金に頼りきりになるのはどうかと思っている方の人です。何も音楽はオーケストラだけではないし、スポーツは野球だけではありませんから、人の支持が減って手厚く庇護されなければ生き延びられない文化というのは、乱暴な言い方をすれば文化としてはある意味独り立ちしてないのではとも思っています。とはいえオーケストラも野球も大好きですから無くなってしまっただけは困りますし、また経営体質の改善や新しいファンの獲得などによってまだまだよくなる要素も多いと思います。

そういう意味でサイモン・ラトルが持っている問題意識とその対策は非常にすばらしいものだと思いますし、応援したい気持ちになります。

最後にサイモン・ラトル卿が始めの方のインタビューで語っていた心に残る言葉を紹介します。なによりも、これを実践して、また現在も続けているということに大きな意義があると思います。

「私は以前から願ってた。子供のダンサーと、オーケストラを共演させたいと。なぜプロでなくてはならない？建物を飛び出して大きな場所を作りたい。みんなが参加できる広くて開放的な場所を。

音楽にはもっと可能性がある。意味を持ち、人々の役にも立てる。その1つとして音楽にできるのは、人々を分断することではなく、1つにすることだ」

【ベルリン・フィルと子供たち（RHYTHM IS IT!） 2004年 ドイツ】

Touch the Sound そこにある音

1988年と2001年にグラミー賞を受賞している打楽器奏者エヴリン・グレニーが、ギタリストのフレッド・フリスとのレコーディングを中心に、世界で音に触れる場面を追ったドキュメント。8歳の頃から聴覚障害を患い12歳の頃にはほとんど耳が聴こえなくなったものの、王立音楽院で学んで世界のトップに立つパーカッション・プレイヤーになったエヴリン・グレニーの演奏とインタビュー、そしてその体験を映したこのドキュメントは打楽器が好きな人のみならず、音と音楽好きな人すべてに見てもらいたい傑作です。

映画ではエヴリン・グレニーが、ギタリストのフレッド・フリスとのドイツでのデュオのレコーディングが大きな軸となり、USAや日本、スコットランドなどの世界各地での音の体験を挟んだドキュメント・フィルムです。エヴリン・グレニー、そしてフレッド・フリスや、オラシオ・エル・ネグロ・エルナンデス、鬼太鼓座などとの共演がこの上なく素晴らしいは当然なのですが、監督・撮影・編集を担当したトーマス・リーデルシェイマーの素晴らしい映像と構成が発揮された映画でした。

この手の音楽ドキュメントでは安物のテレビ番組よろしくインタビューを中心に音楽をブツ切りにして投げ込んで作られるものが実に多かったです。この映画はまったく違います。映像が音と音楽のまさに見せたいものに焦点を当てて、より全体をくっきりと浮かび上がらせてくれます。映画は音楽を邪魔することなく、むしろそれ全体が調和したひとつの音楽であるかのような作品でした。その映像も心に刻み込まれるような美しく鮮烈で印象的な場面が多々あり、監督であるトーマス・リーデルシェイマーの意図と非凡な才能を強く感じます。

エヴリン・グレニーの音に対する考え方のインタビューも多くさし挟まっています。また、世界各地の映像では音というものについて、もう一度意識を持たせるような作りになっています。この映画の中にあるものを求めるのでしたら、きっとそれを受け取ることができるでしょう。機会があれば一度鑑賞した後に、今度は目をつぶって通して体験したい映画だと思いました。

本当に打楽器が好きな人のみならず、音と音楽好きな人すべてに見てもらいたい素晴らしいドキュメント映画だと思います。

【Touch the Sound そこにある音。 (Touch the Sound) 2004年 ドイツ】

テルミン

テルミンという電子楽器を一般的にも知る機会を作ったドキュメンタリー映画です。

1920年に発明された電子楽器テルミンと、その発明者であるレフ・セルゲイヴィッチ・テルミン博士にスポットを当てたドキュメンタリーです。インタビューや古いフィルムから構成されていて、テルミン奏者であるクララ・ロックモアやシンセサイザーの父であるロバート・モーグ博士、ミュージシャンのブライアン・ウィルソンやトッド・ラングレンが出演しています。

テルミンを知った1970年代の日本ではあまり情報なく歴史の中で語られることがほとんどで、既にほとんど死に絶えた楽器ある印象がありました。1921年に明治製菓から発売されたカルシウム入りのミント錠菓、カルミンの方が知られていました（笑）。カルミンは叔母が好きでいつも携帯していましたし。

この映画はテルミンという楽器の歴史をなぞるのかなと思って見に行ったのですが、テルミン博士の数奇な運命について話が転がりだしてくる頃からびっくり。当時の社会情勢に照らし合わせて感慨深いものがありました。

また、バーナード・ハーマンが『地球の静止する日』でテルミンを使うように曲を書いたことなど、多くの映画のバックで使われていることも映像を入れて紹介されているのがうれしいです。

この映画のおかげで、テルミンという楽器が知られてくるようになったのはうれしいです。実際に見る機会の少ないテルミンの映像が、動く画面で見られたのも嬉しかったですね。特にビジュアルが特徴的な楽器でもありますし。

【テルミン(Theremin An Electronic Odyssey) 1993年 USA】

moogと書いて「モーグ」と読みます。昔は「ムーグ」と呼んでいました。かつてのシンセサイザーの代名詞であり、またそれを作ったロバート・モーグ博士の苗字でもあります。

電子音楽の歴史に多大な影響を与えたシンセサイザーの父＝ロバート・A・モーグ博士の半生とシンセサイザーの発展を追ったドキュメンタリー・フィルムです。モーグ博士への密接インタビューを中心に、歴史的なフィルム、モーグ・シンセサイザーを使ったミュージシャンたちにスポットを当てて紹介しています。

私の場合、シンセサイザーが存在しなければ、おそらく音楽の演奏に触れることは無かったのではないかと考えている人間なので、この映画の日本公開を楽しみにしていました。と言いながら使っていたシンセサイザーはほとんど国産で、値段が高いのとV/Hz方式のシンセサイザーから入ったのでmoogは1台も持っていなかったりするのですが（笑）。

モーグ博士の「生の声」や、キース・エマーソンやリック・ウェイクマン、バーニー・ウォレルなどのmoogに寄せる言葉とエピソード、モーグ・シンセサイザーのイベント演奏による昔の貴重なフィルムなど、好きな人にとっては涎が止まらなくなる映像がてんこ盛でした。リック・ウェイクマンがジャック・ワイルドからミニ・ムーグを買った時のエピソードには爆笑。また、すぐにシモネタに走りたがるバーニー・ウォレルもファンキーでした。モーグ博士自身も昔製造販売していたテルミンの演奏を見せたり、来日時に「太鼓の達人」に興じる場面があるなど、おちゃめな魅力も振りまいていました。映画ではありませんでしたが、パンフレットに掲載のインタビュー（*1）では昔来日した時にラーメン屋に行けなかったことについて怒っています（笑）。

残念なのはカメラ・ワークと編集が非常に雑だったことで、素材がいいだけに残念です。もっといろいろとやりようがあったと思います。ライブ・シーンが断片のブツ切りなのはこういう映画では仕方の無いことでしょうかね。また、出演者にサン・ラが入っていたので期待したのですが、映ったのは一瞬でした（苦笑）。それとパンフレットには「93年に地球から去った」とありますが、そうじゃなくてサン・ラは「宇宙に帰った」のです（笑）。あと、バーニー・ウォレルの一番長くカッコいいシーンが**KORG**の**TRITON**を弾くシーンというのは映画『moog』としてはいかがなものでしょうか？（苦笑）

全編が1時間程度の映画ですが、昔のシンセサイザー好きにはたまらない映画ではないでしょうか。

（*1）パンフレットに掲載のインタビュー

◎当時も渋谷にはラーメン屋が色々あったかとは思いますが・・・

「その時はだれも私をラーメン屋に連れて行ってはくれなかったのだ。後に、伊丹十三監督の名作『タンポポ』を見た時には、とても腹が立った」

◎なぜ、お怒りになったのですか？

「日本では、どうして誰も私にラーメンを食べさせてくれなかったのか！！と本当に腹が立った。『タンポポ』を見た後、ラーメンについて文献等も研究したが、ラーメンとはデザイナーである料理人と顧客であるユーザーの味の真剣勝負だと知った。日本にしながら、私はそれを体験するチャンスをみすみす逃したのだ。あの時は、フグよりもまずラーメンを食すべきだったはずだ」

【moog (moog) 2004年 USA】

ウッドストック／愛と平和と音楽の三日間

以前にちょっと書いたことがあると思いますが、小さい頃はロックを聴くのと喫茶店に入るのは「不良者」だという環境に育ったので、ロックについてはまったくの無知でした。友人が「『ウッドストック』がすごい！」としきりに言っていた時に、「スヌーピーに出てくる逆さに飛ぶ鳥のことだな」と思っていたのは秘密です。道理で話が通じないと思いました（苦笑）。

1969年の8月15日から3日間、ニューヨーク郊外のウッドストックに近いベセルの丘で、デビュー間もないサンタナ、ザ・フー、ジョーン・バエズ、ジミ・ヘンドリックスなどロックの人気アーティストが多数出演したのが、俗に言うウッドストック音楽祭です。時はベトナム戦争の最中フラー・ムーブメントが起こっている頃で、観客は一説に寄れば40万人を越したといわれています。

音楽も、それを撮っている映像も、今見ると古っぽいでしょうし、かなり荒削りで洗練に欠けているように見えるでしょう。しかし、私なんかにはロックが持つ強いパワーを画面全体から感じる映像で、いくつもの演奏に圧倒されました。日本では大々的に万国博覧会が開かれた頃。ビデオもなく、海外アーティストの来日も少なくライブを見る機会が極端に少なかった当時の諸先輩方の中には、もっとかなりの衝撃を受けたのではないのでしょうか。とどめなく溢れるエネルギーを感じることしばしです。

36年前は駆け出しだったサンタナって音は違うけど結局今とまったく同じことやってるんだな（笑）とか、スターシップは昔はジェファーソン・エアプレインだったんだなとか、やっぱりスライ&ファミリーストーン（昔コピーしました）はええやねえとか、ジミ・ヘンドリックスは何度見てもかっこいいやとか、いろんな感慨を感じる演奏でもあります。

ロックが、音楽が好きなら、ぜひとも1度は見てほしい映画ですね。

【ウッドストック／愛と平和と音楽の三日間（WOODSTOCK: 3 DAYS OF PEACE MUSIC...AND LOVE） 1970年 USA】

真夏の夜のジャズ

日本でも20世紀の最後の20年間は夏の野外ジャズ・フェスティバルには事欠かない幸福な期間でした。もちろん、ジャズの本場でも長い歴史のあるジャズ・フェスティバルは数多く存在します。

この映画は1958年、初開催から5年目のUSAロード・アイランド州で行われたニューポート・ジャズ・フェスティバルを、7月3日から6日までの4日間撮ったフィルムの中から編集されたものだそうです。製作と監督は当時30歳前の有名な写真家であったバート・スターン。全編86分のフィルムに編集されています。バート・スターンの目と耳で選ばれたのは以下の演奏。

- 1.トレイン・アンド・ザ・リヴァー(ジミー・ジェフリー・スリー)
- 2.ブルー・モンク(セロニアス・モンク)
- 3.ブルース(ソニー・スティット)
- 4.スウィート・ジョージア・ブラウン
- 5.二人でお茶を(アニタ・オデイ)
- 6.ジョージ・シアリング・クインテット(ロンド)
- 7.オール・オブ・ミー(ダイナ・ワシントン)
- 8.アズ・キャッチ・キャン(ジェリー・マリガン・カルテット)
- 9.アイ・エイント・マッド・アット・ユー(ビッグ・メイベル・スミス)
- 10.スウィート・リトル・シックスティーン(チャック・ベリー)
- 11.ブルー・サンズ(チコ・ハミルトン・クインテット)
- 12.レイジー・リヴァー
- 13.タイガー・ラグ(ルイ・アームストロング・オールスターズ)
- 14.ロッキン・チェア(ルイ・アームストロング、ジャック・ティーガーデン)
- 15.聖者の行進(ルイ・アームストロング・オールスターズ)
- 16.神の国を歩もう
- 17.雨が降ったよ
- 18.主の祈り(マヘリア・ジャクソン)

ジャズ好きには本当にこれだけの動く巨匠たちの演奏が見れるということは涎もの以外の何者でもなく、まだビデオも普及していない時代にこれを見た時には興奮しました。よくぞこういうものを後世に残してくれたものです。ニューポートの風景や周りの喧騒も含めたこの映画は、まさに「L I V E !」というものを感じさせてその中に入り込ませてくれました。

始めて見た頃はやはりボーカルに目が行ってしまうもので、アニタ・オデイやダイナ・ワシントン、そしてこの映画で初めて名前を知ったゴスペルのマヘリア・ジャクソンには感動しました。しかしまた、他のアーティストについても聴けば聴くほど、見れば見るほどいいんですわ、こ

れが。ビデオを手に入れて以来、虫干し代わりにたまにこの映画を見るのが至福のひとつです。

先に4日間撮ったフィルムの中から編集されたとありますが、編集された中には入っていない膨大なカットされたフィルムはどうなっているんでしょうねえ。当時の出演者にはマイルス・ディビスやデューク・エリントン、ソニー・ロリンズらもいたそうです。それを考えただけでも、ずいぶんと贅沢というかもったいないというか……。

【真夏の夜のジャズ (JAZZ ON A SUMMER'S DAY) 1959年 USA】

CALLE 54(カジェ54)

フェルナンド・トルエバ監督による音楽ドキュメンタリー映画で、私が生まれてこの方見た音楽映画の中でも、最高のもののひとつです！

そもそもこの映画の企画は、映画の冒頭でフェルナンド・トルエバ監督自身が語っているように、アントニオ・バンデラス主演のコメディ、『あなたに逢いたくて』を撮る時に、自分の好きな音楽で固めようとミッシェル・カミロを音楽監督にしてラテン・ジャズ関係のミュージシャンを使ったことがきっかけだそうです。

この映画は曲と曲の間の短い経緯の説明を除くと、すべて音楽を聴かせて見せるために存在しています。音楽映画と称するもので、よくあるパターンがインタビューやドラマを長々と見せて、曲が少しだけだったり曲の途中でナレーションを入れたり、ぶち切ったりするもの。監督が言い表わしたいものを見せるためにそうしているのですが、ドラマのために存在するサウンドトラックならともかく、音楽映画で音楽を聴きたい人間にとっては不快の上ありません。よくある音楽番組でも、音楽が切り刻まれたりしているのを見ると悲しくなります。私は見てないのですが、友人によると最近も愛知万国博覧会での「渡辺貞夫リズムワールド」の放送でも、曲の最中に遠慮なくナレーションがかぶさっていたそうで。

その点、この映画では「音楽を聴いてくれ！！」という気持ちがよく表れている映画です。舞台装置すらない、見かけはシンプルな構成。カメラ・ワークは見ようによってはちょっとうるさい感じもしないでもありませんが、メロディ担当のみならずバックを支える楽器の動きも頻繁に捕らえています。画面全体に躍動感と喜びを十二分に映し出している映像と言えるでしょう。曲が終わった後もしばらく演奏者の表情を映し出していて、それがまた素晴らしい。また時折、ピアノのペダルから始まって身体の線をなぞるように顔まで移動したりといった動きもあったりします。

昔、まだビデオが普及していなかった頃にはフィルム・コンサートと言って、キャンディーズとかのライブを収録した映画形式のライブ映像上映会があったりしていました。また、『レッド・ツェッペリン 狂熱のライブ』のようにマジソン・スクエア・ガーデンでのライブを中心にした映画もあったりします。この映画はそれに近くもあり、またもっと映画としてのコンセプトが見える映画にもなっています。

そしてこの映画にもドラマはあって、ベゴ・バルデスとカチャーオことイスラエル・ロペスとの夢の共演！！採り上げた曲も ミゲール・マタモロスによるキューバのスタンダード・ナンバーである「黒い涙」＝「Lagrimas Negras」でした。ピアノとベースのデュオによる2人の老人による「対話」にも似た演奏がすばらしく、ため息がでそうでした。この曲自体、昔オルケスタ・ア・ラ・ヘンテでやっていたので、感慨も深いです。

また、ベボ・バルデスがイラケレのリーダーで息子のチューチョ・バルデスと再会して演奏する場面。ピアノ・デュオで「La Comparsa」を演奏しますが、父親の精気溢れる激しくも優しい眼差しが非常に印象的でした。まさに映画ならではの場面でした。

そして、この映画の作られた2000年5月に77歳で亡くなったティト・プエンテ。演奏前に壁画で紹介しているディージー・ガレスピーやカル・ジェイダー、チャーリー・パルミエリらラテン・ジャズを作り上げてきた巨匠と共に同じ時代を歩んだラテン界のマンボ・キングですが、これが最後の姿になってしまいました。相変わらずいたづらっ子のように茶目っ気たっぷりに演奏する姿は、あの年齢にしてまだ亡くなるのが早すぎたとさえ思わせる澆刺とした演奏です。それに答える周りのメンバーも素晴らしく、まさにラテン・ジャズの王道といった演奏を聴かせてくれます。数多くのライブ映像や、『マンボ・キングス わが心のマリア』などの映画にも出演しているのを見ますが、どの映像よりもなんだか身近に感じられるティト・プエンテがそこにいました。

その他、ガトー・バリビエリが音楽活動を中止していたことの述懐も印象に残りましたし、素晴らしいライブ・アクトは挙げていくときりがありませんが、エンディングでの出演者を紹介する演出！このしゃれっ気たっぷりの見せ方もフェルナンド・トルエバ監督ならではのセンスではないでしょうか。とにかく隅々にまで音楽に対する愛情が染み込んでいる気がします。

この映画で採り上げられたラテン・ジャズは、意外にジャズ好きにもサルサ好きにも継子の扱いされかねない存在であったりします。私はラテン・ジャズは大好きで、ポンチョ・サンチェスが来日するといえば見に行き、この映画にも出たパキートやカミロ（は実はそんなに好きじゃないんですが（苦笑））も昔はコンサートに行きました。もっと多くの人に愛好してほしい音楽だと思っています。

この映画で演奏される曲目は以下の通り。

- 1:Panamericana - featuring Paquito D'Rivera
- 2:Samba Triste - featuring Eliane Elias
- 3:Oye Come Viene - Featuring Chano Dominguez
- 4:Earth Dance - featuring Jerry Gonzalez
- 5:From Within - featuring Michel Camilo
- 6:Bolivia - featuring Gato Barbieri
- 7:New Arrival - featuring Tito Puente
- 8:Caridad Amaro = featuring Chucho Valdes
- 9:Afro-Cuban Jazz Suite - featuring Chico O'Farrill

10:Lagrimas Negras - featuring Bebo Valdes & Cachao

11:Compa Gayetano - featuring Orlando 'Puntilla' Rios with Carlos 'Patato' Valdes

12:La Comparsa - featuring Bebo Valdes & Chucho Valdes

ラテン・ジャズが好きな人はもちろん、多くの音楽好きに、ぜひ見てもらいたい映画です。ちなみに『CALLE 54』とは、「Street 54」すなわち、バードランドなどのライブハウスがあるがあるニューヨーク54番街のことだそうです。

【CALLE 54(カジェ54) (CALLE 54) 2000年 スペイン=フランス】

SUPER FOLK SONG ピアノが愛した女。

不世出のアーティスト、矢野顕子が自己の弾き語りアルバム『SUPER FOLK SONG』のレコーディングの様態を撮影したドキュメント映画です。

矢野顕子はどちらかというと非常に特徴的な部分がある音楽家で、特に歌い方や声質については人によって大きな好き嫌いがある感があります。私は昔からCDも多く買いライブも見に行くファンですので、当然この映画も楽しみにして見ました。

スタジオでのピアノを弾きながらの一発録りのレコーディング風景を中心に合間のショットやインタビュー、そして今回の作品の作者である糸井重里氏、鈴木慶一氏、谷川俊太郎氏、三浦光紀氏、宮沢和史氏へのインタビューが合間に挿入されています。

とにかく、スタジオ内での自分をギリギリまで追い込むような音楽に対する真摯な姿勢には圧倒されます。妥協無しに最大限にいいものを作っていくという心の叫びが聴こえて来そうになります。この自分に対する厳しさがあってこそ、あの矢野顕子の愛に包まれたサウンドがうまれるのだなあと納得した次第です。だからこそ、タイトルも「ピアノを愛した女」ではなくて、「ピアノが愛した女。」になったのでしょうか。有形無形にかかわらず、プロフェッショナルとして、職人としてもものづくりに係る基本の姿勢を改めて自分に問う機会にもなりました。

中で私が一番好きな曲は、小室等と谷川俊太郎の手になる「夏が終わる」です。日差しが柔らかくなってきた頃、気がつくといつもこの曲を口ずさみます。

【SUPER FOLK SONG ピアノが愛した女。 1992年 日本】

YMO PROPAGANDA

1983年12月、人気はまだ廃れていない時期に散開と称してグループの解散コンサートをしたYellow Magic Orchestra。その「散開コンサート」の様様を中心に、物語として少年をからめて映像化したものがこの『YMO PROPAGANDA』です。

特筆するようなセリフやストーリーはありません。どうして少年をからめて映像化した映画になったのかは判りませんが、基本的にイエロー・マジック・オーケストラの3人、細野晴臣、高橋幸宏、坂本龍一のライブの様様を撮ったライブ映像が中心になっています（サポート・メンバーとして元ABCのドラマーのデビッド・パーマーが参加）。全国での巡回上映に際してフィルム・コンサートのようになるのを避けたのでしょうか？見る側からすれば、純粋にライブ映像だけの方が好きで、またそれはそれでテレビ放映されたのですが、何にせよ貴重な記録が残ったことについては嬉しいと思います。

今見ても曲自体のクオリティは非常に高いと思いますし、最後のアルバムの曲が中心であるにしても、短い期間にいろいろなスタイルを試した跡もよく判り、ライブ・バンドとしても楽しめるグループでした。

シンセサイザー好きの私自身はそれぞれのソロ活動を除けば、1980年春に福岡市民会館での「テクノポリス2000-20」コンサート（大村憲司が感冒性内耳炎の恐れで急遽エキストラに橋本一子のバンドの藤本敦夫が参加）と、1981年冬に福岡サンパレスでの「ウィンターライブ」でしか生でみることが出来ず、散開コンサートは見に行く事が出来ませんでした（性懲りも無く1992年に東京ドームでの再結成ライブには行きました（笑））。崩壊を暗示するこの映画のラストの海岸でのシーンはちょっと胸がきゅんとなりました。

【YMO PROPAGANDA 1984年 日本】

レッド・ツェッペリン 狂熱のライブ

1970年代に絶大な人気を誇ったロック・バンドであるレッド・ツェッペリン。彼らの貴重なライブ映像を映画館で見ることができたことがあります。

この『レッド・ツェッペリン 狂熱のライブ』はバンドが人気絶頂期にあった1973年7月のUSAはマジソン・スクエア・ガーデンにおける熱狂的なコンサートを中心にして、オフ・ステージも盛り込んだ映画になっています。当時は今のように海外のグループが頻繁に来日するような状況でもなかったし、また家庭用のビデオというものも存在しませんでしたので、テレビの「ヤング・ミュージック・ショー」や、フィルム・コンサートなどが貴重な海外アーティストのライブを見ることが出来る機会でした。そんな中、こういう映画が作られたことは大きかったのではないのでしょうか。

私はロックを聴くのと喫茶店に入るのは不良だと思って幼少期を過ごしたので（本当）、ロックを聴き始めたのはすごく遅かったのです。天文関係の友人がレッド・ツェッペリンのファンで、うちに遊びにくる度にレッド・ツェッペリンのカセット・テープを持ってきてはかけて帰っていくんです（笑）。そういう訳で、私の遅咲きのロック入門はレッド・ツェッペリンでした。ちなみに次にハマったのはキング・クリムゾンで、これはクラシック好きだったことからすんなり入っていました。ということで、この映画はリアル・タイムでは見ていません。解散した後になるのですが、リバイバル上映された時に見て鳥肌が立つような感覚にとらわれました。

冒頭の今見ると笑えるメンバーを順に訪ねるシーン（ジミー・ペイジが振り向いた時にキラーン☆って目が光ってます（爆笑））などもありますが、不動の4人のメンバーによる魂のこもった骨太のロック・サウンドに圧倒されました。映画とはいえ音楽を聴かせることをちゃんと考えているので、インタビューで演奏をズタズタに切ることがないのが助かります。

ライブならではのインプロビゼーションをふんだんに入れた演奏、今は亡きボンゾのドラム・ソロ、メロトロンやディレイといった装置の効果的な使い方など、私には見所はたくさんありました。ちなみにテルミンという楽器を演奏する姿を映像で見たのもこの映画が初めてです。ほとんど効果音的にしか使われていませんが、ケレン味たっぷりのポーズで音を鳴らすジミー・ペイジのカッコよさには影響を受けました（笑）。そういえば龍の刺繍入りのベル・ボトムのジーンズでしたね。

【レッド・ツェッペリン 狂熱のライブ (Led Zeppelin The Song Remains the Same) 1976年 UK】

ストップ・メイキング・センス

『羊たちの沈黙』で有名なジョナサン・デミ監督が、『ブレードランナー』の撮影監督ジョーダン・クローネンウェスを迎えて1984年に製作したライブ・ドキュメント・フィルム。デヴィッド・バーン率いるトーキング・ヘッズが、1983年12月に行なったライブ・コンサートの模様を映し出したものです。日本では1985年の夏に劇場公開されたのですが、上映日を指折り数えて待った記憶がありますね。

この当時のトーキング・ヘッズはデビュー当時とは打って違って、アフリカ系のファンクを取り入れたグルーブ感のあるロックをやっていました。中心メンバー4人に加えてゲスト・メンバーも多く入り、デヴィッド・バーンの歌い方も含めたトーキング・ヘッズ独特のサウンドに、腰が動くダンスブルなサウンドがなかなか好きでした。当時はFMのライブなどでその音を耳にすることはできたのですが、アート感覚溢れるその当時のステージを見ることが出来たのは、この映画に他なりません。ダブダブのズート・スーツ、不思議な動きのパフォーマンス、シンプルながら光の陰影を生かしたステージ・セット、そしてステージの最初から最後まで進行と演出のセンスのよさにはまさに脱帽です。いきなりラジオ・カセット・テープレコーダーを持ってひとりで出てきたのには、完全にやられました。私の中では「カッコいいステージ」のひとつの大きな見本がこのライブだったりします。1曲、トーキング・ヘッズの姉妹バンドでもある（笑）トムトムクラブの演奏があったのも、むちゃくちゃポイントが高いです。

そしてこの映画は、音楽ドキュメント映画についていつも触れているように、音楽を聞かせてくれる映画だったのがとても嬉しいですね。監督のエゴを全面に押し出して、音楽をぶった切ってインタビューやナレーションを差し挟むといった野蛮な行為をしていません。ひたすらライブを映していますが、どう撮ってどう編集すれば見ている人によさが判るのか、なにげないようで実にかゆいところに手が届く映画になっていると思います。こういう音楽ドキュメント映画が増えしてほしいと思う今日この頃です。

【ストップ・メイキング・センス (STOP MAKING SENSE) 1984年 USA】

コヤニスカッティ

音楽ドキュメントやライブではないが、セリフが一切なく音楽が淡々と流れるということで紹介したかった一本。

アメリカン・ネイティブのホピ族のことばで「バランスを失った世界」という意味を表す言葉、『コヤニスカッティ』。この言葉を繰り返し呟く静かな音楽と共に映画は始まります。

MGMのアイ・キャッチャーに始まって、「Francis Ford Coppola Presents」の文字（監督はゴッドフリー・レジオ）。90分弱の上映時間の間、セリフやナレーション、説明に用いるスーパー・インポーズは一切ありません。空から映したり、高速度カメラを使ったり、いろいろな編集テクニックは使っていますが、ただただ画面は自然を始めとする事象を映し出していき、絶え間なく後ろには音楽だけが流れます。

太古を思わせる赤茶けた峡谷、美しく流れる雲、山と湖、雄大にうねる海。徐々に人の証しが現れ、ビルが建ち、人々が行き交い、車が走る。月がビルの間から顔を見せ、遂にはロケットが宇宙を目指して飛び立ちますが…………。

一見風景を見せているだけの環境ビデオのようにみえるそれは、しかし意思を持った脚本の元に、あるものを我々に突きつけます。文明がもたらした今の現状の社会に対する疑問がそこにあるのではないのでしょうか。

全編をミニマル・ミュージックの提唱者の一人であるフィリップ・グラスの音楽が流れています。場面にあわせたシークエンスの演奏は時には祈りにも似た荘厳さを持ち、時には突き放すような冷たさをもって画面を彩ります。

レーザー・ディスクの頃に何度と無く繰り返し見っていますが、テーマ、映像を含めて今なお古さを感じさせず飽きない作品です。

【コヤニスカッティ (Koyaanisqatsi) 1983年 USA】

奥付

映画音楽のおと ～かたすみの映画小屋EXTRA

著者：サンタパパ

初版発行 2010年12月6日
